

授業科目の概要

(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床心理学基幹科目群	臨床心理学原論	臨床心理学の全体像をより実践的に広く理解できることを目標とする。そのために臨床心理学の歴史を踏まえ、その専門性、基本的論点、心理面接の構造や面接経過、心理アセスメントの原則を学ぶとともに、代表的な心理療法論を通して心理面接の特質と心理面接の進め方の特徴、および集団心理療法をはじめとしたグループアプローチ、さらには地域と連携するためのコンサルテーションの方法を、実際の事例を紹介しながら講義を行う。	
	臨床心理面接学原論	臨床心理面接について、講義形式や具体的な事例論文講読演習に加え、専門職大学院の理念に添い、ロールプレイなどを導入して、面接技法、事例の見立て方、事例報告のまとめ方などについて基礎的な技術を習得することを目標とする。臨床心理面接の意義や概念、基本的な技法を修得し、面接形態のなかからは電話受付実務、インターク面接、プレイセラピィ、親面接について、該当する論文や事例論文の講読・ディスカッションを行い、さらにロールプレイを通して臨床心理学の根幹となる知識や技能を体得することを目指す。	
	臨床心理査定演習Ⅰ	心理アセスメントは観察法、面接法および心理検査法によるアセスメントがある。本演習では、まず、概論として臨床心理学における心理アセスメントの位置づけや意義、導入する際の心構えについて学習し、それぞれの方法について学ぶ。その後、具体的な事例を用いて、代表的な心理検査法の実施法や解釈法を学ぶ。高齢者用精神機能検査、投映法、知能検査法等の理論などについて、その施行法から解釈について学ぶ。とくに投映法検査は、専門家によるテスティ体験を通して体験的に学ぶ。	
	臨床心理査定演習Ⅱ	臨床心理査定演習Ⅰを受け、心理検査を用いた実際の事例解釈のあり方を学習する。具体的には、ロールシャッハ法を中心�・バッテリーの組み方、施行法、解釈を代表的な臨床事例や自験例である健常群の事例を用いて行い、それぞれの留意点と心理臨床場面での役立て方、フィードバックのあり方など、立体的な人格理解のあり方について体験的に学習する。臨床群の特徴的なプロトコルを学習するとともに、健常群の事例では、描画（バウム）、SCT、WAIS、ロールシャッハ法を網羅した対象者の心理的力動を推察し、多面的立体的な人物理解を目指す。	

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床心理学基幹科目群	臨床心理面接演習Ⅰ	臨床心理面接について、クライエントとの心理面接契約の方法、事例の見立て方、面接の目標設定の仕方、面接過程を促進するための導入期、展開期、終結期の技法と留意点、などの基本的知識と技能を、事例研究論文から学ぶだけでなく、ロールプレイなどの実際体験を通して、個別支援能力、集団支援能力、地域支援能力に結びついた臨床実践力として習得することを目標とする。	
	臨床心理面接演習Ⅱ	受講生の臨床心理面接についての基礎理解と心理臨床相談室における電話受付、インテーク陪席などの臨床体験について受講生同士が相互にディスカッションを行い、知識と体験を融合し、深化させることで臨床心理面接を実施する構えを養う。さらに、個人カウンセリング、グループセラピー、スクールカウンセリングなどの事例研究論文を題材にして、それぞれの臨床心理面接の受理面接から面接経過の流れ、終結に至るまでのプロセスについて学び、自らの体験と結びつけながら個別支援能力、集団支援能力、地域支援能力を涵養することを目標とする。	
	臨床心理事例研究演習Ⅰ	(概要) 1年次の学習を受け、心理臨床に関わる基礎的理解や実践を基に、最近の理論や技法を体系的・実践的に学習する。臨床心理士に求められる個別支援能力、集団支援能力、地域支援能力、危機介入支援能力を培うこととする。 (2名の教員による共同担当 / 全15回) (3 安部 恒久 / 15回) 集団支援及び地域支援に関する観点について、具体的な事例をもとに指導を行う。 (9 金坂 弥起 / 15回) 個別支援及び危機介入支援に関する観点について、具体的な事例をもとに指導を行う。	共同
	臨床心理事例研究演習Ⅱ	(概要) 1年次の学習を受け、心理臨床に関わる基礎的理解や実践を基に、最新の理論や技法を体系的・実践的に学習する。 (3名の教員による共同担当 / 全15回) (4 中原 瞳美 / 15回) 医療領域での一般診療科目に関する心理臨床のあり方やコラージュに関する内容について指導を行う。 (2 平川 忠敏 / 15回) 福祉と教育領域に関する心理臨床のあり方や自閉症療育関係に関する内容について指導を行う。 (7 落合 美貴子 / 15回) 心理臨床における基本から発展までの表現療法に関する技法や心理臨床の意義について指導を行う。	共同

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床心理学基幹科目群	臨床心理検定実習Ⅰ	<p>(概要) 学内相談室における実際の心理検定を通して、心理臨床における心理検定のあり方の基礎を実践的に学ぶ。</p> <p>(2名の教員による共同担当／全15回)</p> <p>(7 落合 美貴子／15回) 相談事例における知能検査、発達検査、質問紙による性格検査の適切な施行法や解釈のあり方について学習する。</p> <p>(8 高橋 泰夫／15回) 相談事例の心理検定における児童、父母、親族、その他に対する聴き取りのテクニックについて学習する。</p>	共同
	臨床心理検定実習Ⅱ	<p>(概要) 学内相談室における実際の心理検定を通して、心理臨床における心理検定のあり方のより高度な側面を実践的に学ぶ。</p> <p>(2名の教員による共同担当／全15回)</p> <p>(6 松木 繁／15回) 相談事例における投映法による性格検査の適切な施行法や解釈のあり方について学習する。</p> <p>(9 金坂 弥起／15回) 発達障害、神経症、統合失調症等、病理や障害の特性による心理検定の方法とあり方について学習する。</p>	共同
	臨床心理面接実習Ⅰ	<p>(概要) 学内相談室における実際の心理面接を通して、心理臨床における心理面接のあり方の基礎を実践的に学ぶ。</p> <p>(2名の教員による共同担当／全15回)</p> <p>(6 松木 繁／15回) インテーク面接から来談契約の受付、構造化された臨床心理面接に至るまでの流れについて実習を通して理解する。</p> <p>(7 落合 美貴子／15回) わが国における代表的な臨床心理面接技法に関して、心理面接を通して体験的に学習する。</p>	共同
	臨床心理面接実習Ⅱ	<p>(概要) 学内相談室における実際の心理面接を通して、心理臨床における心理面接のあり方のより高度な側面を実践的に学ぶ。</p> <p>(2名の教員による共同担当／全15回)</p> <p>(8 高橋 泰夫／15回) 臨床心理面接実習の発展的課題として、より効果的で効率的な臨床心理面接を行うために必要な技法の習得を目指す。</p> <p>(9 金坂 弥起／15回) 神経症圏、精神病圏、人格障害圏など、対象別の臨床心理面接のあり方について実践的に学習する。</p>	共同

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床心理学展開科目群	臨床心理関連行政論	<p>心理臨床業務は単に臨床心理学という専門的知識、技術の研鑽に努めておればよいというものではない。所属する組織には臨床業務を遂行する上で遵守されるべき法的な制約、服務規律、倫理というものが厳然として存在する。こうした倫理問題や法律問題の理解を深めるために、実際的な事例を基にグループでのディスカッションを通して演習を進めていく。</p> <p>また心理臨床業務は法的制約を持つ他機関との連携の中で成り立っている。こうした点についても、具体的な事例を基にして、少年司法・矯正において心理臨床を円滑に遂行するために必要な、法的枠組や関連する機関との連携のあり方、心理臨床家の役割について理解を深める。</p>	
	臨床心理地域援助事例研究演習Ⅰ	<p>(概要) 学内実習を通して得られた心理臨床の力を、臨床心理地域援助に活用できるような臨床実践能力の定着・深化を図る。 (5名の教員による共同担当 / 全15回) (9 金坂 弥起 / 全15回)</p> <p>地域援助のできる臨床心理査定の基礎的能力を養う。 (7 落合 美貴子 / 全15回)</p> <p>地域援助のできる臨床心理面接の基礎的能力を養う。 (3 安部 恒久 / 全15回)</p> <p>地域援助を行う臨床心理士としての基本的視点を学ぶ。 (2 平川 忠敏 / 全15回)</p> <p>地域援助を行う臨床心理士としての倫理を学ぶ。 (5 服巻 豊 / 全15回)</p> <p>地域援助を行うための基本姿勢を学ぶ。</p>	共同
	臨床心理地域援助事例研究演習Ⅱ	<p>(概要) 個別、集団、地域、危機介入などの臨床心理地域援助能力を発展的に高める。 (4名の教員による共同担当 / 全15回) (8 高橋 泰夫 / 全15回)</p> <p>地域援助における個別支援の実践力を身につける。 (6 松木 繁 / 全15回)</p> <p>地域援助における地域支援の実践力を身につける。 (1 山中 寛 / 全15回)</p> <p>地域援助における集団支援の考え方を身につける。 (4 中原 瞳美 / 全15回)</p> <p>地域援助における危機介入の考え方を身につける。</p>	共同
	臨床心理地域援助事例研究演習Ⅲ	<p>(概要) 地域援助者としてより高度な臨床実践能力を身につける。 (4名の教員による共同担当 / 全15回) (7 落合 美貴子 / 全15回)</p> <p>福祉領域における地域援助の実践力を身につける。 (8 高橋 泰夫 / 全15回)</p> <p>司法・矯正領域における地域援助の実践力を身につける。 (1 山中 寛 / 全15回)</p> <p>集団支援におけるより高度な考え方を身につける。 (4 中原 瞳美 / 全15回)</p> <p>危機介入におけるより多面的な考え方を身につける。</p>	共同

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床心理学展開科目群	臨床心理地域援助事例研究演習IV	<p>(概要) 地域援助者として必要な総合的臨床地域援助能力を身につける。 (5名の教員による共同担当 / 全15回) (6 松木繁 / 全15回) 教育領域における地域援助の実践力を身につける。 (9 金坂弥起 / 全15回) 医療領域における地域援助の実践力を身につける。 (3 安部恒久 / 全15回) 臨床地域援助における総合的な視点を身につける。 (2 平川忠敏 / 全15回) 地域援助におけるコミュニティ心理学の視点を身につける。 (5 服巻豊 / 全15回) 種々の文献を通して多様な地域援助のあり方を学ぶ。</p>	共同
	臨床心理地域援助実習I	<p>(概要) 学外実習により、心理支援の実践力を修得することを目的とする。各機関の機能とスタッフの職務及び臨床心理士の役割について学習する。 (4名の教員による共同担当/全15回) (7 落合美貴子/15回) 福祉領域の各実習機関について理解を図る。 (9 金坂弥起/15回) 医療領域の各実習機関について理解を図る。 (8 高橋泰夫/15回) 司法・矯正領域の機関について理解を図る。 (6 松木繁/15回) 教育領域の各実習機関について理解を図る。</p>	共同
	臨床心理地域援助実習II	<p>(概要) 学外機関における心理査定のあり方について、基本的な考え方と技術を学び、臨床心理査定の実践力を身につける。 (4名の教員による共同担当/全15回) (9 金坂弥起/15回) 医療領域における臨床心理査定の実践力を身につける。 (8 高橋泰夫/15回) 司法・矯正領域における臨床心理査定の考え方を身につける。 (6 松木繁/15回) 教育領域における臨床心理査定の実践力を身につける。 (7 落合美貴子/15回) 福祉領域における臨床心理査定の実践力を身につける。</p>	共同
	臨床心理地域援助実習III	<p>(概要) 学外機関における心理面接のあり方について、基本的な考え方と技術を学び、臨床心理面接の実践力を身につける。 (4名の教員による共同担当/全15回) (8 高橋泰夫/15回) 司法・矯正領域における臨床心理面接の考え方を身につける。 (6 松木繁/15回) 教育領域における臨床心理面接の実践力を身につける。 (7 落合美貴子/15回) 福祉領域における臨床心理面接の実践力を身につける。 (9 金坂弥起/15回) 医療領域における臨床心理面接の実践力を身につける。</p>	共同

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床心理学展開科目群	臨床心理地域援助実習Ⅳ	<p>(概要) 学外機関における集団支援及び地域支援のあり方について基本的な考え方と技術を学び、心理支援の応用的実践力を身につける。</p> <p>(4名の教員による共同担当／全15回) (6 松木繁／15回) 教育領域における集団・地域支援の実践力を身につける。</p> <p>(7 落合美貴子／15回) 福祉領域における集団・地域支援の実践力を身につける。</p> <p>(9 金坂弥起／15回) 医療領域における集団・地域支援の実践力を身につける。</p> <p>(8 高橋泰夫／15回) 司法・矯正領域における集団・地域支援の考え方を身につける。</p>	共同
	総合的事例研究演習Ⅰ	<p>(概要) 2年間の専門職学位課程のまとめとして、臨床心理士業務の4つめの柱であるリサーチ能力を養成するため、事例論文のあり方を学ぶ。</p> <p>(9名の教員による共同担当／全15回) (1 山中寛／15回) (2 平川忠敏／15回) (3 安部恒久／15回) (4 中原睦美／15回) (5 服巻豊／15回) (6 松木繁／15回) (7 落合美貴子／15回) (8 高橋泰夫／15回) (9 金坂弥起／15回) 9名の担当教員により、事例論文執筆に際しての視点のあて方や論文の書き方などを個別に指導する。</p>	共同
	総合的事例研究演習Ⅱ	<p>(概要) 総合的事例研究演習Ⅰを受け、主に自分が担当した事例とともに事例論文執筆や発表を通して臨床体験を根づかせる。</p> <p>(9名の教員による共同担当／全15回) (1 山中寛／15回) (2 平川忠敏／15回) (3 安部恒久／15回) (4 中原睦美／15回) (5 服巻豊／15回) (6 松木繁／15回) (7 落合美貴子／15回) (8 高橋泰夫／15回) (9 金坂弥起／15回) 9名の担当教員により、事例の選択、テーマの絞り込み、キーワード決定、論文の構成、面接過程のまとめ方など、事例論文執筆の具体的な段階に関する指導を個別に行い、2年間の学習の総括を行う。</p>	共同
選択必修科目群	領域科目群 学校心理臨床論	不登校、いじめ、暴力行為など学校における子どものこころの問題は多様化し山積している。本演習では、こうした諸問題の解決のために必要な学校臨床心理学のあり方について、実際の学校場面を想定したうえで、ロールプレイやグループディスカッションを通して体験的に学ぶ。スクールカウンセラー業務の柱である児童・生徒、さらには保護者へ向けての個別的カウンセリングや教職員へのコンサルテーションの実際を学ぶだけでなく、学級集団、学校集団、さらには、地域を含めた学校コミュニティを見立てる力を養う。さらには、ストレスマネジメント教育など学校カウンセリングの新しい動向についても体験学習を交えながら体験的に学ぶ。	

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 領域科目群	福祉心理臨床論	福祉領域は、臨床心理士の活動する領域の中でも歴史が古く、かつ携わる人の多い領域である。しかし、一口に福祉領域といつても、対象者の年齢、状態像等により心理臨床支援のあり様はさまざまである。本演習では、母子、児童、障害者(身体・知的・精神)、高齢者、女性等の各福祉対象者の今日的様相を理解し、それに対応する心理臨床支援のあり方を演習を通して実際的に学ぶことを目的とする。さらに、対象者にサービスを行うさまざまな機関の機能や現在問われている課題等も合わせて学び、福祉領域における心理臨床のあり方を模索する。	
	医療心理臨床論	本演習では、医療領域、特に精神科医療現場において必要な基礎的知識、精神疾患に対する理解、臨床心理士の業務内容や他職種との連携のあり方、援助職として求められる資質などについて、可能な限り網羅的に概観する。その上で、医療領域における心理的アプローチの意義や必要性、臨床心理士に求められる役割について理解を深めていく。授業はロールプレイやグループディスカッションを中心に、受講生同士の相互啓発を図りながら体験的に理解を深めていく。	
	司法・矯正心理臨床論	本演習では、主として少年犯罪をとりあげ、犯罪心理学の知見を取り入れながら、非行行動の原因、動機解明の在り方、各種非行の心理的メカニズムについて理解を深める。さらに、立ち直りを図るために処遇について、その現状、改正少年法に盛られた処遇内容、更に今後改正が予定されている処遇システムの変更内容とその問題点にまで理解を進める。なお、個人情報保護の観点から生のケースを使用できないが、公刊された文献での事例検討を通してロールプレイやグループディスカッションを行い、実際的に理解を深める。	
	産業心理臨床論	本演習は、臨床心理士が産業領域で心理臨床活動を行うに際しての理論と実践を、演習を通して学習することを目的とする。臨床心理士としてカウンセリングやアセスメントの臨床心理学を基礎としながらも、産業領域においては、同時に職場集団や会社組織に関わる産業・組織心理学やコミュニティ心理学が必要とされる。自発的な問題意識の発展と、集団に関する感性を養い、グループ・ダイナミックスを理解するために、積極的に少人数でのディスカッションやグループ・ワークを授業方法に導入する。	
選択必修科目群 発達科目群	児童期心理臨床論	児童は社会的状況の中で成長するものであり、認知能力、情緒的反応、関係性の能力、社会的行動等の児童の発達の様々な側面が研究されてきた。そして今日、児童を取り巻く環境はじわじわと児童にとって窮屈なものになり、その中で堪え切れなくなった児童は、さまざまな不適応反応を示す。本講義では、児童期におけるアイデンティティ形成過程について講じるとともに、様々な臨床的症候群や児童虐待などの問題をとりあげ、心理臨床家としての心理的援助のあり方について考える。	

授業科目の概要 (臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 発達科目群	青年期心理臨床論	自我心理学の発達と共に自我の発達過程が重要視され、特に、青年期におけるさまざまな発達課題やアイデンティティ形成の問題は、青年期の精神病理との関連において重要とされている。本演習では、青年期の心と発達課題を第二の個体化過程(Blos)と捉え、先ず、各段階での発達課題について概観する。その上で、ひきこもり、リストカットなどの自傷行為、摂食障害など、現代青年の特徴的な状態像を発達的観点から捉え直し、適切な心理臨床的援助のあり方についてロールプレイやグループワークなどの演習を通して学ぶ。	
	成人・老年期心理臨床論	近年の発達観やライフサイクルの変化を背景とした、成人期以降の発達課題や精神機能、成人後期・老年期における心理的適応について学習する。まず、加齢・老化にともなう心理的影響について、認知機能、パーソナリティ側面、ストレスについて、精神医学、神経心理学領域の文献を精読する。そのうえで、成人以降を対象として、心理臨床、医療・福祉領域で施行されている心理査定、心理療法、ストレス支援の知識・技術を学び、心理臨床家としての専門性と他職種との連携のあり方を学ぶ。	
	発達障害者心理臨床論	発達障害者について、診断学的な基礎知識ならびに行動面、情緒面に現れる諸特徴について理解を深めることを目的とする。また、平成17年4月より施行された発達障害者支援法においては、早期発見の必要性、発達支援、生活支援、就労支援ならびに家族支援について適切な施策をするよう明記されている。教育、福祉、医療の現場で臨床心理士に求められる発達障害者に関する必要な基礎知識、発達アセスメント法から発達障害を抱えた本人、家族も含めた生活支援について体系的に学習する。	
選択必修科目群 技法科目群	エスノグラフィック心理臨床論	現在、わが国における心理臨床は、クリニックや相談機関等の非日常場面における伝統的な面接の場から、スクールカウンセリングや被害者支援等、対象者の生きている日常世界に入り込んでの臨床活動にシフトしてきている。これらの日常場面における心理臨床の効果的な展開のためには、対象者の生きる世界を文脈ごと理解することが必須である。本授業では、学校、病院、施設等日常的臨床現場の適切な見立てや効果的支援のために必要なフィールドワークの技法の基礎を体験的に学ぶ。	

授業科目の概要 (臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 技法科目群	投映法論	本演習では、1)投映法の特徴について理論的および実践的に理解し、2)実施および解釈の基本的技法を習得することを目標とする。1)については、客観性（信頼性・妥当性）と共感性（クライエントの内的世界の追体験）の両面を大切にする姿勢を学ぶ。2)については、特にTAT(Thematic Apperception Test)を中心取り上げて、その施行法と所見の書き方をはじめとして、病理水準やパーソナリティによる特徴、形式分析、系列分析、力動的解釈などについて学習する。	
	遊戲療法論	クライエントを「遊戯（プレイ）」を通して、理解し援助していく遊戯療法について、遊戯治療過程でセラピストが必ず出会うと思われる重要な具体的課題に焦点をあてて講義を行う。セラピストは具体的課題を丁寧に自分の体験として受け止め克服することによって遊戯療法家として成長していくものと考えるからである。できるだけ具体的事例を取り上げながら、遊戯（プレイ）の理解や援助にどのように関わるとよいのか学習を進める。	
	グループ・アプローチ論	臨床心理学におけるグループアプローチは、病院や施設での患者（クライエント）や施設利用者の適応的な方向への行動変容や人格の成長・発達を援助することが目的であり、そのための集団による言語的・非言語的な心理療法的介入の方法である。本講では、まずグループアプローチの基本的な理論を学習するとともに臨床適用のための基本的な方法について学ぶ。さらに、代表的なグループアプローチの一つであるサイコドラマの理論と方法を学び、臨床実践への応用法を学ぶ。	
	ストレスマネジメント論	文化・宗教・社会システムという広い視野からひとの生活と健康行動及びその心理を論じ、ストレスに対するケアと予防に関する理論を紹介する。さらに、ストレスマネジメントを“生活に対する営み”と捉え、漸進性弛緩法や自律訓練法などのセルフ・リラクセーションとペア・リラクセーションの観点から心理社会的ストレス過程における情動焦点型コーピングと問題焦点型コーピングの効果について論じる。	

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目群 技法科目群	臨床動作法論	臨床動作法の理論を学ぶだけでなく、体験治療理論の観点からさまざまな心理的不自由を呈するひとに対する理解を深め、参加者同士がペアになって援助者と被援助者を体験し、それぞれの動作体験やそれに伴う体験に基づき体験様式と体験内容について学び、いかに体験促進的援助を行うかについて議論を深める。さらに、肢体不自由児、自閉症児、知的障害児に動作法を適用する場面に陪席し、神経症、心身症等について事例研究論文の講読によって、臨床動作法の適用について理解を深める。	
	被害者支援論	トラウマや PTSD（外傷後ストレス障害）に関する臨床心理学的知見を深め、危機的な事件、事故、災害に巻き込まれた後の被害者・被災者に対する支援（ポスト・トラウマティック・カウンセリング／ポスト・トラウマティック・プレイ・セラピー）のあり方を学ぶ。特に、人的災害、自然災害による PTSD について理解し、特に、学校における緊急支援のありようについて理解し、臨機応変に即時対応できるような援助のあり方について学習する。	
選択基礎科目群	臨床心理学入門	心理学におけるパーソナリティ理論の発展、臨床心理学における理論についての基礎知識を習得する。各論として、個別支援の歴史的理論である精神分析理論、集団支援のエンカウンター・グループと心理劇、地域支援のベースとなるコミュニケーション心理学（基礎と臨床）についての基礎知識を習得し、臨床心理学の専門教育課程を補う。	
	学習・行動心理学特論	我々を取り巻く環境は常に変化している。この流動化した環境でうまく生きていくためには、我々は常に新しいことを学んで行動していかねばならない。本年度の講義では、この学習のメカニズムについて行動学的、生理学的に概説した上で、系統発生的および個体発生的見地から、学習の適応機構としての位置付けを考察する。授業では、単に講義を聞くのみではなく、毎回レポーターが与えられたテーマについて調べてきたことを発表し、それをもとに全体で討論を行う。	

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択基礎科目群	認知心理学特論	生活体の本質は行動にあり、行動の本質は学習にある。また学習が生じるのは記憶というメカニズムが存在するためであり、学習の本質は記憶にある。また記憶されるものは、感覚や感情といった経験である。では、感覚や感情とはいっていい何か。このように、本講義では私たちヒトを含む生活体の持つ様々な機能を統一的な視点から概観することにより、基礎的な生体機能の理解とともに、それがどのように臨床援助に役立つかを考える。講義を中心に進めるが、必要に応じて視聴覚教材等も効果的に盛り込む。受講者は既にある一定レベルの知識を有していると思うが、再度視野を広げるという視点から積極的に参加して頂きたい。	
	生活環境特論	われわれの行動の多くは、自己を取りまく環境への適応の試みとして理解することができるが、なかでも他者は最も大切な環境の一つである。他者に対して適切な行動をし、他者との間に良好な人間関係を築き上げるために、他者の「感情、意図、性格、態度、能力、予想される行動」について理解することである。本講義では、社会的欲求、社会的認知、社会行動、集合行動について、科学的に理解することを目的とする。	
	生涯発達論	昨今の社会の急激な変化（自然及び生活環境の悪化、家庭機能の不全化など）によって、人の人格発達の過程は大きな影響を受け揺らいでいる。幼児虐待、不登校から引きこもりへ、青少年の病的な犯罪、中高年の自殺や危機などといった現象は、その背景にある発達的問題の解明と解決を迫っており、その要請に貢献できる研究分野として生涯発達（life-span development）心理学がある。本講義では、生涯発達の各段階の特徴的テーマとそれにまつわる臨床的問題に関する諸研究について学ぶ。	
	コミュニティ心理学特論	コミュニティ心理学は、悩める個人とその環境に同時に働きかけ、両者の適合性の改善を図ろうとするものである。個人を診断・治療するだけでなく、その環境をも分析しそこへ介入できることをこの講義の目的とする。そのためにはまず、コミュニティ心理学誕生の歴史、基本的な考え方、危機介入やコンサルテーションなどの方法論を講義する。そして、各フィールドにおいて展開されているコミュニティ心理学的実践例について学び、所謂、コミュニティセンスを高めるようになる。	

授業科目の概要			
(臨床心理学研究科臨床心理学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択基礎科目群	臨床精神医学特論	健康には、身体的健康と精神的健康があるが、両者は相互に深く関係している。講義では、児童期から老年期に渡る全ての年代に発症する精神疾患の概要について講義を行い、精神と身体の関わりについての理解や、精神疾患の治療法や予防について学習してもらう。特に、実際の患者さんへ接することを想定した実践的な対応や注意点について重点を置く。一方的な講義にならないように、適宜、意見や感想を述べさせる時間を設ける。	
	臨床精神薬理学特論	医薬品の作られる開発段階から商品化されるまでの創薬プロセス、処方薬としての化学名を商品名、先発医薬品と後発医薬品薬の相違を知り、くすりを身近に感じる知識を習得し、臨床心理士がくすりのことを知る構えについて学ぶ。その上で、向精神薬：抗精神病薬、抗うつ薬、抗不安薬、睡眠薬などのこころの病に用いられる薬に精神薬理学的知識を得て、医師や薬剤師とコラボレートする能力と服薬を支えることを通したクライエントの生活支援のあり方について学ぶことを目標とする。	

1. 授業の概要

臨床心理学の全体像をより実践的に広く理解できることを目標とする。そのために臨床心理学の歴史を踏まえ、その専門性、基本的論点、臨床アセスメントの本質、心理アセスメントの原則を学ぶとともに、代表的な心理療法論を通して心理面接の特質と心理面接の進め方の特徴、および集団心理療法をはじめとしたグループアプローチ、さらには地域と連携するためのコンサルテーションの方法を、実際の事例を紹介しながら講義を行う。

2. 授業の内容

①臨床心理学の専門性について講義する。臨床心理学ではこれまで「人間」をどのように取り扱ってきたのか、その歴史をふりかえり、現在、人間が直面している諸問題と臨床的介入の有効性と限界について考え、臨床心理学における専門性とは何かを学ぶ。

②臨床心理学の人間性に対する基本的な見解と論点を学ぶ。臨床心理学の基本的問題である人間観、意識、動機、人間関係といったものを臨床心理学はどのように考えるのか、三大流派である精神分析、行動療法、人間性・実存療法を中心に講義する。

③臨床アセスメントの本質について学ぶ。アセスメントにおけるコミュニケーション、面接において配慮すべき倫理、初回面接の意義、非言語的コミュニケーションの意義、などの基本的なことを中心に、その本質とは何かを講義する。

④心理アセスメントの原則を学ぶ。クライエントにとっての心理検査の意味、心理検査の価値判断基準の一般的原理、心理検査の選択などの基本的問題を、日常の臨床場面で用いられることが多い人格検査や知能検査をとりあげて講義する。

⑤心理アセスメントと心理療法の関連について学ぶ。クライエントに関する心理学的数据の読み取りとその解釈、およびそれを心理療法に活用していくこと、クライエントに伝えること、あるいは総合して臨床的所見を作成することについて、心理療法との関連で講義する。

⑥心理療法と呼ばれるものの本質は何かを学ぶ。とくに「転移」「自己一致」「行動変容」といった心理療法に特有の概念を中心に治療関係に焦点を当てて講義する。また理解を深めるために、種々の心理面接法の共通点と差異点は何かをも講義する。

⑦心理療法の本質を日常の人間関係との関連において理解するために、中間評価としてレポートの提出を課す。日常の面接と心理療法における面接の違いについてレポートを求め、レポートによって明確になった問題点を小グループにより討論を行う。

⑧心理面接過程についての理解を深める。一般に心理療法と呼ばれるものは、どのような心理面接過程を示すものなのかを理解するために、典型的な事例の開始から導入期、発展期、終結期と一連の発展過程を提示する。

⑨心理面接過程におけるセラピストの役割について学ぶ。面接過程のそれぞれの発展段階においてセラピストがクライエントに働きかけていくためには、どのようなアセスメントおよび見立てを必要とするのかを講義する。

⑩集団心理療法について学ぶ。集団心理療法の発展の歴史、集団心理療法の特徴、介入のための諸技法および実際に実施する場合のセラピストの役割について理解を深めるとともに、集団心理療法には個人療法と比較してどのような利点あるいは特徴があるのかを講義する。

⑪グループアプローチの諸技法について学ぶ。エンカウンターグループ、家族療法、などの集団を媒介として個人の変化を促進するアプローチについて、リーダーであるセラピストやファシリテーターの問題を個人と集団の両方を見立てる視点から講義する。

⑫臨床心理学における最近の動向について学ぶ。ブリーフ・サイコセラピー、フォーカシング、ナラティブ・アプローチなどの新しく生まれてきたアプローチを、その誕生の意義、有効性、批判点などを明確にしながら講義する。

⑬心理療法におけるリサーチについて学ぶ。心理療法に関する効果研究、過程研究、個別的要因の研究を概観し、研究計画と方法論がもつ問題点を明確にしたうえで、臨床現場とリサーチが乖離するのではなく、より連携するための視点について講義を行う。

⑭地域社会との連携および介入について学ぶ。クライエントを理解し援助していくにあたって地域社会との連携協力をどのように進めていくとよいのかを、スクールカウンセリングを例にとりながらコンサルテーションの方法を含めて講義する。

⑮まとめと総合的評価。臨床心理学の今後の可能性と課題についてのレポートを課し、論点を明確にしたうえで、小グループに分かれて討論を行い、最後にまとめの講義を行う。

3. テキスト

- ・大塚義孝他編『臨床心理学全書（全13巻）』誠信書房
(あらかじめ読んでおくべき章を全書の中から指定する)
- ・毎回、次回の講義で紹介する事例研究論文を配布する。

4. 参考図書

- 河合隼雄他編『臨床心理学大系（全20巻）』金子書房
下山晴彦・丹野義彦編『講座 臨床心理学（全6巻）』東京大学出版会

5. 成績評価方法

出席30%，討論への参加度30%，課題レポート40%とし、総合的に評価する。とくに授業のなかでの積極的な討論、および配布された事例研究論文に対する独自のコメントに対しては高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17:00～18:00 E-mail address: jhp@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

配布された事例研究論文を必ず読み、論点および質問事項を確認したうえで、出席すること。

1. 授業の概要

臨床心理面接について、講義形式や具体的な事例論文講読演習に加え、専門職大学院の理念に添い、ロールプレイなどを導入して、面接技法、事例の見立て方、事例報告のまとめ方などについて基礎的な技術を習得することを目標とする。臨床心理面接の意義や概念、基本的な技法を修得し、面接形態のなかからは電話受付実務、インテーク面接、プレイセラピイ、親面接について、該当する論文や事例論文の講読・ディスカッションを行い、さらにロールプレイを通して臨床心理学の根幹となる知識や技能を体得することを目指す。

2. 授業の内容

- ① 授業のガイダンスを行う。次いで、心理臨床に関する倫理に関して、臨床心理士資格認定協会から出ている「臨床心理士倫理規程」「倫理綱領」をもとに、具体的な事例を挙げながら講義し、臨床心理士としての倫理のあり方や個人情報保護法などの法律との関連性について学習する。
- ② 東山紘久著「臨床心理面接技法を中心」を用いて、臨床心理面接の意義や知識の獲得、臨床体験、人格の陶冶、総合学習としての事例研究など、クライエントに接する者としてのあり方について学習する。次いで、代表的な技法である、精神分析理論 (Freud)、分析心理学理論 (Jung)、来談者中心療法 (Rogers) などの理論を学習する。
- ③ 各種心理療法の理論や技法に関して、その歴史的位置づけを学習する。自分が関心を持っている理論や技法が、歴史の流れを汲みどこに発展して行っているのか、他の技法とどのように繋がっているのか、心理療法の全体の流れの中でどの位置にあるのかを修得し、心理療法の体系的理解を養う。
- ④ 本学心理臨床相談室活動の一環である電話受付について、ロールプレイを行う。各自が詳細なプロフィールのある仮想事例を準備し、二人組で電話受付シートに基づいた体験実習を行う。その後、質疑応答により疑問や不安その他の体験を出し合い、電話受付の心理面接としての意義を深化させる。
- ⑤ 前回④の電話受付体験実習を元に、授業担当教員による電話受付に関する論文を用いて、大学附属の心理臨床相談室における電話受付の位置づけを学習し、さらに半構造化面接としての電話受付の意義とその限界、話者の語りに耳を傾け、インテーク面接につないでいく姿勢など日常の電話受付活動に般化すべく、理論の深化を図る。電話受付に関するレポート課題を課す。
- ⑥ 電話受付から心理療法への流れをつかむべく、山中康裕著『初回面接の目指すもの』を講読演習の形で読み進め、質疑応答や補足を通して、心理面接に際してのセラピスト側のあり方や留意点、特に初回での必要な配慮や視点、そして援助観の持ち方などについて学習する。
- ⑦ プレイルームを用いて、実際に二人組となりプレイルームの遊具を用いて遊びを行う。その後、教員がクライエント役、受講生がセラピスト役となりプレイセラピイを実習し、「遊び」と「プレイセラピイ」の相違を体験し、それを発表しあい、プレイセラピイへの関心・動機を高める。この回は2つの「プレイ」の相違に関するレポート課題を課す。
- ⑧ プレイセラピイの3つの技法について講義し、プレイセラピイの心理面接における歴史的流れや、理念・意義について学習する。なかでも「アクズラインの8つの原則」を中心にプレイセラピストのあり方を学習し、前回⑦の体験やレポートをもとにした質疑を行い、「日常の遊び」と「プレイセラピイ」の共通性や相違性を学習するとともにセラピストとしてのあり方を深化させる。
- ⑨ 前回⑧前々回⑦の理論と実習体験を元に、この回は、各自が詳細なプロフィールのある仮想事例

を準備し、二人組でプレイセラピィの体験実習を行う。その後、質疑応答により体験での疑問を出し合い、プレイセラピィの治療的意義を体験的に深化させる。プレイセラピィに関するレポート課題。

⑩ プレイセラピィ理論の理解と知識を深化させる目的で村瀬嘉代子著『プレイセラピストに求められるもの』山中康裕著『遊戯療法のコツ』などの論文講読を通してプレイセラピィにおけるセラピストのスタンスや、プレイセラピィ場面で求められるバランス感覚や生身性のある関わり方を学習する。

⑪ 紀要などに掲載されている大学院生が担当した心理面接論文を用いて、初心者セラピストに共通する不安や課題、よい点、スーパービジョンやケース・カンファレンスによる支えなどを読みとることを通して、心理臨床相談室でのケース担当への動機づけを高める。感想レポートを提示。

⑫ ベテランの臨床心理士による心理面接論文を用いて、そこに流れる心理臨床の理念や技法の特徴を読みとり、心理療法としてどこが効果的であったのかについてディスカッションする。さらに、事例研究としての心理療法のあり方や書き方についても学習し、学問としての心理療法の視点を培う。

⑬ 森田美弥子ら著の母親面接に関するレビューを講読し、各々のスタンスを確認し、次いで、馬場禮子著「児童面接と親面接」を通して母親面接（親面接）の際ににおける特徴的なスタンスの持ち方を学習する。また、セラピストの年齢や熟達度による母親（親）に対する特有の逆転移の相違に関する講義を通して母親（親）面接の特有性について修得する。

⑭ 母親面接に関する事例研究論文講読を通して、⑬で学習した母親面接の特徴を抽出し、さらに院生が母親面接を担当する際の留意事項や心構え、本人面接との共通性や相違性について、質疑を通して深化させる。レポート課題として、「事例研究論文へのコメント」を課す。

⑮ ⑭で課したレポート課題を通して、心理面接の基礎的な理解や心理面接での力動的理解のありかたを質疑にて確認し、各自の心理面接に関する理解度を把握する。心理療法の意義や面接治療効果とその限界、セラピストのあり方などについてまとめを行い、理論や知識の深化を図る。

3. テキスト

特に指定しない。

4. 参考図書

雑誌『臨床心理学』各号 金剛出版

馬場禮子著『精神分析的心理療法の実践』岩崎学術出版社

5. 成績評価方法

出席 20%、受講態度 30%、授業間のレポート課題 20%，最終レポート 30%の割合で、総合的に評価する。授業の経過の中で 3 回のレポート課題を課し、これも評価に加える。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17:00~18:00

E-mail address:nakahara@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

遅刻・欠席厳禁、レポート提出日厳守のこと。

授業状況によっては、内容の順番を変更することがある。

途中にはレポーター形式を導入することがある。

1. 授業の概要

心理アセスメントは観察法、面接法および心理検査法によるアセスメントがある。本演習では、まず、概論として臨床心理学における心理アセスメントの位置づけや意義、導入する際の心構えについて学習し、それぞれの方法について学ぶ。その後、具体的な事例を用いて、代表的な心理検査法の実施法や解釈法を学ぶ。高齢者用精神機能検査、投映法、知能検査法等の理論などについて、その実行法から解釈について学ぶ。とくに投映法検査は、専門家によるテスティ体験を通して体験的に学ぶ。

2. 授業の内容

- ① 授業のガイダンスを行い、心理アセスメントの観察法、面接法、心理検査法に関する講義を行う。次いで、テスティ体験の一貫として TST と BAUM を実習する。さらに、本授業の特徴である専門家によるロールシャッハ法・テスティ体験の説明の後、テスターの割り振りを行い、意識づけを行う。SCT を次回までの課題として提示し、さらにレポート課題 1「テスティ体験の感想」を提示する。
- ② 心理検査の意義や心理検査を導入するにあたっての心構えを馬場禮子著「臨床査定技法を中心に」を通して学習し、倫理的配慮や専門家としての姿勢を体得する。次いで、前回実施した TST と BAUM、SCT について、具体的な事例を用いながらその意義と解釈法を学習する。
- ③ 高齢者の心理に関する講義の後、高齢者に導入される心理検査の基本的種類について講義形式で学習する。その後、スクリーニング・テストとして代表的な精神機能検査である HDS-R、MMS について実習を通して学習し、その相違や、高齢者に導入する際の留意点や所見の書き方を学習する。
- ④ 知能検査法の一つである WAIS の概要や実施法、解釈法について具体的な事例のプロフィールなどを用いたものを講義形式で学んだ後、実際の WAIS 器具を用いて各設問の実施法を実習し、具体的な実施用法を学び、さらに所見の書き方を学習する。
- ⑤ 投映法の持つ意味について、なぜ投映法から内的世界が推察できるのかという成り立ちを講義・ディスカッション形式で学ぶ。そのなかで投映法の種類やその意識レベルの違いなども学習し、具体的なテスト・バッテリーの組み方を学習する。
- ⑥ 名大式ロールシャッハ法の理念と概要を学習した後、ロールシャッハの実施法について講義形式で学び、実際に二人一組になってロールシャッハ法の導入から自由反応段階、質疑段階、限界吟味までをロールプレイによって学習し、その後、疑問点などを質疑応答で吸い上げ理解を深める。
- ⑦ 名大式ロールシャッハ法におけるスコアリングの仕方について講義形式で学ぶ。ここでは Location, Determinant, Content, Popular, Affect, The Thinking Process and Communicating Style について、それぞれのスコアの意味について体系的に学習し、さらにカテゴリー間の有機的な関連性について講義を通して理解した上で、ブランクシートへの記入方法を学習する。
- ⑧ ⑦で学習した知識を元に、実習用の健常群のロールシャッハ事例を用いて、個別あるいはグループでスコアリングの実習を行い、個別あるいはグループで結果を発表し、スコアリングの仕方や迷われる場合のスコアのあり方について体験的に学習する。発表を通して各自の理解度を把握する。
- ⑨ スコアリング結果の計算の仕方を学習し、⑧で用いた実習用健常群ロールシャッハ事例を用いて、実習する。さらに数値化されたものがどのような臨床的な意味を持つかを講義形式で理解していく。レポート課題 2 として「自分がテスティ体験で実施したロールシャッハ法のスコアリングと計算まで」を課すことによりスコアリングや計算方法の理解度を把握する。

⑩ ロールシャッハ法の「量的分析」の実際を講義形式で学習し、実際に⑧で用いた実習用ロールシャッハ事例を用いて、⑨で数値化したものをもとに形式分析を実習し、発表・提出する。ここまででの学習により、ロールシャッハ法における所見の最低限の方法を学習する。課題3 テスター体験を課す。

⑪ ロールシャッハ法による人格理解をさらに深めるために、「継起・系列分析」のあり方について学習する。まず、各カードの特徴や継起・系列分析における視点について講義形式で学習した後、実際に2,3枚の図版について個人あるいはグループで継起・系列分析期を実習し、発表する。

⑫ ⑪の「継列分析」について⑧の実習用事例を元に、各カードの解釈を実習したものと発表し、單一カードごとの解釈に加え、系列的に解釈していくことを、具体的な事例を用いながら学習する。自分が読みとったことを他者と質疑し、共有することで事例を立体的に理解できることを目指す。

⑬ <グループ発表 1-1> 教員が準備した典型的な臨床事例4つのうちの一つ「A神経症事例」の解釈についてグループで発表していく。プロフィール情報を通してテスティの像を描いた上で、スコアリングの確認、形式分析までを発表し、受講生間でディスカッションしながら進めていく。

⑭ <グループ発表 1-2> ⑬で実施しているグループ発表の続きである。事例「A神経症事例」のロールシャッハ法に関する継起・系列分析を発表し、他のテスト・バッテリーを含めた総合解釈までを行う。受講生間の質疑を通して、より立体的な解釈や援助方針までを想定できることを目指す。

⑮ 課題3のテスター体験の事例の総合解釈レポートを提出する。そのなかで、テスター体験の中で学んだこと、実施上の疑問や困難さを各自の体験を元に発表し、他者と共有していく作業を通して心理検査の導入における留意点や倫理的視点、テスターとしてのあり方や職業倫理について深化させる。

3. テキスト

名古屋ロールシャッハ研究会『ロールシャッハ法解説—名古屋大学式技法』

4. 参考図書

氏原 寛ほか編『心理査定実践ハンドブック』 創元社

松原達哉・榆木満生共編『臨床心理アセスメント演習』 培風館

馬場禮子著『ロールシャッハ法と精神分析—継列分析入門』 岩崎学術出版社

岡堂哲雄監修『臨床心理学入門事典』 現代のエスプリ別冊 至文堂 ほか

5. 成績評価方法

出席 20%, 受講態度 20%, テスティ体験レポート 10%, スコアリング課題 20%, テスター体験による実施・計算・形式分析まで 30%で、総合的に評価する。授業外の課題としては、前期の間にレポートおよびスコアリング・解釈課題を含めて3回、および授業毎の予習傾向も評価に組み入れる。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17:00~18:00

E-mail address:nakahara@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

外部でのテスティ体験実習があるため、連絡事項には特に留意すること。

演習形式の授業であり、遅刻・欠席厳禁、レポート提出日厳守のこと。

授業進行状況によっては、内容の順番を変更することがある。

1. 授業の概要

臨床心理査定演習Ⅰを受け、心理検査を用いた実際の事例解釈のあり方を学習する。具体的には、ロールシャッハ法を中心にテスト・バッテリーの組み方、施行法、解釈を代表的な臨床事例や自験例である健常群の事例を用いて行い、それぞれの留意点と心理臨床場面での役立て方、フィードバックのあり方など、立体的な人格理解のあり方について体験的に学習する。臨床群の特徴的なプロトコルを学習するとともに、健常群の事例では、描画（バウム）、SCT、WAIS、ロールシャッハ法を網羅した対象者の心理的力動を推察し、多面的立体的な人物理解を目指す。

2. 授業の内容

①<グループ発表 2-1> 教員が準備した典型的な臨床事例4つのうちの一つ「B 境界性人格障害事例」についてグループで発表していく。プロフィール情報からテスティの具体像を描く実習をしたうえで、スコアリングの確認、形式分析までを発表し、受講生とディスカッションしながら進めていく。

②<グループ発表 2-2>①で実施しているグループ発表の続きである。事例「B 境界性人格障害事例」のロールシャッハ法に関する継起・系列分析を発表し、他のテスト・バッテリーを含めた総合解釈までを行う。境界性人格障害のロールシャッハ法上の特徴を学習するとともに、ディスカッションを通して、より立体的な解釈や援助方針までを想定できることを目指す。

③<グループ発表 3-1> 教員が準備した典型的な臨床事例4つのうちの一つ「C 総合失調症事例」についてグループで発表していく。プロフィール情報からテスティの具体像を描く実習をしたうえで、スコアリングの確認、形式分析までを発表し、受講生とディスカッションしながら進めていく。

④<グループ発表 3-2>③で実施しているグループ発表の続きである。事例「C 総合失調症事例」のロールシャッハ法に関する継起・系列分析を発表し、他のテスト・バッテリーを含めた総合解釈までを行う。総合失調症のロールシャッハ法上の特徴を学習するとともに、ディスカッションを通して、より立体的な解釈や援助方針までを想定できることを目指す。

⑤<グループ発表 4-1> 教員が準備した典型的な臨床事例4つのうちの一つ「D 不登校事例」についてグループで発表していく。プロフィール情報からテスティの具体像を描く実習をしたうえで、スコアリングの確認、形式分析までを発表し、受講生とディスカッションしながら進めていく。

⑥<グループ発表 4-2> ⑤で実施しているグループ発表の続きである。事例「D 不登校事例」のロールシャッハ法に関する継起・系列分析を発表し、他のテスト・バッテリーを含めた総合解釈までを行う。事例の不登校状況のロールシャッハ法上の現れを学習し、フロアとのディスカッションを通してどのような型の不登校かまで推察し、より立体的な解釈や援助方針までを想定できることを目指す。

⑦<個人発表 1-1> 臨床心理査定演習Ⅰの課題であった健常群事例について1名が、事例呈示して発表していく。初回は、プロフィール情報からテスティの具体像を描く実習をした上で、スコアリングの確認、形式分析までを発表し、受講生とディスカッションしながら進めていく。

⑧<個人発表 1-2> ⑦の発表の続きとして、ロールシャッハ法の継起・系列分析を発表するとともに、テスト・バッテリーである WAIS, BAUM, SCT をそれぞれ発表し、4つの心理検査を総合的に解釈したものを見せていく。フロアは単に聞き役でなく予め質問を割り当て、それぞれが課題に応じて深化した体験ができるようにする。

⑨<個人発表 2-1> 臨床心理査定演習Ⅰの課題であった健常群事例について次の1名が、事例呈示して発表していく。初回は、プロフィール情報からテスティの具体像を描く実習をしたうえで、スコア

リングの確認、形式分析までを発表し、受講生とディスカッションしながら進めていく。

⑩<個人発表 2-2>⑨の発表の続きとして、ロールシャッハ法の継起・系列分析を発表するとともに、テスト・バッテリーである WAIS, BAUM, SCT をそれぞれ発表し、4つの心理検査を総合的に解釈したものを見せていく。フロアは単に聞き役でなく予め質問を割り当て、それが課題に応じて深化した体験ができるようにする。

⑪<個人発表 3-1>臨床心理検査演習 I の課題であった健常群事例について発表 3 人目となる者が、事例を示して発表していく。初回は、プロフィール情報からテストの具体像を描く実習をしたうえで、スコアリングの確認、形式分析までを発表し、受講生とディスカッションしながら進めていく。

⑫<個人発表 3-2> ⑪の発表の続きとして、ロールシャッハ法の継起・系列分析を発表するとともに、テスト・バッテリーである WAIS, BAUM, SCT をそれぞれ発表し、4つの心理検査を総合的に解釈したものを見せていく。フロアは単に聞き役でなく予め質問を割り当て、それが課題に応じて深化した体験ができるようにする。

⑬<個人発表 4-1> 臨床心理検査演習 I の課題であった健常群事例について発表 4 人目となる者が、事例を示して発表していく。初回は、プロフィール情報からテストの具体像を描く実習をしたうえで、スコアリングの確認、形式分析までを発表し、受講生とディスカッションしながら進めていく。

⑭<個人発表 4-2>⑬の発表の続きとして、ロールシャッハ法の継起・系列分析を発表するとともに、テスト・バッテリーである WAIS, BAUM, SCT をそれぞれ発表し、4つの心理検査を総合的に解釈したものを見せていく。フロアは単に聞き役でなく予め質問を割り当て、それが課題に応じて深化した体験ができるようにする。これまでの発表に関する感想レポートを課す。

⑮ グループ発表および個人発表をもとにした⑭回で課したレポートを元に、心理検査のあり方に関する疑問や質問を吸い上げ、さらに心理検査の意味やフィードバック、所見のまとめ方などを総合的に理解できるようにし、これまでの体験がより深化することを目指す。

3. テキスト

名古屋ロールシャッハ研究会『ロールシャッハ法解説—名古屋大学式技法』

4. 参考図書

馬場禮子著『ロールシャッハ法と精神分析—継列分析入門』岩崎学術出版社

岡堂哲雄監修『臨床心理学入門事典』現代のエスプリ別冊 至文堂 ほか

5. 成績評価方法

出席 20%、授業態度 20%、発表内容 20%、最終レポート 40%で総合的に評価する。ディスカッションが主体の授業であり、発表者は発表内容を、他の受講生はどのように質疑を行ったかを重視して評価する。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17:00~18:00 E-mail address:nakahara@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

演習形式の授業であり、遅刻・欠席厳禁、レポート提出日厳守のこと。

授業進行状況によっては、内容の順番を変更することがある。

1. 授業の概要

臨床心理面接について、クライエントとの心理面接契約の方法、事例の見立て方、面接の目標設定の仕方、面接過程を促進するための導入期、展開期、終結期の技法と留意点、などの基本的知識と技能を、事例研究論文から学ぶだけでなく、ロールプレイなどの実際体験をとおして、個別支援能力、集団支援能力、地域支援能力に結びついた臨床実践力として習得することを目標とする。

2. 授業の内容

①臨床心理面接を学ぶための基本的事項についてのオリエンテーションを行う。とくに臨床心理面接者としての倫理について強調して行い、クライエントの人権の尊重、秘密の保持、面接契約の方法について学ぶ。

②電話受付の方法について学ぶ。電話受付の位置づけと役割について理解するとともに、具体的な電話受付の仕方を、電話受付シートを使用して、ロールプレイによりメモの取り方、クライエントの話の聞き方、相談システムの説明の仕方、などクライエントの相談内容の把握のしかたを学ぶ。

③インテーク面接の意義について学ぶ。心理面接全体におけるインテーク面接の位置づけと初回面接としての意義を理解した後に、ロールプレイによりクライエントの主訴の聞き方を学ぶとともに、インテークシートの使いかたなどの実務をも学ぶ。

④インテーク面接をビデオ教材により学ぶ。教員がインテーク面接のロールプレイを行ったビデオ教材を視聴して、インテーク面接の要点を理解するとともに、クライエントの主訴に焦点を当てた聞き方とはどのようなものであるかを学ぶ。

⑤導入期の心理面接について学ぶ。クライエントの主訴の明確化や受け止め方、あるいは焦点の当て方だけでなく、クライエントの心理面接への動機づけや、セッションの始め方や終わり方、次のセッションへのつなぎ方など、導入期での課題を中心に学ぶ。

⑥展開期での心理面接の課題を中心に学ぶ。行動化やドロップアウトなどの心理面接を展開するうえでの危機に対して、これらの現象に対してセラピストはどのように対処することができるのか、感情転移などの問題とあわせて、解決のための方法を学ぶ。

⑦終結期の心理面接の課題を中心に学ぶ。心理面接における終結のサイン、終結においてクライエントと行うまとめの作業のしかた、終結時にクライエントに伝えるべきこと、など終結のための基本的原則を学ぶ。

⑧ロールプレイでの自分の体験を中間評価レポートとして提出することを課する。レポートによって明確になったクライエントとの心理面接の困難さを小グループにより討論し、心理面接を進めていくうえでのそれぞれの課題を明らかにする。

⑨心理面接を進めるために必要なセラピストの態度について学ぶ。とくにクライエントの主訴を聴くための傾聴の仕方を中心に、セラピストに求められる共感や受容といった態度とは、どういうものであるかをロールプレイをとおして学ぶ。

⑩子どもとの心理面接について遊戯療法（プレイセラピー）を含めて学ぶ。子どもの心理面接と大人の心理面接の比較検討を行い、子どもの心理面接に特有な点は何かを、親面接の仕方、家族面接の方法、家族力動の見方などとともに、ビデオ教材などを援用して学ぶ。

⑪心理面接におけるスーパービジョンの意義を学ぶ。心理面接を進めていくうえでのスーパービジョンの意義について理解したうえで、実際にクライエントとの間で困難や危機に直面したときのスーパービジョンの受け方、スーパーバイザーへの報告の仕方などを学ぶ。

⑫心理面接における集団面接の方法を学ぶ。グループによる心理面接を行う場合の個人面接とは異なる集団を見立てる方法、セラピストの集団に対する介入のしかた、グループ・プロセスのアセスメントのしかたを、集団支援の観点からグループ・ロールプレイを体験することによって学ぶ。

⑬地域への援助の方法を学ぶ。地域のなかに心理臨床家が出かけてひとつの組織や機関のなかで心理臨床活動を行う場合のキーパーソンの見つけ方、あるいはキーパーソンとの連携の仕方、とくに専門家通しのコンサルテーションについて、地域支援を強調した観点から学ぶ。

⑭ケース・カンファレンスの進め方について学ぶ。カンファレンスに提出する事例の記述の仕方および事例の発表の仕方だけでなく、カンファレンスの参加者が発表事例から多くのことを学ぶことができるためには、カンファレンスをどのように運営するとよいのかを学ぶ。

⑮まとめと総合的評価、レポートの提出。

個別支援としての個別面接、集団支援としてのグループアプローチ、地域支援としてのコンサルテーションの3つについてレポートを課す。そのうえで小グループによる討論のうえで自分の心理面接法としての工夫を課題として共有する。

3. テキスト

鑑 幹八郎・名島 潤慈編「心理臨床家の手引」誠信書房

4. 参考図書

大塚 義孝『心理面接プラクティス 臨床心理学シリーズ（3）』至文堂

前田重治『「芸」に学ぶ心理面接法—初心者のため的心覚え』誠信書房

5. 成績評価方法

出席30%，討論への参加度30%，課題レポート40%とし、総合的に評価する。とくに授業のなかでのロールプレイ体験への参加および積極的な討論に対しては高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17:00～18:00 E-mail address: jhp@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

配布された受付シート、インテーク・シート、ロールプレイに関する配布資料を必ず読み、準備するものおよび留意点を確認したうえで、出席すること。

1. 授業の概要

受講生の臨床心理面接についての基礎理解と心理臨床相談室における電話受付、インターク陪席などの臨床体験について受講生同士が相互にディスカッションを行い、知識と体験を融合し、深化させることで臨床心理面接を実施する構えを養う。さらに、個人カウンセリング、グループセラピー、スクールカウンセリングなどの事例研究論文を題材にして、それぞれの臨床心理面接の受理面接から面接経過の流れ、終結に至るまでのプロセスについて学び、自らの体験と結びつけながら個別支援能力、集団支援能力、地域支援能力を涵養することを目標とする。

2. 授業の内容

- ①前期の講義、演習ならびに実習で得た臨床心理面接に対する知識と臨床体験についてグループディスカッションを行い、受講生同士の知識と体験の共有化をはかる。その際、個別支援、集団支援、地域支援における臨床心理面接の共通点と相違点について解説を付し、受講生の知識と臨床体験の整理をはかる。
- ②学内施設である心理臨床相談室で実際に受付した不登校の子ども、その保護者のニードについてグループディスカッションを実施することで、個別支援としての臨床心理面接の機能について学ぶ。
- ③学内施設である心理臨床相談室で実際に受付した発達障害児や成人へのグループセラピーに対するニードやグループセラピーを実施した方が良いという担当相談員の見立てについて、グループディスカッションを実施することで集団支援としての臨床心理面接のあり方について学ぶ。
- ④学内施設である心理臨床相談室で実際に受付したさまざまな相談について前年度の相談件数の各相談項目の件数ならびに各月の推移を参考に、相談室の地域にある存在意義についてグループディスカッションを実施することで地域支援としての相談室の機能について学ぶ（相談室紀要を持参のこと）
- ⑤学内施設である心理臨床相談室の相談室紀要と他大学の相談室紀要にある統計資料を比較しながら各大学の相談室の地域における機能についてグループディスカッションを実施し、相談件数の相違から見いだせる当相談室の特色について学ぶ（相談室紀要を持参のこと）。
- ⑥受講生が陪席あるいはインタークカンファレンスで印象に残ったインターク面接について受講生同士でグループディスカッションを実施する。また、各グループにてインターク面接のあり方について整理したことを全体の場に話題提供し、全体ディスカッションを通してインターク面接における臨床心理面接につながるアセスメントについて学ぶ。
- ⑦心理臨床学研究や相談室紀要など事例研究論文が掲載されている雑誌の中から、受講生それぞれが関心のある事例研究論文を抽出し、抄録のみを発表し、事例研究論文に記載されている臨床心理面接経過について推測し、全体でディスカッションする。
- ⑧⑦に引き続き、心理臨床学研究や相談室紀要など事例研究論文が掲載されている雑誌の中から、受講生それぞれが関心のある事例研究論文を抽出し、抄録のみを発表し、事例研究論文に記載されている臨床心理面接経過について推測し、全体でディスカッションする。
- ⑨受講生を3グループに分け、児童へのプレイセラピー、中学生へのカウンセリング、成人へのカウンセリングそれぞれの事例研究論文を読み、臨床心理査定のあり方、面接方針、面接経過についてグループディスカッションを行い、個別支援としての臨床心理面接のあり方について学習する。

⑩受講生を3グループに分け、不登校へのグループセラピー、発達障害児へのグループセラピー、他の健常者へのエンカウンターグループなどの臨床実践論文を読み、集団を対象とした臨床心理検定のあり方、面接方針、面接経過についてグループディスカッションを行い、集団支援としての臨床心理面接のあり方について学習する。

⑪受講生を3グループに分け、スクールカウンセリング実践報告についての臨床実践論文を読み、学校というコミュニティの中での臨床心理面接と学校そのものを対象とした臨床心理地域援助のあり方についてグループディスカッションを行い、地域支援の視点について学習する。

⑫臨床心理面接における援助を求めている個人とその周囲の人たちに関する人間関係のアセスメントについて学び、個別支援、集団支援におけるアセスメントと方針の基本的視点について学習する。

⑬受講生を3人組に分け、これまでの心理臨床相談室における電話受付、インテーク面接の概要を参考にカウンセリング場面のロールプレイを実施する。3人組のうち、1人をクライエント役、1人をセラピスト役、1人を傍観者役としてカウンセリング場面のロールプレイを実施し、臨床心理面接における個別支援、集団支援で必要な共感的理解的態度について学ぶ。

⑭⑮の続きとして、役割を交代し、設定を変えたカウンセリング場面のロールプレイを実施する。3人組のうち、1人をクライエント役、1人をセラピスト役、1人を傍観者役とした別設定のカウンセリング場面のロールプレイを実施し、臨床心理面接における個別支援、集団支援で必要な共感的理解的態度について学ぶ。

⑯最終評価

受講生自身が、学内実習施設である心理臨床相談室での臨床心理面接（個別支援ならびに集団支援）を実施する場合のインテーク面接から面接契約に至る相談員としての基本的姿勢及びその際の地域支援としての位置付けについてレポートを課す。さらに全体でのディスカッションを通じて考えの受講生同士の共有化をはかり、臨床心理面接のそれぞれ各人にあった工夫について考察する。

3. テキスト

相談室紀要（創刊号、第2巻、第3巻）

鍼 幹八郎・名島 潤慈編「心理臨床家の手引」誠信書房

4. 参考図書

大塚 義孝『心理面接プラクティス 臨床心理学シリーズ（3）』至文堂

前田重治『「芸」に学ぶ心理面接法—初心者のための心覚え』誠信書房

5. 成績評価方法

出席 30%、討論・ロールプレイへの参加度 30%、課題レポート 40%とし、総合的に評価する。とくに授業のなかでの積極的な討論に対しては高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

月曜日：17:00～18:00, e-mail : haramaki@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

配布された資料には、守秘義務に触れるものが多いので取り扱いには十分注意すること。事例研究論文などは事前に配布するので事前に必ず読み、ディスカッションできるように問題点を絞り込んでおくようにした上で、出席すること。

1. 授業の概要

1 年次に学習した、臨床心理学原論、臨床心理面接学原論、臨床心理査定演習 I・II、臨床心理面接演習 I・II、臨床心理査定実習 I、臨床心理面接実習 I を受け、心理臨床に関わる基礎的理解や実践を基にさらに発展的な、そして、最近の心理臨床理論や心理臨床技法を体系的・実践的に学習する。ここでは特に、個別支援能力、集団支援能力、地域支援能力を高めるための心理面接技法に焦点をあて、自らの体験事例を中心に 1 年次の学習を深化させることを目標とする。

2. 授業の内容

①教育研究教員、実務家教員の連携のもと授業のガイダンスを行う。事例研究法の意義、事例研究の方法、成功例・失敗例の検討のしかた、自分の臨床素材の提示の仕方、授業におけるレポートの提出および評価の基準などについて理解を深める。

②教育研究教員、実務家教員の連携のもと、初回面接だけで終わった事例をセラピストの関わり方に焦点をあてて検討を行い、セラピストはクライエントとの面接体験をどのように臨床家としての成長のための素材とすることができるのかを学ぶ。

③実務家教員、教育研究教員の連携のもと、心理臨床家としての成長過程について理解を深める。心理療法におけるセラピストはどのようにクライエントと関わることによって成長していくことが可能なのか、セラピストとしての基本的な態度とともに考える。

④＜導入期の事例＞実務家教員、教育研究教員の連携のもと、クライエントの面接への動機づけの明確化、クライエントとの相性の問題、クライエントへの陰性感情の処理の仕方、面接の枠（時間・空間・料金）の設定の仕方などをセラピストとして臨床体験で困った事例から学ぶ。

⑤＜展開期の事例＞実務家教員、教育研究教員の連携のもと、展開期を促進するためのクライエントとセラピストの関係とはどのようなものなのかを、1 年を超えて継続している事例と数回で来談しなくなった事例を比較検討することによって行う。

⑥＜終結期の事例＞実務家教員、教育研究教員の連携のもと、すでにクライエントの当初の主訴は解消しているにも関わらず、終結することが出来ずに、面接を継続している（てしまっている）事例をとりあげ、終結を妨げがちなクライエント、セラピストそれぞれの心理的要因を学ぶ。

⑦中間評価としてレポートを課す。自分が担当した事例のなかで、終結した事例および中断した事例をとりあげ、終結および中断にいたった理由を考察することにより、事例報告の仕方を学ぶとともに事例に対する理解を深化させる。

⑧教育研究教員、実務家教員の連携のもと、セラピストによるクライエントの受容が困難だった事例をとおして学ぶ。とくにクライエントの行動化（アクティングアウト）に焦点をあて、クライエントの行動化を生み出すものは何かについて青年期の事例を中心に学ぶ。

⑨教育研究教員、実務家教員の連携のもと、子どもの事例をとおして、心理的に安全な空間（居場所）とは何かを学ぶ。セラピストが子どもと一緒に居るための居心地のよさとは何かをプレイセラピーにおける制限の問題を中心に、乱暴な子どもの事例をとおして学ぶ。

⑩実務家教員、教育研究教員の連携のもと、うつ病者を対象とした集団心理療法の事例をとおして、セラピストの集団に対する介入の仕方を学ぶ。リーダーであるセラピストがグループ・プロセスにあらわれた集団現象をどのようにアセスメントし介入していくことが可能なのがを学ぶ。

⑪教育研究教員、実務家教員の連携のもと、エンカウンターグループの事例を通して心理的成長にどのようにセラピストは関わることができるのかを、エンカウンターグループにおけるファシリテーターのグループ・プロセスへの関わり方と比較対照することによってその促進方法を学ぶ。

⑫実務家教員、教育研究教員の連携のもと、学校、教師、親、相談機関、セラピストが、クライエントにとってより効果的に連携するには、どのようなことが求められるのか、キーパーソンの発見の仕方を鍵概念として地域援助についての理解を深める。

⑬教育研究教員、実務家教員の連携のもと、セラピストはどのように危機的状況を察知し、どのように対処することが可能なのかを、学校現場での突発的事件を契機に組織された危機対応チームの事例をとおして危機介入の視点と方法を学ぶ。

⑭実務家教員、教育研究教員の連携のもと、地域援助の事例として発達障害者（児）に対する社会復帰施設でのソーシャル・スキル・トレーニングなどの実践事例をとおして、心理臨床家にとっての地域でのコラボレーション能力を發揮するためには何が求められているかを学ぶ。

⑮まとめと総合評価。個別支援、集団支援、地域支援の事例をレポートとして課す。小グループによる討論を行い、事例研究の可能性と今後の課題についてまとめる。

3. テキスト

事例研究論文をテキストとして配布する。

4. 参考図書

大塚義孝他編『臨床心理学全書（全13巻）』誠信書房

下山晴彦・丹野義彦編『講座 臨床心理学（全6巻）』東京大学出版会

5. 成績評価方法

出席30%，討論への参加度30%，課題レポート40%として総合的に評価する。とくに授業のなかでの事例報告および事例研究論文の検討への参加および積極的な討論に対しては高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17：00～18：00 E-mail address: jhp@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

配布された事例報告および事例研究論文を必ず読み、論点および質問点を確認したうえで、出席すること。

1.授業の概要

1年次に学習した、臨床心理学原論、臨床心理面接学原論、臨床心理査定演習Ⅰ・Ⅱ、臨床心理面接演習Ⅰ・Ⅱ、臨床心理査定実習Ⅰ、臨床心理面接実習Ⅰを受け、心理臨床に関わる基礎的理解や実践を基にさらに発展的な、そして、最近の心理臨床理論や心理臨床技法を体系的・実践的に学習する。ここでは特に、臨床心理が関わる福祉、教育、一般診療科目での心理臨床のあり方や、表現療法、自閉症者に対する療育活動の実際などを学習し、多様な心理臨床の実際を修得することを目的とする。授業は3名の教員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

2. 授業の内容

- ① 教育研究教員、実務家教員を交えた3名の教員により、授業のガイダンスを行う。この後、福祉、教育領域心理臨床活動の理論と実際に、その領域の専門家である教員が連携しながら、授業を開催する。多様な領域での心理臨床活動の存在意義とその実際を修得することを狙いとする。
- ② 教育研究教員、実務家教員の連携のもと、医療領域に関する心理臨床活動の理論と実際について講義し、ディスカッションしていく。このなかでは、精神科や心療内科など従来から臨床心理士が関わっている業務に加え、外科などの一般診療科目における心理臨床活動の実践に触れる目的とする。
- ③ 実務家教員、教育研究教員の連携のもと、箱庭療法の実施法を学習し、実際にグループごとに分かれ、さらに二人組となって順次、箱庭体験実習を行う。このなかで、箱庭を作成するなかで体験したことや感じたこと、セラピストの存在の意味や疑問点を発表し、さらに感想レポートを課す。
- ④ 実務家教員、教育研究担当教員の連携のもと、箱庭療法に関する理論と心理臨床上の意義を学習し、③のレポートを中心に質疑を行い、実習での体験を深めるとともに、箱庭療法の実際事例を用いた質疑や解説を通して箱庭療法導入のあり方や留意点などを実践的に修得することを目的とする。
- ⑤ 実務家教員、教育研究担当教員の連携のもと、箱庭療法に関する事例研究論文を演習形式で購読していく。ディスカッションを通して、箱庭療法の心理面接および事例研究の意義の両面について学び、心理面接と、実践・研究の両面からみた、箱庭療法のあり方を学習する。箱庭療法の体験レポートを課す
- ⑥ 実務家教員、教育研究教員の連携のもと、風景構成法の実施法に関する体験実習を行う。次いで、風景構成法の実際事例を用いた解説を通して、風景構成法導入のあり方や留意点などを実践的に修得する。さらに、実施や解釈の疑問点について質疑応答を行い、理解や体験の深化を図る。
- ⑦ 実務家教員、教育研究教員の連携のもと、BAUM、HTPの実施法に関する体験実習を行う。次いで、BAUM、HTPの実際事例を用いた解説を通して、BAUM、HTP導入のあり方や留意点などを実践的に修得する。さらに、実施や解釈の疑問点について質疑応答を行い理解や体験の深化を図る。
- ⑧ 実務家教員、教育研究教員の連携のもと、人物画、色彩分割法の体験実習を行う。次いで、人物画、色彩分割法の実際事例を用いた解説を通して、人物画、色彩分割法導入のあり方や留意点などを実践的に修得する。さらに、実施や解釈の疑問点について質疑応答を行い理解や体験の深化を図る。
- ⑨ 教育研究教員、実務家教員の連携のもと、コラージュ・ボックス法の体験実習を行う。実施後には、コラージュを作成するなかで体験したことや感じたこと、疑問点を吸い上げ、さらにコラージュを作成した感想をレポート課題として課す。
- ⑩ 教育研究教員、実務家教員の連携のもと、コラージュ・ボックス法に関する理論と心理臨床上の意

味について学習し、⑨のレポートを中心に質疑を行い、実習体験を深め、コラージュ・ボックス法の実際事例を用いた解説を通して、コラージュ法導入のあり方や留意点などを実践的に修得する。

⑪ 教育研究教員、実務家教員の連携のもと、コラージュ・ボックス法に関する事例研究論文を演習形式で講読していく。ディスカッションを通して、コラージュ・ボックス法の心理面接および事例研究の意義について学び、実践・研究の両面からみた、コラージュ法のあり方を学習する。

⑫ 実務家教員、教育研究教員の連携のもと、「心理面接における表現療法の意味」と題したテーマで③から⑪回までの表現療法に関するまとめを、講義やディスカッションを通して行う。このなかで臨床心理士が関わる領域に適した表現療法の種類や実施法に関する学習をさらに深化させる。

⑬ 教育研究教員、実務家教員の連携のもと、最新の自閉症やアスペルガー症候群に関する知見や研究に関する理論を演習形式で学習する。そのなかでアセスメントの側面、療育の側面、保護者支援といった自閉症スペクトラムの視点だけでなく、発達援助や障害受容の観点からのアプローチを学習する。

⑭ 教育研究教員、実務家教員の連携のもと、教育研究担当教員が関与してきているコミュニティ・アプローチの観点からみた自閉症児に対する療育活動の実践を提示し、質疑を通して、実践上の留意点や、アプローチの効果などについて学習する。ここまででの学習体験レポートを課す。

⑮ 教育研究教員、実務家教員の連携のもと、⑭の課題を提出し、それを用いながら、本授業内容に関する質疑応答を行う。この作業を通して、実習体験の定着を図り、理論や概念の深化を図る。さらに、心理面接技法としてアドバンスの意味を持ちながらもオーソドックスな心理臨床との共通性・相違性を学習し、倫理的配慮を持って実践していく姿勢を培う。

3. テキスト

特に指定しない。

4. 参考図書

河合隼雄編『箱庭療法入門』誠信書房

飯森眞喜雄・中村研之偏『芸術療法実践講座 1 芸術療法 I』岩崎学術出版社

高江洲義英・入江 茂編『芸術療法実践講座 3 コラージュ療法・造形療法』岩崎学術出版社

ほか、授業の中で適宜、紹介する。

5. 成績評価方法

出席 20%、受講態度 20%、実習テーマ毎の体験レポート 30%、最終レポート 30%の割合で、3名の授業担当者により、合議制で評価する。授業の3回目以降、実習体験レポートが3回課され最終レポートとともに、評価に組み入れられる。

6. オフィス・アワー

中原睦美：毎週木曜日 17:00～18:00 E-mail address:nakahara@leh.kagoshima-u.ac.jp

平川忠敏：毎週月・木日 16:00～19:00 E-mail address: hirakaw1@m.kufm.kagoshima-u.ac.jp

落合美貴子：毎週木曜日 17:00～18:00 E-mail address: mochiai@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

演習形式の授業であり、遅刻・欠席厳禁、レポート提出日厳守のこと。

授業進行状況によっては、内容の順番を変更することがある。

1. 授業の概要

本授業は、臨床心理査定演習 I で学んだ心理査定技法を用い、学内相談室における実際の相談場面の心理査定を通して、心理臨床における心理査定のあり方を実践的に学ぶ。面接場面において、どのように事例をアセスメントしていくかを心理検査及び面接時の聞き取りを中心に学び、相談室という形態におけるさまざまな対象者についての心理査定の考え方と技術を習得することを目的とする。

2. 授業の内容

- ①授業目標・評価及び全 15 回の授業内容についてガイダンスを行う。また、実際の相談室の運営についてのガイダンスと心理検査用具及び心理検査用紙の使用上の留意点等についてオリエンテーションを行う。さらに、質疑・応答を通して、心理査定の実際的あり方について知識を確実なものにする。
- ②田中ビネー式知能検査について、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の使用法や各設問の適切な提示の仕方等について学び、本検査の施行及び解釈に関わる技能を身につける。
- ③ウェクスラー式各知能検査について、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の使用法や各設問の適切な提示の仕方等について学び、本検査の施行及び解釈に関わる技能を身につける。
- ④遠城寺式発達検査及び SM 式社会生活能力検査について、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の使用法や各設問の適切な提示の仕方等について学び、本検査の施行及び解釈に関わる技能を身につける。
- ⑤YG 検査、東大式エゴグラム等各種質問紙法性格検査について、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の使用法や各設問の適切な提示の仕方等について学び、本検査の施行及び解釈に関わる技能を身につける。
- ⑥SDS うつ性自己評価尺度、CMI 健康調査等各種メンタルヘルス検査について、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の使用法や各設問の適切な提示の仕方等について学び、本検査の施行及び解釈に関わる技能を身につける。
- ⑦親子関係診断検査について、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の使用法や各設問の適切な提示の仕方等について学び、本検査の施行及び解釈に関わる技能を身につける。
- ⑧MPI 検査及び MMPI 検査について、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の使用法や各設問の適切な提示の仕方等について学び、本検査の施行及び解釈に関わる技能を身につける。
- ⑨ロールシャッハテストについて、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の使用法や各設問の適切な提示の仕方等について学び、本検査の施行及び解釈に関わる技能を身につける。特に本授業においては、スコアリングについて中心的に学ぶ。

⑩アセスメントのための聴き取りのテクニック(その1児童) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切な聴き取りテクニックについて、実際に学内相談室において陪席及び事例を担当することにより学習する。その1では児童からの聴き取りに関して技術を習得する。

⑪アセスメントのための聴き取りのテクニック(その2母親) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切な聴き取りテクニックについて、実際に学内相談室において陪席及び事例を担当することにより学習する。その2では母親からの聴き取りに関して技術を習得する。

⑫アセスメントのための聴き取りのテクニック(その3父親) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切な聴き取りテクニックについて、実際に学内相談室において陪席及び事例を担当することにより学習する。その3では父親からの聴き取りに関して技術を習得する。

⑬アセスメントのための聴き取りのテクニック(その4成人) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切な聴き取りテクニックについて、実際に学内相談室において陪席及び事例を担当することにより学習する。その4では成人本人からの聴き取りに関して技術を習得する。

⑭アセスメントのための聴き取りのテクニック(その5祖父母・親族) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切な聴き取りテクニックについて、実際に学内相談室において陪席及び事例を担当することにより学習する。その5では祖父母等親族からの聴き取りに関して技術を習得する

⑮各種心理検査や聴き取りによってなされる知的側面・発達側面のアセスメントや質問紙法による人格的側面のアセスメントについて総括することにより、心理査定の基本的技法の体得や留意点の明確化を図り、学内相談室の各種相談に応じられる基礎的技法を習得する。最終レポートを課す。

3. テキスト

片口安史著『ロールシャッハテスト心理診断法詳説』牧書店

4. 参考図書

ネーサン・W・アッカーマン著 小此木啓吾・石原 潔訳『家族関係の理論と診断』岩崎書店

下山晴彦著『心理臨床の基礎1 心理臨床の発想と実践』岩波書店

佐治守夫・水島恵一編『臨床心理学の基礎知識』有斐閣ブックス

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第1巻 開業心理臨床』星和書店

5. 成績評価方法

成績評価は、量的評価及びレポートを含む質的評価によって行う。量的評価と質的評価の割合は、各 50%ずつである。量的評価と質的評価の評価基準は別に定める評価基準によるが、特に質的評価については、適宜詳細な評価をフィードバックしていくので、それを受け実習に取り組むこと。

6. オフィス・アワー

落合 美貴子：木曜日 17:00～18:00 高橋 泰夫：火曜日 16:30～18:00

7. 備考

受講生は、事例の陪席や単独での事例担当が義務付けられている。これらの活動に対しては、学内相談室の一相談員として社会的責任を認識し、倫理を遵守することが求められる。なお、実習上の疑問点や不安等は速やかに申し出て、万全の体制で実習に臨むこと。

1. 授業の概要

本授業は、臨床心理査定実習 I の上級授業であり、学内相談室における実際の相談場面の心理査定を通して、心理臨床における心理査定のあり方を実習的に学んでいくものである。ここでは、投映法を用いた心理検査及び実際のアセスメントに関わるさまざまな問題を実際の事例を担当することによって学び、相談室という形態におけるさまざまな対象者についての心理査定の考え方と技術を習得し、現場に即応できる能力を身につけることを目的とする。

2. 授業の内容

①授業目標・評価及び全 15 回の授業内容についてガイダンスを行う。また、相談室における実際の心理アセスメント、特に投影法を用いる際の基本的な留意点について講義及び質疑・応答を行い、投影法を用いた心理査定のあり方について理解を深める。

②P F スタディに関して、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の施行法や施行する際の留意点、適切な採点と解釈について学び、本検査の臨床的使用に関わる技能を身につける。

③S C T 文章完成法テストに関して、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の施行法や施行する際の留意点、適切な採点と解釈について学び、本検査の臨床的使用に関わる技能を身につける。

④バウムテストに関して、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の施行法や施行する際の留意点、適切な採点と解釈について学び、本検査の臨床的使用に関わる技能を身につける。

⑤H T P テスト・統合型H T P テストに関して、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の施行法や施行する際の留意点、適切な採点と解釈について学び、本検査の臨床的使用に関わる技能を身につける。

⑥風景構成法に関して、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の施行法や施行する際の留意点、適切な採点と解釈について学び、本検査の臨床的使用に関わる技能を身につける。

⑦T A T に関して、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の施行法や施行する際の留意点、適切な採点と解釈について学び、本検査の臨床的使用に関わる技能を身につける。

⑧ロールシャッハテストに関して、学内相談室における体験事例を通して学習する。実際には、当該検査を学内相談室において実際の事例に施行し、検査の施行法や施行する際の留意点、適切な採点と解釈について学び、本検査の臨床的使用に関わる技能を身につける。特に本授業においては、臨床心理査定実習 I を踏まえ、データの解釈を中心的に学ぶ。

⑨アセスメント(その 1 発達障害) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切なテストパッテリーの選択及び異種のテスト結果を統合した解釈のあり方について学習する。その 1 では、特に発達障害に関して、その特性に応じたアセスメントの仕方について学ぶ。

- ⑩アセスメント(その2神経症) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切なテストバッテリーの選択及び異種のテスト結果を統合した解釈のあり方について学習する。その2では、特に神経症圏のケースに関して、その特性に応じたアセスメントの仕方について学ぶ。
- ⑪アセスメント(その3統合失調症) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切なテストバッテリーの選択及び異種のテスト結果を統合した解釈のあり方について学習する。その3では、特に統合失調症のケースに関して、その特性に応じたアセスメントの仕方について学ぶ。
- ⑫アセスメント(その4境界例) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切なテストバッテリーの選択及び異種のテスト結果を統合した解釈のあり方について学習する。その4では、特に境界例のケースに関して、その特性に応じたアセスメントの仕方について学ぶ。
- ⑬アセスメント(その5うつ状態) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切なテストバッテリーの選択及び異種のテスト結果を統合した解釈のあり方について学習する。その5では、特にうつ状態のケースに関して、その特性に応じたアセスメントの仕方について学ぶ。
- ⑭アセスメント(その6摂食障害) 学内相談室におけるケースアセスメントのための適切なテストバッテリーの選択及び異種のテスト結果を統合した解釈のあり方について学習する。その6では、特に摂食障害のケースに関して、その特性に応じたアセスメントの仕方について学ぶ。
- ⑮各種心理検査や聴き取りによってなされる知的側面・発達的側面・人格的側面に対するアセスメントについて、適切なテストバッテリー選択とそれらを統合した人格理解の仕方についてまとめを行い、各種相談に応じられる臨床心理検査の基礎的技法をマスターする。さらに、心理検査、聴き取りにおける倫理的問題や、危機管理について明確な意識づけを行う。最終レポートを課す。

3. テキスト

河合隼雄著『臨床場面におけるロールシャッハ法』岩崎学術出版社

4. 参考図書

ネーサン・W・アッカーマン著 小此木啓吾・石原 潔訳『家族関係の理論と診断』岩崎書店
下山晴彦著『心理臨床の基礎1 心理臨床の発想と実践』岩波書店
佐治守夫・水島恵一編『臨床心理学の基礎知識』有斐閣ブックス
乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第1巻 開業心理臨床』星和書店

5. 成績評価方法

成績評価は、量的評価及びレポートを含む質的評価によって行う。量的評価と質的評価の割合は、各 50%ずつである。量的評価と質的評価の評価基準は別に定める評価基準によるが、特に質的評価については、適宜詳細な評価をフィードバックしていくので、それを受けて実習に取り組むこと。

6. オフィス・アワー

松木 繁：火曜日 16:30～18:00 金坂 弥起：木曜日 17:00～18:00

7. 備考

受講生は、事例の陪席や単独での事例担当が義務付けられている。これらの活動に対しては、学内相談室の一相談員として社会的責任を認識し、倫理を遵守することが求められる。なお、実習上の疑問点や不安等は速やかに申し出て、万全の体制で実習に臨むこと。

1. 授業の概要

本実習では、臨床心理面接学原論において学習した臨床心理面接を行う意味・目的・課題について実習 I, 実習 II を通して系統的に学習し、臨床心理面接を行う際のセラピストの基本的な態度を身に付けることを実習課題とする。実習 I では、インターク面接から来談契約の受付、そして、構造化された臨床心理面接に至るまでの流れについて実習を通して理解する。さらに、わが国における代表的な心理臨床理論に基づくさまざまな臨床心理面接技法に関して、技法の紹介と実際とを体験的に学習する。そのうえで、より効果的で効率的な臨床心理面接のあり方を学習する。

2. 授業の内容

①臨床心理面接の意味・目的・課題—臨床心理面接学原論において学習した臨床心理面接の意味・目的・課題を面接実習の中で活かしていくために、必要とされる基本的な態度や対人援助の基本的なマナーについて実習を想定したうえで総論的に学習する。

②臨床心理面接の基本的な態度を身に付ける—臨床心理面接を行っていくうえで、クライエントに対して「共感」することの意義について体験学習を通して身に付ける。そして、セラピストークライエント関係が臨床心理面接を行っていくうえで最も重要であることの自覚を高める。

③臨床心理面接の構造化の意味の理解—面接の場の設定、時間、料金などの治療契約を取り決め、臨床心理面接の枠組みの基本的な設定を行うことの意味を実際的な事例を提示する中で学習する。また、家族面接の中での並行面接や合同面接のあり方など、面接形態の違いによる構造化の意味についても学習する。

④臨床心理面接の記録—治療過程が明確化されること、治療計画が立てやすくなることなど、臨床心理面接の記録をつけることの意味について理解を深め、実践的な記録の付け方を学習する。また、個人情報としてのクライエントの記録の取り扱いや守秘についても学習する。

⑤インターク面接—インターク面接の目的を理解し、クライエントの現況や主訴の聴取、心理臨床的鑑別、来談契約の受付、インフォームド・コンセントなど、インターク面接で行うべきことについて具体的な事例を提示したうえで実践的に学習する。

⑥臨床心理面接過程の理解—インターク面接から終結に至るまでの臨床心理面接過程について、具体的な事例を提示して具体的に理解を深める。また、事例の中斷に対する検討や、終結後のフォローアップに関しても実践的に学習する。

⑦臨床心理面接技法 1—わが国における代表的な臨床心理面接技法を総論的に紹介し、各面接技法の利点を活かす臨床実践のあり方を実際の適用事例を提示する中で実践的に学習する。代表的な臨床心理面接技法としては、クライエント中心療法、精神分析療法、ユング心理学、行動療法(認知行動療法)、日本の伝統的な心理療法(森田療法、内観など)、催眠療法を学習する。そのうえで、より効果的、効率的な技法としての統合的心理療法のあり方について実践的に学習する。

⑧クライエント中心療法—本実習では、人間性心理学、非指示的療法など、ロジャーズのクライエント中心療法の原理を体験的に学習する。クライエント中心療法の適用事例を通じ具体的に実習することで、その治療的意義を学習する。また、ジェンドリンによるフォーカシングの技法についても適用事例を通して学習する。

⑨精神分析療法一本実習では、フロイトの創始した精神分析療法の技法について適用事例を通し学習する。特に、導入期の注意点、抵抗・防衛の分析、転移分析、自己洞察による自我の再統合、治療終結へ至るまでのプロセスを学習し、その治療的意義について学習する。

⑩ユング心理学一本実習では、ユングの創始したユング心理学に基づく治療技法について適用事例を通し学習する。特に、普遍的無意識、元型の概念の理解、治療過程としての個性化のプロセスなど、ユング心理学の基本的な概念を理解したうえで、具体的な技法として夢の取り扱い方、箱庭療法、芸術療法などの諸技法についても実習する。

⑪行動療法、特に、認知行動療法一本実習では、行動療法、特に、認知行動療法の治療技法について適用事例を通し学習する。特に、行動科学に基づき不適応行動の変容を目指す行動療法の基本的な考え方を理解したうえで、具体的な技法としての認知行動療法の実際について適用事例を通して学習する。

⑫日本の伝統的な心理療法(森田療法、内観療法など)一本実習では、わが国で独自に開発された森田による森田療法と、吉本による内観療法の治療技法について適用事例を通し学習する。わが国で独自に開発された両技法の特質について理解したうえで、具体的技法を学習する。

⑬催眠療法一本実習では、催眠療法の治療技法について適用事例を通し学習する。催眠という状態的特性、コミュニケーション的特性を利用した催眠療法のあり方について適用事例を通して学習する。リラクセーション技法などについて具体的に体験学習する。

⑭統合的心理療法一本実習では、臨床現場で求められる、より効果的で効率的な治療技法としての統合的心理療法の考えを理解し、その実際について適用事例を通し学習する。さまざまな臨床心理面接技法の利点を生かすことの意義について体験的に学習する。

⑮まとめーこれまでに実習を通して学習したことを基にして、臨床心理面接の基本的なあり方を理解する。さらには、さまざまな臨床心理面接技法の特性を考える中で、より効果的で効率的な臨床心理面接技法として実際的に適用させていくために必要な条件についてまとめる。

3. テキスト

河合隼雄著 「カウンセリングを語る」上・下 創元社

4. 参考図書

氏原 寛他編 「カウンセラーのための 104 冊」 創元社

5. 成績評価方法

実習オリエンテーションで示した量的評価 50 % (具体的な学内実習への参加状況)と、実習に対するレポートを含む質的評価 50 % (臨床心理面接を行っていくうえでの基本的な態度や臨床姿勢が育っているかなど)を加え総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

松木 繁：毎週 火曜日 16:30～18:00 落合美貴子：毎週 木曜日 17:00～18:00

7. 備考

☆授業は学内実習・学外実習での実践を想定して、よりレベルの高い実習形式をとるので、積極的な受講態度が望まれる。

1. 授業の概要

実習 II では、実習 I で体験的に学習した臨床心理面接実習の発展的課題として、より効果的で効率的な臨床心理面接を行うために必要な技法の習得を目指す。そのために、臨床心理面接過程で発生するさまざまな諸問題への対処法を学ぶ。また、対象別の臨床心理面接のあり方について実際的に学習する。対象別実習に関しては、神経症圏、精神病圏、人格障害圏、さらには発達障害なども含め、より具体的なテーマを取り上げながら実践的な学習を深める。

2. 授業の内容

①効果的な臨床心理面接を目指して—今回は、実習 I で体験的に学習した臨床心理面接実習の発展的課題のガイドラインを提示して実習全体を概観する。そして、これから行う実習を通して効果的な臨床心理面接のあり方を学ぶという自覚を高める。

②転移、逆転移に対する取り扱い—本実習では、臨床心理面接の中で発生する諸問題の内、セラピスト－クライエント間で起こる陰性、または、陽性の転移感情の取り扱いについて具体的な事例を通して学習する。また、セラピストの逆転移についても学習する。

③危機介入一本実習では、臨床心理面接の中で発生する諸問題の内、自殺を含む自傷行為や他害を含むさまざまな行動化に対する危機介入のあり方について具体的な事例を通して学習する。特に、危機介入の手順については詳細に行う。

④倫理問題への対処一本実習では、臨床心理面接の中で発生する諸問題の内、セラピストの倫理問題について具体的な事例を通して学習する。そして、臨床心理面接の中での倫理問題に対する十分な自覚を深める。また、併せて臨床心理面接と法的問題も取り上げて学習する。

⑤対象別の臨床心理面接のあり方を概観する—今回は、これから行う対象別の臨床心理面接のガイドラインを提示して対象別の実習全体を概観する。臨床心理面接学原論において学習したさまざまな対象に対して、状態像そのものをイメージしながらその対象への理解を体験的に深める。

⑥うつ病のクライエントに対する臨床心理面接一本実習では、対象別の臨床心理面接のあり方の内、うつ病に対する臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。特に、うつ状態のクライエントに対しての励まし、慰めの禁止など、うつ病の臨床心理面接の注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑦統合失調症のクライエントに対する臨床心理面接一本実習では、対象別の臨床心理面接のあり方の内、統合失調症者に対する臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。特に、急性期と慢性期の統合失調症のクライエントの状態像を正しく把握し、統合失調症者に対する臨床心理面接の注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑧強迫神経症のクライエントに対する臨床心理面接一本実習では、対象別の臨床心理面接のあり方の内、強迫神経症に対する臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。特に、強迫行動の意味を理解し、強迫神経症に対する臨床心理面接の注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑨対人恐怖症のクライエントに対する臨床心理面接一本実習では、対象別の臨床心理面接のあり方の内、対人恐怖症のクライエントに対する臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。対人恐怖症状の鑑別診断の重要性を認識し、対人恐怖症のクライエントに対する臨床心理面接を行

うにあたっての注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑩摂食障害のクライエントに対する臨床心理面接一本実習では、対象別の臨床心理面接のあり方の内、摂食障害に悩むクライエントに対する臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。特に、摂食障害のクライエントの認知の歪みに気付き修正することなど、摂食障害のクライエントに対する臨床心理面接を行うにあたっての注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑪境界例などの人格障害圏のクライエントに対する臨床心理面接一本実習では、対象別の臨床心理面接のあり方の内、人格障害のクライエントに対する臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。特に、境界例のクライエントの巻き込みなど、境界例のクライエントに対する臨床心理面接を行うにあたっての注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑫行動障害のクライエントに対する臨床心理面接一本実習では、対象別の臨床心理面接のあり方の内、行動障害のクライエントに対する臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。特に、行動化への対処など、行動障害のクライエントに対する臨床心理面接を行うにあたっての注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑬発達障害を抱えるクライエントへの臨床心理面接一本実習では、対象別の臨床心理面接のあり方の内、発達障害のクライエントに対する臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。特に、発達障害に対する認識を深め、臨床心理面接を行うにあたっての注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑭ターミナルケアとしての臨床心理面接一本実習では、ターミナルケアに果たす臨床心理士の役割や臨床心理面接のあり方を具体的な事例を通して学習する。そして、ターミナルケアとしての臨床心理面接を行うにあたっての注意点や医療機関との連携のあり方などについて学習する。

⑮まとめーこれまでの実習を通して学んだことをまとめ、各々の症状や問題に対して、より効果的な臨床心理面接技法のあり方についてまとめる。

3. テキスト

河合隼雄著 カウンセリングの実際問題 誠信書房

4. 参考図書

氏原 寛著 カウンセリングの実践 誠信書房
神田橋條治 精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版

5. 成績評価方法

実習オリエンテーションで示した量的評価 50% (具体的な学内実習への参加状況)と、実習に対するレポートを含む質的評価 50% (臨床心理面接を行っていくうえでの基本的な態度や臨床姿勢が育っているかなど)を加え総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

金坂弥起：毎週 木曜日 17:00～18:00 高橋泰夫：毎週 木曜日 16:30～18:00

7. 備考

☆授業は学内実習・学外実習での実践を想定して、よりレベルの高い実習形式をとるので、積極的な受講態度が望まれる。

1. 授業の概要

心理臨床業務は単に臨床心理学という専門的知識、技術の研鑽に努めておればよいというものではない。所属する組織には臨床業務を遂行する上で遵守されるべき法的な制約、服務規律、倫理というものが厳然として存在する。こうした倫理問題や法律問題の理解を深めるために、実際的な事例を基にグループでのディスカッションを通して演習を進めていく。また心理臨床業務は法的制約を持つ他機関との連携の中で成り立っている。こうした点についても、具体的な事例を基にして、少年司法・矯正において心理臨床を円滑に遂行するために必要な、法的枠組や関連する機関との連携のあり方、心理臨床家の役割について理解を深める。

2. 授業の内容

①心理臨床家と倫理(1)：臨床心理士倫理綱領には、憲法にも規定される基本的人権の尊重、個人情報保護法同様の秘密保持、その他情報開示やインフォームドコンセント等の重要な内容が盛られている。臨床心理士にとって極めて重要な倫理問題について、何故、必要とされるのかについてグループ学習を行い、十分に議論した上で倫理意識の高揚を図る。また、同綱領3条規定の内容が公務員の場合、刑法の職權乱用罪や収賄罪となりうることも伝えたい。

②心理臨床家と倫理(2)：司法・矯正領域に勤務する心理臨床家は国家公務員の身分であり、国家公務員法や同倫理規程によって拘束される。国家公務員法には守秘義務のほか、兼業禁止、信用失墜行為の禁止、政治的行為の禁止等が定められ違反した場合は懲戒を受ける。倫理法に至っては利害関係のある団体との関係の持ち方について詳細な規程がなされており十分に理解する必要がある。

③心理臨床家と倫理(3)：個人情報保護法と情報公開法についても詳細な規定があり、対応に疎漏が生じないよう矛盾なく理解する必要がある。その他セクシャルハラスメント防止法について説明し、対象者に対して、特に異性の場合、相手が不快な感情を抱く場合に適用されることを伝え理解を深める。

④警察と心理職：警察独自の少年事件対応の規範である犯罪捜査規範、少年警察活動要綱について考える。最近は警察機関でも心理職を配置する動きが見られ、今後、さらに連携が強化される可能性が高く、警察との連携のあり方についての理解を深める。

⑤家庭裁判所の心理臨床：少年法の仕組みの中の中心的機関であり、少年の健全育成を基本精神として処分決定を行うが、裁判官の決定にあたって調査官が意見具申する。調査官は主として社会調査、少年鑑別所の心理技官は資質鑑別を主として行うという役割分担が建前となっていることの理解を深める。

⑥保護観察所の心理臨床：犯罪者予防更生法等に基づき国家公務員である保護観察官を中心とした、保護司とが共同して環境調整や保護観察の指導を行っている。最近、心神喪失者等医療観察制度が立ち上げられ、その対応のための専門官を配置している。少年鑑別所とは相互に情報交換する制度を持ち、時には保護観察中の者の処遇方針作成のため鑑別等を依頼されている。

⑦児童相談所、児童自立支援施設等の心理臨床：主として児童福祉法によって立つ機関である。児童相談所には心理判定係と指導に当たる児童福祉司という職種があり、相互協力によってケースを処理している。少年法と児童福祉法が競合する場合がある。非行の低年齢化が進む中、児童福祉法の仕組みについて理解を深める。

⑧精神保健センターの心理臨床：精神科医と心理士が配置されている。精神疾患のある患者の診察治療を行う機関であるが、矯正施設で自傷他害の恐れのある精神疾患者については釈放前に、「精神保健福祉法」に基づく措置申請をし、指定医による診察を受けさせることもあることの理解を深める。

⑨学校等での心理臨床：スクールカウンセラーサービスが導入され、また独自の相談所を設けるなどして充実している。学校は学校教育法、同施行規則等に基づいて運営され、学校には管理者というラインの組織と担任教諭、養護教諭、教師カウンセラー、生活指導教諭等のスタッフ組織がある。学校での非行問題への対応に関して、この組織やPTAをいかに有効に活用するかについて説明する。

⑩弁護士である付添人：少年事件にも付添人として全件弁護士がつこうとする動きがある。いわゆる弁護ではなく、健全育成の担い手として臨床心理学を学び真摯に取り組む弁護士もいる。今後こうした動きが活発化し鑑別結果について説明を求められることもありうる。批判に耐えうる鑑別結果通知書の作成の問題について講義するとともに、背景にある児童の権利条約について解説する。

⑪刑務所の心理臨床：本年度から旧監獄法が改正され新受刑者処遇法に基づく処遇がスタートした。これを受けて受刑者個々の問題性に応じた個別の処遇が展開されることとなった。行刑施設での心理職の役割と限界、性犯罪教育ほかの類型別指導等、少年矯正施設からの処遇支援、臨床心理士の非常勤雇用等について、新法をもとに説明する。

⑫地域非行防止対策への援助：地域にたくさんの相談機関があり、利用者はどこを訪ねていいのか迷うほどである。少年鑑別所を含めて各機関ができるだけできることを把握しネットワークを構築して「行動連携」し、地域一体となって推進していく必要があるが、その基本的な観点、考え方について説明し、具体的にどうすればよいかについて討議する。

⑬管理職心理臨床家の役割：心理臨床家といえども管理職の立場となれば、所属機関の良好適切な運営のための行政的な仕事にも力を注がねばならない。本講義では職員管理の重要性とその在り方等にもふれ、組織人として求められていることについての理解を促したい。

⑭心理臨床行為の中で発生する対象者とのトラブル：具体的な事例を挙げながら事故について説明し、その際、どのように対応すべきか、また、民事責任、刑事責任、損害賠償請求、使用者責任、そして行政処分について説明し、常にかかる事態を招かぬよう脇を固めておく必要性の理解を深める。

⑮まとめ一実際的な事例を通して学んだものをまとめ課題としてレポート提出させる。

テキスト

佐藤 進 監修「心の専門が出会う法律」誠信書房

4. 参考図書

なし

5. 成績評価方法

出席 30%, 受講態度 30%, 考査試験 40% で総合評価する。

6. オフィス・アワー

毎週 木曜日 16:30~18:00

7. 備考

倫理問題や法律問題に関しては実際的な事例について

講義中の携帯電話使用禁止(マナーモード可)

1. 授業の概要

本演習は、学内実習によって高められてきた心理臨床の力を、教育研究教員と実務家教員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して臨床心理地域援助の力にまで高め、臨床実践能力の定着・深化を図ることを目的とする。演習Ⅰでは、電話受付や陪席などの学内実習経験の報告に対するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して、こころの専門家としての基本姿勢や倫理観、そして、臨床心理査定や臨床心理面接の基礎的能力を養う。

2. 授業の内容

①本演習で行う臨床心理地域援助事例研究の授業目標、評価及び全体の授業内容についてガイダンスを行う。特に、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行うことを伝え、そのことの意味について十分に把握させる。

②臨床心理地域援助実習において実施する臨床心理査定技法、例えば、田中ビネー式知能検査、東大式エゴグラム、MMPI、TAT、ロールシャッハテストなどの臨床適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

③臨床心理地域援助実習において実施する、児童への臨床心理査定技法の臨床適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

④臨床心理地域援助実習において実施する、成人への臨床心理査定技法の臨床適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑤臨床心理地域援助実習において実施する臨床心理面接の治療構造のあり方や臨床心理面接過程に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑥臨床心理地域援助実習において実施する、ロジャーズ派の臨床心理面接の技法適用に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑦臨床心理地域援助実習において実施する、わが国における代表的な各学派の臨床心理面接の技法適用に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑧臨床心理地域援助実習において実施する、神経症圏の事例に対する臨床心理面接の技法適用に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑨臨床心理地域援助実習において実施する、精神病圏の事例に対する臨床心理面接の技法適用に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑩臨床心理地域援助実習を行う各領域の、実習先における当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関してグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑪臨床心理地域援助実習を行う教育領域での実習に対して、当該機関の機能と特性を知り、スクールカウンセラーの役割について学ぶ。同時に、事例に対しての報告を行い、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑫臨床心理地域援助実習を行う福祉領域での実習に対して、当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知る。同時に、事例に対しての報告を行い、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑬臨床心理地域援助実習を行う医療領域での実習に対して、当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知る。同時に、事例に対しての報告を行い、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑭臨床心理地域援助実習の一環として、司法・矯正領域での見学実習を行う。その中で司法・矯正領域での当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して体験的に学習する。

⑮まとめ—これまでに実習を通して学習したことを基にして、臨床地域援助の基本的なあり方を理解する。さらには、さまざまな臨床心理面接技法の特性を考える中で、より効果的で効率的な臨床心理地域援助として実際的に適用させていくために必要な条件についてまとめる。

3. テキスト

山本和郎著 「コミュニティ心理学」 東京大学出版会

4. 参考図書

氏原 寛著 「実践から知る学校カウンセリング」 培風館
山本和郎著 「コミュニティ心理学の実際」 新曜社
児童福祉協会 「わが国の児童福祉施設」
中井久夫著 「精神科治療の覚書」 日本評論社

5. 成績評価方法

実習オリエンテーションで示した量的評価 50% (具体的な学内実習への参加状況)と、実習に対するレポートを含む質的評価 50% (臨床心理面接を行っていくうえでの基本的な態度や臨床姿勢が育っているかなど)を加え総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

安部恒久：毎週 木曜日 17:00～18:00 落合美貴子：毎週 木曜日 17:00～18:00
平川忠敏：毎週 月・火・木・金曜日の午後 服巻 豊：毎週 火曜日 17:00～18:00

7. 備考

☆授業は学外実習をより良いものにするために、専任教員全員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンとなるので、積極的な受講態度が望まれる。

⑩臨床心理地域援助実習を行う各領域の、実習先における当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割を知り、その役割に応じて柔軟に対応できる力に関してグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑪臨床心理地域援助実習を行う教育領域での実習に対して、当該機関の機能と特性を知り、スクールカウンセラーの役割について学び、さらに、その役割に応じて柔軟に対応できる力をつけるためのケースカンファレンスやグループスーパービジョンを、適用事例を通して学ぶ。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑫臨床心理地域援助実習を行う福祉領域での実習に対して、当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知る。さらに、適用事例のケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して応用力を養う。本演習は研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑬臨床心理地域援助実習を行う医療領域での実習に対して、当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知る。さらに、適用事例のケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して応用力を養う。本演習は研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑭臨床心理地域援助実習の一環として、司法・矯正領域での実際的な適用事例を事例研究の中で学習し、その中で司法・矯正領域での当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知る。

⑮まとめーこれまでに実習を通して学習したことを基にして、臨床地域援助の応用的な工夫のあり方を理解する。さらには、さまざまな臨床心理面接技法の特性を考える中で、より効果的で効率的な臨床心理地域援助として実際的に適用させていくために必要な応用力に関してまとめる。

3. テキスト

山本和郎著 「コミュニティ心理学の実際」 新曜社

4. 参考図書

村山正治編 「臨床心理士によるスクールカウンセラー」 現代のエスプリ別冊
児童福祉協会 「わが国の児童福祉施設」
柏木昭編著 「精神医学ソーシャルワーク」 岩崎学術出版

5. 成績評価方法

実習オリエンテーションで示した量的評価 50% (具体的な学内実習への参加状況)と、実習に対するレポートを含む質的評価 50% (臨床心理面接を行っていくうえでの基本的な態度や臨床姿勢が育っているかなど)を加え総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

松木 繁：毎週 火曜日 16:30～18:00 高橋泰夫：毎週 木曜日 16:30～18:00
中山 寛：毎週 月曜日 17:00～18:00 中原睦美：毎週 木曜日 17:00～18:00

7. 備考

☆授業は学外実習をより良いものにするために、専任教員全員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンとなるので、積極的な受講態度が望まれる。

1. 授業の概要

演習Ⅱでは、学内実習での臨床実践報告に対して、教育研究教員と実務家教員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、臨床心理査定や臨床心理面接の基本的な能力が獲得できているかを確認させ、さらには、そうした心理臨床の能力が、個別、集団、地域、危機介入などの臨床心理地域援助能力として発展的に高まるためには何が必要かを考えさせることを演習の目的とする。そして、臨床心理地域援助のできる、こころの専門家としてより高度な臨床実践能力を定着・深化させることを到達目標とする。

2. 授業の内容

①本演習は、先に行う臨床心理地域援助事例研究演習Ⅰに統いて、さらに臨床現場での応用力を持った心理臨床家を養成することを目的としていることを自覚させる。本演習も、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンで行うことを伝え、そのことの意味について十分に把握させる。

②臨床心理地域援助実習において実施する臨床心理査定技法、例えば、田中ビネー式知能検査、東大式エゴグラム、MMPI、TAT、ロールシャッハテストなどの臨床適用を踏まえた応用力に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

③臨床心理地域援助実習において実施する、児童への臨床心理査定技法の臨床適用を踏まえた応用力に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

④臨床心理地域援助実習において実施する、成人への臨床心理査定技法の臨床適用を踏まえた応用力に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑤臨床心理地域援助実習において実施する臨床心理面接の治療構造のあり方や臨床心理面接過程を踏まえた応用力に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑥臨床心理地域援助実習において実施する、ロジャーズ派の臨床心理面接の技法適用を踏まえた応用力に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑦臨床心理地域援助実習において実施する、ロジャーズ派以外の各学派の臨床心理面接の技法適用を踏まえた応用力に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑧臨床心理地域援助実習において実施する、神経症圏の事例に対する臨床心理面接の技法適用を踏まえた応用力に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑨臨床心理地域援助実習において実施する、精神病圏の事例に対する臨床心理面接の技法適用を踏まえた応用力に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行う。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

1. 授業の概要

演習Ⅲでは、学内実習ばかりでなく、学外実習機関での臨床実践を通して培った臨床心理査定技法や臨床面接技法が定着し、個別、集団、地域、危機介入に対する基本的な臨床心理地域援助能力が高められているかを確認することを演習の目的とする。そのために、教育研究教員と実務家教員が共同で担当し、それぞれの専門分野である臨床心理査定、臨床心理面接さらには、教育、福祉、医療、司法・矯正、各領域の実務的な経験を基にして、共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、臨床心理地域援助者としての臨床実践能力の定着・深化を図る。

2. 授業の内容

①本演習は、先に行う臨床心理地域援助事例研究演習Ⅰ、Ⅱ、で培った臨床心理地域援助の査定技法や面接技法を、さらに発展的に展開させる力を有する実践的な心理臨床家の養成を目的としていることを自覚させる。そのため、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行うことを伝え、そのことの意味について十分に把握させる。

②臨床心理地域援助実習において実施する臨床心理査定技法、例えば、田中ビネー式知能検査、東大式エゴグラム、MMPI、TAT、ロールシャッハテストなどの臨床適用を通して学んだことを発展的に展開させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、より発展的で実践的な課題に対してグループスーパービジョンを行う。

③臨床心理地域援助実習において実施する、児童への臨床心理査定技法の臨床適用を通して学んだことを発展的に展開させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、より発展的で実践的な課題に対してグループスーパービジョンを行う。

④臨床心理地域援助実習において実施する、成人への臨床心理査定技法の臨床適用を通して学んだことを発展的に展開させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、より発展的で実践的な課題に対してグループスーパービジョンを行う。

⑤臨床心理地域援助実習において実施する臨床心理面接の治療構造のあり方や臨床心理面接過程に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して学んだことを発展的に展開させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、より発展的で実践的な課題に対してグループスーパービジョンを行う。

⑥臨床心理地域援助実習において実施する、ロジャーズ派の臨床心理面接の技法適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して学んだことを発展的に展開させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、より発展的で実践的な課題に対してグループスーパービジョンを行う。

⑦臨床心理地域援助実習において実施する、わが国における各学派の臨床心理面接の技法適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して学んだことを発展的に展開させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、より発展的で実践的な課題に対してグループスーパービジョンを行う。

⑧臨床心理地域援助実習において実施する、神経症圏の事例に対する臨床心理面接の技法適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して学んだことを発展的に展開させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、より発展的で実践的な課題に対してグループスーパービジョンを行う。

⑨臨床心理地域援助実習において実施する、精神病圈の事例に対する臨床心理面接の技法適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して学んだことを発展的に展開させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、より発展的で実践的な課題に対してグループスーパービジョンを行う。

⑩臨床心理地域援助実習を行う各領域の、実習先における当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して発展的な課題を与える、それに対する研究家教員と実務家教員全員によるグループスーパービジョンを行う。

⑪臨床心理地域援助実習を行う教育領域での実習に対して、当該機関の機能と特性を知り、スクールカウンセラーの役割について学ぶ。同時に、スクールカウンセラーの役割に対して発展的な課題を与える、それに対する研究家教員と実務家教員全員によるグループスーパービジョンを行う。

⑫臨床心理地域援助実習を行う福祉領域での実習に対して、当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して学ぶ。さらに、発展的な課題を与える、それに対する研究家教員と実務家教員全員によるグループスーパービジョンを行う。

⑬臨床心理地域援助実習を行う医療領域での実習に対して、当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して学ぶ。さらに、発展的な課題を与える、それに対する研究家教員と実務家教員全員によるグループスーパービジョンを行う。

⑭臨床心理地域援助実習の一環として、司法・矯正領域での見学実習を行う。その中で司法・矯正領域での当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知る。

⑮まとめ—これまでに実習を通して学習したことを基にして、臨床地域援助の基本的なあり方を理解する。さらには、さまざまな臨床心理面接技法の特性を考える中で、より効果的で効率的な臨床心理地域援助として実際的に適用させていくために必要な条件についてまとめる。

3. テキスト

山本和郎著 「コミュニティ心理学の実際」 新曜社

4. 参考図書

村山正治編 「臨床心理士によるスクールカウンセラー」 現代のエスプリ別冊
児童福祉協会 「わが国の児童福祉施設」
柏木昭編著 「精神医学ソーシャルワーク」 岩崎学術出版

5. 成績評価方法

実習オリエンテーションで示した量的評価 50 % (具体的な学内実習への参加状況)と、実習に対するレポートを含む質的評価 50 % (臨床心理面接を行っていくうえでの基本的な態度や臨床姿勢が育っているかなど)を加え総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

落合美貴子：毎週 木曜日 17:00～18:00 高橋泰夫：毎週 木曜日 17:00～18:00
山中 寛：毎週 月曜日 17:00～18:00 中原睦美：毎週 木曜日 17:00～18:00

7. 備考

☆授業は学外実習をより良いものにするために、専任教員全員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンとなるので、積極的な受講態度が望まれる。

1. 授業の概要

演習IVでは、演習I, II, IIIで培った臨床心理地域援助における個別、集団、地域、危機介入に対する臨床実践能力を確実に定着・深化させ実践的な心理臨床家の養成を図る。そのために、学外実習での臨床実践報告に対する教育研究教員と実務家教員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを通して、教育、福祉、医療、司法・矯正、各領域での特性に応じた、個別、集団、地域、危機介入などの高度な臨床地域援助能力の獲得を演習の到達目標とする。

2. 授業の内容

①本演習で行う臨床心理地域援助事例研究は先に行う臨床心理地域援助事例研究演習I, II, IIIで培った臨床心理地域援助の査定技法や面接技法を確実に定着させ、実践的な心理臨床家の養成を目的としていることを自覚させる。本演習でも、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行うことを伝え、そのことの意味について十分に把握させる。

②臨床心理地域援助実習において実施する臨床心理査定技法、例えば、田中ビネー式知能検査、東大式エゴグラム、MMPI、TAT、ロールシャッハテストなどの臨床適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、諸技法の確実な定着を目指す。本演習は研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

③臨床心理地域援助実習において実施する、児童への臨床心理査定技法の臨床適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、諸技法の確実な定着を目指す。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

④臨床心理地域援助実習において実施する、成人への臨床心理査定技法の臨床適用に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、諸技法の確実な定着を目指す。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑤臨床心理地域援助実習において実施する臨床心理面接の治療構造のあり方や臨床心理面接過程に関するケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、諸技法の確実な定着を目指す。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑥臨床心理地域援助実習において実施する、ロジャーズ派の臨床心理面接の技法適用に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、その面接技法の確実な定着を目指す。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑦臨床心理地域援助実習において実施する、わが国における各学派の臨床心理面接の技法適用に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、各々の面接技法の確実な定着を目指す。本演習は研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑧臨床心理地域援助実習において実施する、神経症圏の事例に対する臨床心理面接の技法適用に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、神経症圏の事例に対する臨床面接技法の確実な定着を目指す。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑨臨床心理地域援助実習において実施する、精神病圏の事例に対する臨床心理面接の技法適用に関して、ケースカンファレンスやグループスーパービジョンを行い、精神病圏の事例に対する臨床面接技法の確実な定着を目指す。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深

化と定着を図る。

⑩臨床心理地域援助実習を行う各領域の、実習先における当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関してグループスーパービジョンを受け、当該機関における臨床心理士の役割についての自覚を確実に定着させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑪臨床心理地域援助実習を行う教育領域での実習に対して、当該機関の機能と特性を知り、スクールカウンセラーの役割について学ぶ。同時に、適用事例を通してのケースカンファレンスやグループスーパービジョンを受けることで、スクールカウンセラーとしての自覚を確実に定着させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑫臨床心理地域援助実習を行う福祉領域での実習に対して、当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知る。同時に、適用事例を通してのケースカンファレンスやグループスーパービジョンを受けることで、福祉領域における臨床心理士の自覚を確実に定着させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑬臨床心理地域援助実習を行う医療領域での実習に対して、当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知る。同時に、適用事例を通してのケースカンファレンスやグループスーパービジョンを受けることで、医療領域における臨床心理士の自覚を確実に定着させる。本演習は、研究家教員と実務家教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

⑭臨床心理地域援助実習の一環として、司法・矯正領域での実際的な事例研究を通して、司法・矯正領域での当該機関の機能と特性、さまざまな職種の役割と特性、そして、その機関での臨床心理士の役割に関して知り、司法・矯正領域における臨床心理士の自覚を確実に定着させる。

⑮まとめ—これまでに実習を通して学習したことを基にして、臨床心理地域援助事例研究演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで培った臨床心理地域援助の査定技法や面接技法を確実に定着させ実践的な心理臨床家としての自覚が高まったことを確認する。

3. テキスト 山本和郎著 「コミュニティ心理学」 東京大学出版会

4. 参考図書

氏原 寛著 「実践から知る学校カウンセリング」 培風館
中井久夫著 「精神科治療の覚書」 日本評論社

5. 成績評価方法

実習オリエンテーションで示した量的評価50%(具体的な学内実習への参加状況)と、実習に対するレポートを含む質的評価50%(臨床心理面接を行っていくうえでの基本的な態度や臨床姿勢が育っているかなど)を加え総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

松木 繁：毎週 火曜日 16:30分～18:00 金坂弥起：毎週 木曜日 17:00～18:00
安部恒久：毎週 木曜日 17:00～18:00 平川忠敏：毎週 月・火・木・金曜日の午後
服巻 豊：毎週 火曜日 17:00～18:00

7. 備考

☆授業は学外実習をより良いものにするために、専任教員全員が共同で担当するケースカンファレンスやグループスーパービジョンとなるので、積極的な受講態度が望まれる。

1. 授業の概要

本授業は、教育・福祉・医療の各領域における学外機関において行う学外実習の授業であり、講義や演習で培った知識・技能を実際の体験に応用し、心理支援の実践力を修得することを目的とする。第一段階では、各機関の歴史的機能や役割、さまざまなスタッフの機能と職務分担、対象者の種類と動向について理解する。また、当該機関における調査の方法と技術、観察の方法と留意点・使用される心理検査とテストバッテリーの組み方等臨床心理査定のあり方について基本的な考え方と技術等、当該機関における心理臨床のあり方について学び、地域のこころの専門家としての実践能力を身につける。

2. 授業の内容

- ①事前学習（その1） 実際の実習に入る事前準備として、オリエンテーションを行う。ここでは、学外実習の効果的遂行のために、教育・福祉・医療の各領域における実習に臨む心構えや、各々の機関に関する基本的な予備知識及び倫理的課題について学習する。
- ②実習先オリエンテーション（その1） 教育・福祉・医療の各実習現場における実習担当臨床心理士から、当該実習に関するオリエンテーションを受ける。特に、各機関の業務に極力支障のないよう、かつスムーズに実習活動を行えるよう、倫理的問題や活動の制限について説明を受ける。
- ③当該機関の機能と特性（その1） 当該機関の施設・設備の見学を行うとともに、担当者より講義を受けることにより、機関の歴史的機能及び現在の社会的役割等について学習し、かつ機関の持つ特性について十分な知識を得ることで、効果的な実習への体制を作る。
- ④当該機関におけるさまざまな職種の役割と特性（その1） 当該機関におけるさまざまな職種（例・学校—養護教諭・生徒指導担当等、児童相談所—児童福祉司・一時保護係等、病院—医師・看護師等）の役割と特性について担当者より講義を受け、機関内のチームアプローチのあり方を学ぶ。
- ⑤当該機関における臨床心理士の業務（その1） 当該機関における臨床心理士の業務について、担当臨床心理士より説明を受ける。事例の傾向と病態水準、実際の心理査定におけるテストバッテリーの組み方、心理面接で使用される技法の傾向等実務の実際について学習する。
- ⑥他機関との連携（その1） 当該機関に関する諸機関（例・学校—教育センター・教育委員会等、児童相談所—児童施設・警察等、病院—保健所・中間施設等）との連携について担当者より講義を受け、社会における当該機関の果たす役割と課題について認識する。
- ⑦地域との関わり（その1） 当該機関のある地域との関わり（例・学校—P T A活動等、児童相談所—地域の保育所等、病院—地域との交流等）について担当者より講義を受け、コミュニティ心理学の観点から新しい地域心理臨床の考え方を学ぶ。
- ⑧事例カンファレンスへの出席（その1） 当該機関内で開催される各種ケース会議や事例検討会にオブザーバーとして参加することにより、各々の会の運営や実際のケース発表の仕方・ケース検討のあり方等を体験し、学内相談におけるカンファレンスと比較・学習する。
- ⑨事例面接の陪席（その1） 当該機関における実習期間中、許可された事例面接を陪席する。機関に特徴的な査定のあり方や面接方法などを体験的に学び、当該機関における心理臨床の実際について理解し、学内相談における査定や面接との違いを比較・学習する。

⑩ケース記録の書き方（その1） ⑨で陪席した事例や、機関に特徴的な事例の「ケース記録」を閲覧し、それに関する説明を受けるとともに質疑・応答を行う。その際、心理テストの解釈やケースの見立て、面接プロセスの記載の方法について特に理解を深める。

⑪領域別学習（教育その1）「子育て支援」—教育領域における実習として、子育て支援の具体的な方法について家庭教育学級などに参加する中で体験的に学習する。特に、カウンセリングの手法に加えて保護者へのコンサルテーションのあり方について実習を通して学習する。

⑫領域別学習（福祉その1）「出張相談」—福祉領域における実習として、児童相談所等の出張相談（巡回相談、3歳児精密検診、家庭訪問、保育所訪問等）に同行し、機関外における心理臨床活動を体験することにより、より能動的な福祉心理臨床のあり方を理解する。

⑬領域別学習（医療その1）「グループアプローチ」—医療領域における実習として病院における集団活動（集団心理療法、サイコドラマ、レクリエーション活動等）に参加し、病院内における集団活動のあり方とその意味について体験的に学習し、多様な治療的関与の方法を理解する。

⑭実習先における総括（その1） 教育・福祉・医療の各実習現場における実習担当臨床心理士から、当該実習に関する個人及びグループの総括的な講評を受ける。さらに、当該機関の心理臨床のあり方について質疑・応答を行い、体験を知的的理解にまで深化させ、実習の効果を確かなものにする。

⑮実習全体の総括（その1） 実習終了後、個人及びグループ単位で、当該実習担当教員との面接を行う。実習中の行動についての報告と評価、当該実習機関における心理査定、心理面接、心理臨床地域援助等の諸活動に関する理解と、心理臨床の実際についての認識を深める。最終レポートを課す。

3. テキスト

ジム・オーフォード著 山本 和郎監訳『コミュニティ心理学』ミネルヴァ書房

4. 参考図書

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第2巻 教育心理臨床』星和書店

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第3巻 医療心理臨床』星和書店

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第6巻 福祉心理臨床』星和書店

5. 成績評価方法

成績評価は、量的評価及びレポートを含む質的評価によって行う。量的評価と質的評価の割合は、各50%ずつである。量的評価と質的評価の評価基準は別に定める評価基準によるが、特に質的評価については、適宜詳細な評価をフィードバックしていくので、それを受け実習に取り組むこと。

6. オフィス・アワー

落合 美貴子：木曜日 17:00～18:00

金坂 弥起：木曜日 17:00～18:00

高橋 泰夫：火曜日 16:30～18:00

松木 繁：火曜日 16:30～18:00

7. 備考

受講生は、学外実習機関の業務に支障をきたしたり、サービス対象者の利益を損することのないよう言動には特に注意を要する。また、知りえた個人情報については漏洩なきよう倫理を遵守すること。なお、実習中は当該実習担当教官と常に連絡をとり、不測の事態や問題等は速やかに連絡を行い、その指示に従うこと。

2. 授業の概要

本授業は、教育・福祉・医療の各領域における学外機関において行う学外実習の授業であり、講義や演習で培った知識・技能を実際の体験に応用し、心理支援の実践力を修得することを目的とする。第二段階では、第一段階で培った心理査定についてより高度な専門的能力の修得を目指すとともに、使用される心理面接技法の技術及び留意点等臨床心理面接のあり方について基本的な考え方と技術を学ぶ。これらを陪席や実体験を通して修得することにより、地域のこころの専門家として必要な、より高度な臨床心理査定能力と臨床心理面接の基礎的能力を身につける。

2. 授業の内容

- ①事前学習（その2） 実際の実習に入る事前準備として、オリエンテーションを行う。ここでは、学外実習の効果的遂行のために、教育・福祉・医療の各領域における実習に臨む心構えや、各々の機関に関する基本的な予備知識及び倫理的課題について学習する。
- ②実習先オリエンテーション（その2） 教育・福祉・医療の各実習現場における実習担当臨床心理士から、当該実習に関するオリエンテーションを受ける。特に、各機関の業務に極力支障のないよう、かつスムースに実習活動を行えるよう、倫理的問題や活動の制限について説明を受ける。
- ③当該機関の機能と特性（その2） 当該機関の施設・設備の見学を行うとともに、担当者より講義を受けることにより、機関の歴史的機能及び現在の社会的役割等について学習し、かつ機関の持つ特性について十分な知識を得ることで、効果的な実習への体制を作る。
- ④当該機関におけるさまざまな職種の役割と特性（その2） 当該機関におけるさまざまな職種（例・学校—養護教諭・生徒指導担当等、児童相談所—児童福祉司・一時保護係等、病院—医師・看護師等）の役割と特性について担当者より講義を受け、機関内のチームアプローチのあり方を学ぶ。
- ⑤当該機関における臨床心理士の業務（その2） 当該機関における臨床心理士の業務について、担当臨床心理士より説明を受ける。事例の傾向と病態水準、実際の心理査定におけるテストバッテリーの組み方、心理面接で使用される技法の傾向等実務の実際について学習する。
- ⑥他機関との連携（その2） 当該機関に關係する諸機関（例・学校—教育センター・教育委員会等、児童相談所—児童施設・警察等、病院—保健所・中間施設等）との連携について担当者より講義を受け、社会における当該機関の果たす役割と課題について認識する。
- ⑦地域との関わり（その2） 当該機関のある地域との関わり（例・学校—P T A活動等、児童相談所—地域の保育所等、病院—地域との交流等）について担当者より講義を受け、コミュニティ心理学の観点から新しい地域心理臨床の考え方を学ぶ。
- ⑧事例カンファレンスへの出席（その2） 当該機関内で開催される各種ケース会議や事例検討会にオブザーバーとして参加することにより、各々の会の運営や実際のケース発表の仕方・ケース検討のあり方等を体験し、学内相談におけるカンファレンスと比較・学習する。
- ⑨事例面接の陪席（その2） 当該機関における実習期間中、許可された事例面接を陪席する。機関に特徴的な査定のあり方や面接方法などを体験的に学び、当該機関における心理臨床の実際について理解し、学内相談における査定や面接との違いを比較・学習する。

⑩ケース記録の書き方（その2） ⑨で陪席した事例や、機関に特徴的な事例の「ケース記録」を閲覧し、それに関する説明を受けるとともに質疑・応答を行う。その際、心理テストの解釈やケースの見立て、面接プロセスの記載の方法について特に理解を深める。

⑪領域別学習（教育その2）「子育て支援」—教育領域における実習として、子育て支援の具体的な方法について家庭教育学級などに参加する中で体験的に学習する。特に、カウンセリングの手法に加えて保護者へのコンサルテーションのあり方について実習を通して学習する。

⑫領域別学習（福祉その2）「出張相談」—福祉領域における実習として、児童相談所等の出張相談（巡回相談、3歳児精密検診、家庭訪問、保育所訪問等）に同行し、機関外における心理臨床活動を体験することにより、より能動的な福祉心理臨床のあり方を理解する。

⑬領域別学習（医療その2）「グループアプローチ」—医療領域における実習として病院における集団活動（集団療法、サイコドラマ、レクリエーション活動等）に参加し、病院内における集団活動のあり方とその意味について体験的に学習し、多様な治療的関与の方法を理解する。

⑭実習先における総括（その2） 教育・福祉・医療の各実習現場における実習担当臨床心理士から、当該実習に関する個人及びグループの総括的な講評を受ける。さらに、当該機関の心理臨床のあり方について質疑・応答を行い、体験を知的理解にまで深化させ、実習の効果を確かなものにする。

⑮実習全体の総括（その2） 実習終了後、個人及びグループ単位で、当該実習担当教員との面接を行う。実習中の行動についての報告と評価、当該実習機関における心理査定、心理面接、心理臨床地域援助等の諸活動に関する理解と、心理臨床の実際についての認識を深める。最終レポートを課す。

3. テキスト

ジム・オーフォード著 山本 和郎監訳『コミュニティ心理学』ミネルヴァ書房

4. 参考図書

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第2巻 教育心理臨床』星和書店

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第3巻 医療心理臨床』星和書店

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第6巻 福祉心理臨床』星和書店

5. 成績評価方法

成績評価は、量的評価及びレポートを含む質的評価によって行う。量的評価と質的評価の割合は、各 50%ずつである。量的評価と質的評価の評価基準は別に定める評価基準によるが、特に質的評価については、適宜詳細な評価をフィードバックしていくので、それを受け実習に取り組むこと。

6. オフィス・アワー

金坂 弥起：木曜日 17:00～18:00

高橋 泰夫：火曜日 16:30～18:00

松木 繁：火曜日 16:30～18:00

落合 美貴子：木曜日 17:00～18:00

7. 備考

受講生は、学外実習機関の業務に支障をきたしたり、サービス対象者の利益を損することのないよう言動には特に注意を要する。また、知りえた個人情報については漏洩なきよう倫理を遵守すること。なお、実習中は当該実習担当教員と常に連絡をとり、不測の事態や問題等は速やかに連絡を行い、その指示に従うこと。

3. 授業の概要

本授業は、教育・福祉・医療の各領域における学外機関において行う学外実習の授業であり、講義や演習で培った知識・技能を実際の体験に応用し、心理支援の実践力を修得することを目的とする。第三段階では、第二段階で培った高度な臨床心理査定能力と臨床心理面接の基礎的能力を基に、心理面接についてより高度な専門的能力の修得を目指すと同時に、当該機関で行われる集団支援のあり方について基本的な考え方と技術を学ぶ。これらを陪席や実体験を通して修得することにより、地域のこころの専門家として必要な応用的心理支援実践能力を身につける。

2. 授業の内容

- ①事前学習（その3）実際の実習に入る事前準備として、オリエンテーションを行う。ここでは、学外実習の効果的遂行のために、教育・福祉・医療の各領域における実習に臨む心構えや、各々の機関に関する基本的な予備知識及び倫理的課題について学習する。
- ②実習先オリエンテーション（その3）教育・福祉・医療の各実習現場における実習担当臨床心理士から、当該実習に関するオリエンテーションを受ける。特に、各機関の業務に極力支障のないよう、かつスムーズに実習活動を行えるよう、倫理的問題や活動の制限について説明を受ける。
- ③当該機関の機能と特性（その3）当該機関の施設・設備の見学を行うとともに、担当者より講義を受けることにより、機関の歴史的機能及び現在の社会的役割等について学習し、かつ機関の持つ特性について十分な知識を得ることで、効果的な実習への体制を作る。
- ④当該機関におけるさまざまな職種の役割と特性（その3）当該機関におけるさまざまな職種（例・学校—養護教諭・生徒指導担当等、児童相談所—児童福祉司・一時保護係等、病院—医師・看護師等）の役割と特性について担当者より講義を受け、機関内のチームアプローチのあり方を学ぶ。
- ⑤当該機関における臨床心理士の業務（その3）当該機関における臨床心理士の業務について、担当臨床心理士より説明を受ける。事例の傾向と病態水準、実際の心理査定におけるテストバッテリーの組み方、心理面接で使用される技法の傾向等実務の実際にについて学習する。
- ⑥他機関との連携（その3）当該機関に関する諸機関（例・学校—教育センター・教育委員会等、児童相談所—児童施設・警察等、病院—保健所・中間施設等）との連携について担当者より講義を受け、社会における当該機関の果たす役割と課題について認識する。
- ⑦地域との関わり（その3）当該機関のある地域との関わり（例・学校—PTA活動等、児童相談所—地域の保育所等、病院—地域との交流等）について担当者より講義を受け、コミュニティ心理学の観点から新しい地域心理臨床の考え方を学ぶ。
- ⑧事例カンファレンスへの出席（その3）当該機関内で開催される各種ケース会議や事例検討会にオブザーバーとして参加することにより、各々の会の運営や実際のケース発表の仕方・ケース検討のあり方等を体験し、学内相談におけるカンファレンスと比較・学習する。
- ⑨事例面接の陪席（その3）当該機関における実習期間中、許可された事例面接を陪席する。機関に特徴的な査定のあり方や面接方法などを体験的に学び、当該機関における心理臨床の実際にについて理解し、学内相談における査定や面接との違いを比較・学習する。
- ⑩ケース記録の書き方（その3）⑨で陪席した事例や、機関に特徴的な事例の「ケース記録」を閲覧し、それに関する説明を受けるとともに質疑・応答を行う。その際、心理テストの解釈やケースの見

立て、面接プロセスの記載の方法について特に理解を深める。

⑪領域別学習（教育その3）「子育て支援」—教育領域における実習として、子育て支援の具体的な方法について家庭教育学級などに参加する中で体験的に学習する。特に、カウンセリングの手法に加えて保護者へのコンサルテーションのあり方について実習を通して学習する。

⑫領域別学習（福祉その3）「出張相談」—福祉領域における実習として、児童相談所等の出張相談（巡回相談、3歳児精密検診、家庭訪問、保育所訪問等）に同行し、機関外における心理臨床活動を体験することにより、より能動的な福祉心理臨床のあり方を理解する。

⑬領域別学習（医療その3）「グループアプローチ」—医療領域における実習として病院における集団活動（集団療法、サイコドラマ、レクリエーション活動等）に参加し、病院内における集団活動のあり方とその意味について体験的に学習し、多様な治療的関与の方法を理解する。

⑭実習先における総括（その3）教育・福祉・医療の各実習現場における実習担当臨床心理士から、当該実習に関する個人及びグループの総括的な講評を受ける。さらに、当該機関の心理臨床のあり方について質疑・応答を行い、体験を知的理にまで深化させ、実習の効果を確かなものにする。

⑮実習全体の総括（その3）実習終了後、個人及びグループ単位で、当該実習担当教員との面接を行う。実習中の行動についての報告と評価、当該実習機関における心理査定、心理面接、心理臨床地域援助等の諸活動に関する理解と、心理臨床の実際についての認識を深める。最終レポートを課す。

3. テキスト

ジム・オーフォード著 山本 和郎監訳『コミュニティ心理学』ミネルヴァ書房

4. 参考図書

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第2巻 教育心理臨床』星和書店

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第3巻 医療心理臨床』星和書店

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第6巻 福祉心理臨床』星和書店

5. 成績評価方法

成績評価は、量的評価及びレポートを含む質的評価によって行う。量的評価と質的評価の割合は、各50%ずつである。量的評価と質的評価の評価基準は別に定める評価基準によるが、特に質的評価については、適宜詳細な評価をフィードバックしていくので、それを受け実習に取り組むこと。

6. オフィス・アワー

高橋 泰夫：木曜日 16:30～18:00

松木 繁：火曜日 16:30～18:00

落合 美貴子：木曜日 17:00～18:00

金坂 弥起：木曜日 17:00～18:00

7. 備考

受講生は、学外実習機関の業務に支障をきたしたり、サービス対象者の利益を損することのないよう言動には特に注意を要する。また、知りえた個人情報については、漏洩なきよう倫理を遵守すること。なお、実習中は当該実習担当教員と常に連絡をとり、不測の事態や問題等は速やかに連絡を行い、その指示に従うこと。

1. 授業の概要

本授業は、教育・福祉・医療の各領域における学外機関において行う学外実習の授業であり、講義や演習で培った知識・技能を実際の体験に応用し、心理支援の実践力を修得することを目的とする。第四段階では、第三段階で培った高度な臨床心理面接能力及び集団支援の基礎的能力を基に、集団支援についてより高度な専門的能力の修得を目指すと同時に、当該機関で行われる地域支援や危機介入のあり方について基本的な考え方と技術を学ぶ。これらを陪席や実体験を通して修得することにより、地域のこころの専門家として必要な高度の応用的心理支援実践能力を身につける。

2. 授業の内容

- ①事前学習（その4） 実際の実習に入る事前準備として、オリエンテーションを行う。ここでは、学外実習の効果的遂行のために、教育・福祉・医療の各領域における実習に臨む心構えや、各々の機関に関する基本的な予備知識及び倫理的課題について学習する。
- ②実習先オリエンテーション（その4） 教育・福祉・医療の各実習現場における実習担当臨床心理士から、当該実習に関するオリエンテーションを受ける。特に、各機関の業務に極力支障のないよう、かつスムースに実習活動を行えるよう、倫理的問題や活動の制限について説明を受ける。
- ③当該機関の機能と特性（その4） 当該機関の施設・設備の見学を行うとともに、担当者より講義を受けることにより、機関の歴史的機能及び現在の社会的役割等について学習し、かつ機関の持つ特性について十分な知識を得ることで、効果的な実習への体制を作る。
- ④当該機関におけるさまざまな職種の役割と特性（その4） 当該機関におけるさまざまな職種（例・学校—養護教諭・生徒指導担当等、児童相談所—児童福祉司・一時保護係等、病院—医師・看護師等）の役割と特性について担当者より講義を受け、機関内のチームアプローチのあり方を学ぶ。
- ⑤当該機関における臨床心理士の業務（その4） 当該機関における臨床心理士の業務について、担当臨床心理士より説明を受ける。事例の傾向と病態水準、実際の心理査定におけるテストバッテリーの組み方、心理面接で使用される技法の傾向等実務の実際にについて学習する。
- ⑥他機関との連携（その4） 当該機関に関する諸機関（例・学校—教育センター・教育委員会等、児童相談所—児童施設・警察等、病院—保健所・中間施設等）との連携について担当者より講義を受け、社会における当該機関の果たす役割と課題について認識する。
- ⑦地域との関わり（その4） 当該機関のある地域との関わり（例・学校—P T A活動等、児童相談所—地域の保育所等、病院—地域との交流等）について担当者より講義を受け、コミュニティ心理学の観点から新しい地域心理臨床の考え方を学ぶ。
- ⑧事例カンファレンスへの出席（その4） 当該機関内で開催される各種ケース会議や事例検討会にオブザーバーとして参加することにより、各々の会の運営や実際のケース発表の仕方・ケース検討のあり方等を体験し、学内相談におけるカンファレンスと比較・学習する。
- ⑨事例面接の陪席（その4） 当該機関における実習期間中、許可された事例面接を陪席する。機関に特徴的な査定のあり方や面接方法などを体験的に学び、当該機関における心理臨床の実際にについて理解し、学内相談における査定や面接との違いを比較・学習する。

-
- ⑩ケース記録の書き方（その4） ⑨で陪席した事例や、機関に特徴的な事例の「ケース記録」を閲覧し、それに関する説明を受けるとともに質疑・応答を行う。その際、心理テストの解釈やケースの見立て、面接プロセスの記載の方法について特に理解を深める。
-
- ⑪領域別学習（教育その4）「子育て支援」—教育領域における実習として、子育て支援の具体的な方法について家庭教育学級などに参加する中で体験的に学習する。特に、カウンセリングの手法に加えて保護者へのコンサルテーションのあり方について実習を通して学習する。
-
- ⑫領域別学習（福祉その4）「出張相談」—福祉領域における実習として、児童相談所等の出張相談（巡回相談、3歳児精密検診、家庭訪問、保育所訪問等）に同行し、機関外における心理臨床活動を体験することにより、より能動的な福祉心理臨床のあり方を理解する。
-
- ⑬領域別学習（医療その4）「グループアプローチ」—医療領域における実習として病院における集団活動（集団療法、サイコドラマ、レクリエーション活動等）に参加し、病院内における集団活動のあり方とその意味について体験的に学習し、多様な治療的関与の方法を理解する。
-
- ⑭実習先における総括（その4） 教育・福祉・医療の各実習現場における実習担当臨床心理士から、当該実習に関する個人及びグループの総括的な講評を受ける。さらに、当該機関の心理臨床のあり方について質疑・応答を行い、体験を知的理解にまで深化させ、実習の効果を確かなものにする。
-
- ⑮実習全体の総括（その4） 実習終了後、個人及びグループ単位で、当該実習担当教官との面接を行う。実習中の行動についての報告と評価、当該実習機関における心理査定、心理面接、心理臨床地域援助等の諸活動に関する理解と、心理臨床の実際についての認識を深める。最終レポートを課す。
-

3. テキスト

ジム・オーフォード著 山本 和郎監訳『コミュニティ心理学』ミネルヴァ書房

4. 参考図書

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第2巻 教育心理臨床』星和書店

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第3巻 医療心理臨床』星和書店

乾 吉佑・飯長喜一郎・篠木 満編『心理臨床プラティクス第6巻 福祉心理臨床』星和書店

5. 成績評価方法

成績評価は、量的評価及びレポートを含む質的評価によって行う。量的評価と質的評価の割合は、各 50%ずつである。量的評価と質的評価の評価基準は別に定める評価基準によるが、特に質的評価については、適宜詳細な評価をフィードバックしていくので、それを受けた実習に取り組むこと。

6. オフィス・アワー

松木 繁：火曜日 16:30～18:00

落合 美貴子：木曜日 17:00～18:00

金坂 弥起：木曜日 17:00～18:00

高橋 泰夫：木曜日 16:30～18:00

7. 備考

受講生は、学外実習機関の業務に支障をきたしたり、サービス対象者の利益を損することのないよう言動には特に注意を要する。また、知りえた個人情報については漏洩なきよう倫理を遵守すること。なお、実習中は当該実習担当教官と常に連絡をとり、不測の事態や問題等は速やかに連絡を行い、その指示に従うこと。

総合的事例研究演習 I 2年次前期 2単位 演習 安部恒久, 落合美貴子, 高橋泰夫
平川忠敏, 松木 繁, 山中 寛,
中原睦美, 金坂弥起, 服巻 豊

1. 授業の概要

2年間の専門職大学院課程のまとめとして、臨床心理士業務の4つの柱であるリサーチ能力を培う目的で、事例研究論文をまとめていくことに先立つ、事例研究法に関する授業である。本研究科における事例研究論文の位置づけを理解し、各心理臨床技法の立場による事例研究法の相違点を学習するとともに、実際の事例研究論文の講読やディスカッションを通して、事例研究論文執筆へのイメージを持たせ、自分が執筆想定している事例論文に関連するレビューを開始していくことを目的とする。授業は、専任教員全員が共同で担当し、学習や体験の深化と定着を図る。

2. 授業の内容

- ①<合同> 教員 A を主担当とした講義による臨床心理士業務の4つの柱を理解し、リサーチ力という側面での事例研究論文のあり位置づけについて学習する。さらに、技法による臨床事例研究論文の構成の相違を学習し、自分が予定する論文がどの技法の構成に適しているかを検討することを目的とする。
- ②<合同> 教員 B・C を主担当とし、教員 B・C の事例研究論文あるいは教員 B・C が推薦する事例研究論文をもとに演習形式で講読し、論文の構成や内容、心理面接技法についてディスカッションを行う。面接過程とタイトルやキーワード、論文の視点などの関連性について理解を深める。
- ③<合同> 教員 D・E を主担当とし、教員 D・E の事例研究論文あるいは教員 D・E が推薦する事例研究論文をもとに演習形式で講読し、論文の構成や内容、心理面接技法についてディスカッションを行う。面接過程とタイトルやキーワード、論文の視点などの関連性について理解を深める。
- ④<合同> 教員 F・G を主担当とし、教員 F・G の事例研究論文あるいは教員 F・G が推薦する事例研究論文をもとに演習形式で講読し、論文の構成や内容、心理面接技法についてディスカッションを行う。面接過程とタイトルやキーワード、論文の視点などの関連性について理解を深める。
- ⑤<合同> 教員 H・I を主担当とし、教員 H・I の事例研究論文あるいは教員 H・I が推薦する事例研究論文をもとに演習形式で講読し、論文の構成や内容、心理面接技法についてディスカッションを行う。面接過程とタイトルやキーワード、論文の視点などの関連性について理解を深める。
- ⑥<担当教員単位>受講生①が、関心のある事例研究論文についてレジメを作成し、内容に加え、論文の構成に関するディスカッションを行う。ここでは、なぜその論文を選択したのかの意図や読みとりの深さ、受講生の関心の方向性を確認し、臨床事例研究論文執筆への動機づけを高める。
- ⑦<担当教員単位>受講生②が、関心のある事例研究論文についてレジメを作成し、内容に加え、論文の構成に関するディスカッションを行う。ここでは、なぜその論文を選択したのかの意図や読みとりの深さ、受講生の関心の方向性を確認し、臨床事例研究論文執筆への動機づけを高める。
- ⑧<担当教員単位>受講生①が、2回目の発表として関心のある事例研究論文についてレジメを作成し、内容に加え、論文の構成に関するディスカッションを行う。ここでは、なぜその論文を選択したのかの意図や読みとりの深さや受講生の関心の方向性を確認し、臨床事例研究論文執筆への動機づけを高める。
- ⑨<担当教員単位>受講生②が、2回目の発表として関心のある事例研究論文についてレジメを作成し、内容に加え、論文の構成に関するディスカッションを行う。ここでは、なぜその論文を選択した

のかの意図や読みとりの深さ、受講生の関心の方向性を確認し、臨床事例研究論文執筆への動機づけを高める。

⑩<担当教員単位> 受講生①が、3回目の発表として関心のある事例研究論文についてレジメを作成し、内容に加え、論文の構成に関するディスカッションを行う。なぜその論文選択の意図や面接経過、考察に関する読みとりの深さを培い、自分がどのような事例を選択する予定であるかを確認し、文献レビューに着手する。

⑪<担当教員単位> 受講生②が、3回目の発表として関心のある事例研究論文についてレジメを作成し、内容に加え、論文の構成に関するディスカッションを行う。ここでは、なぜその論文選択の意図や面接経過、考察に関する読みとりを深め、自分がどのような事例を選択する予定であるかを確認し、文献レビューに着手する。

⑫<担当教員単位> 各自が持ち寄った6偏の事例研究論文に関する内容、構成、タイトル、視点のあたり方に関する疑問点を中心とした質疑を通して、事例研究法がもつ普遍性の意味や、事例抽出のあり方に関する理解を深化させる。次にタイトルと内容の連動性について学習する。

⑬<合同>自分が執筆しようと考える臨床事例研究論文と類似した論文についてレビューし概要をまとめ、コメントを加え、合同の場で発表する（受講生の半分）。ディスカッションを通して多彩な論文に触れ、さらに自分の事例研究論文に合致した構成のあり方や視点の向け方について学習する。

⑭<合同>自分が執筆しようと考える臨床事例研究論文と類似した論文についてレビューし概要をまとめ、コメントを加え、合同の場で発表する（受講生の残り半分）。ディスカッションを通して多彩な論文に触れ、自分の事例研究論文に合致した構成のあり方や視点の向け方について学習する。

⑮<担当教員単位> 合同での発表を受け、質疑を通して各受講生が体得したことや疑問点を吸い上げ、再度、事例研究法の意義や方法について学習し、事例研究論文執筆への動機づけを高める。自分が取り上げようとする事例に関する文献レビューの方向性を明確にし、文献レビューを開始する。これまでに自分がレビューした文献についてのレポート課題を最終課題として課す。

3. テキスト

特に指定しない。

4. 参考図書

『臨床心理学』創刊号 金剛出版、『臨床心理学研究の技法』下山晴彦編 福村出版

5. 成績評価方法

出席 20%、受講態度 20%、ゼミ内発表 30%、合同時発表 30%の割合で、教員全員の合評を参考にゼミ担当教員が評価する。第6回以降は、2週に1回の発表となる。発表内容やレビューの姿勢などを評価に含める。

6. オフィス・アワー 安部恒久：毎週木曜日 17時～18時。落合美貴子：毎週木曜日 17時～18時。 高橋泰夫：毎週火曜日 16時30～18時。平川忠敏：毎週月・木日 16時～19時。

松木 繁：毎週火曜日 16:30～18:00 山中 寛：毎週月曜日 17:00～18:00

中原睦美：毎週木曜日 17:00～18:00 金坂弥起：毎週木曜日 17:00～18:00

服巻 豊：毎週火曜日 17:00～18:00

7. 備考

演習形式の授業であり、遅刻・欠席厳禁、レポート提出日厳守のこと。

授業進行状況によっては、内容の順番を変更することがある。

1. 授業の概要

総合的事例研究演習Ⅰに引き続き、具体的に2年間の専門職大学院課程のまとめとして、自分が担当した事例について事例研究論文をまとめていくことを支援する授業である。事例の選択、テーマの絞り込み、キーワード、論文の構成、面接過程のまとめ方など、事例研究論文執筆の具体的な段階について、担当教員の指導のもと小グループで取り組み、最終的には事例研究発表を行い、専門職大学院における2年間の心理臨床活動の総括を行うことを目的とし、資格認定協会が求める臨床心理士業務の4つめの柱であるリサーチ能力を培うことを目的とする。授業は、専任教員全員が共同で担当し、学習や臨床体験の深化と定着を図り、事例研究のあり方を支援する。

2. 授業の内容

- ①<合同>受講生・教員全員が集合し、事例研究論文をまとめるにあたって、ケース選択時の留意点および、本授業の流れ、事例研究論文執筆に関する申し合わせ事項を確認し、執筆への動機づけを高める。第12回から第15回までを一括した事例研究論文発表会を設定することを周知させる。
- ②自分の担当教員のゼミにおいて、事例研究論文執筆に向けた事例の選定を行う。この際、その事例が単なる「担当した事例である」という理由ではなく、事例研究として意義ある視点を有するものであることを意識づけさせ、また、倫理的配慮を十分にした上で事例を選定することを目的とする。
- ③自らが選定した事例に関して、テーマとなる視点やキーワードについて発表を行い、ディスカッションを通して心理面接過程のテーマを絞り込む。さらに、自分の選定した事例について、どのようなレビューが必要かを確認し、文献レビューを開始する。
- ④自らが選定した事例に関して、順に紹介していくが、この回は受講生Aが文献レビューした論文の概要をレジメにして発表し、他の受講生とのディスカッションを通して、文献の読み込みを深め、自分の事例とどのような関連性があるのかという理解を深める。
- ⑤自らが選定した事例に関して、順に紹介していく。この回は受講生Bが文献レビューした論文の概要をレジメにして発表し、他の受講生とのディスカッションを通して、文献の読み込みを深め、自分の事例とどのような関連性があるのかという理解を深める。
- ⑥自らが選定した事例に関して、順に紹介していくが、受講生Aが2回目の文献レビューした論文の概要をレジメにして発表し、他の受講生とのディスカッションを通して、文献の読み込みを深め、自分の事例や④の文献とどのような関連性があるのかの理解を深め、本文執筆に着手する。
- ⑦自らが選定した事例に関して、順に紹介していくが、受講生Bが2回目の文献レビューした論文の概要をレジメにして発表し、他の受講生とのディスカッションを通して、文献の読み込みを深め、自分の事例や④の文献とどのような関連性があるのかの理解を深め、本文執筆に着手する。
- ⑧受講生Aの事例論文に関するディスカッションを行う。この回は、インテークまでの情報をもとに見立ての再確認を行い、次いで、心理面接過程の記録を元に、そこで生じている力動や面接関係、心理療法としての到達点や課題点について臨床心理学的側面から理解を深める。
- ⑨受講生Bの事例論文に関するディスカッションを行う。この回は、インテークまでの情報をもとに見立ての再確認を行い、次いで、心理面接過程の記録を元に、そこで生じている力動や面接関係、心理療法としての到達点や課題点について臨床心理学的側面から理解を深める。

⑩受講生 A の事例論文に関するディスカッションを行う。この回は、考察部分に関する視点のあて方や構成のあり方、および内容、さらに必要な観点や先行研究についてディスカッションを行う。さらに、事例研究論文としてふさわしいタイトルであるかを確認し、決定する。

⑪受講生 B の事例論文に関するディスカッションを行う。この回は、考察部分に関する視点のあて方や構成のあり方、および内容、さらに必要な観点や先行研究についてディスカッションを行う。さらに、事例研究論文としてふさわしいタイトルであるかを確認し、決定する。

⑫ <合同>臨床心理学研究科臨床心理学専攻事例研究発表会として、この回から 15 回までを一括して、一日かけて各自の事例研究を発表する。ここでは、本研究科の全教員が参加し、事例の理解のあり方や面接過程の力動の理解、事例論文としてのまとめ方などについて質疑応答を加えながらディスカッションを行う。ここでの発表内容、発表態度、質疑応答の中身など総合的に評価し、全教員の合評により総合評価を行う。この事例研究論文発表会には大学院 1 年生も参加させ、心理面接や事例研究の学習の機会として、また、次年度への動機づけを高めること目的に設定する。

⑬ 同上 (事例研究論文発表会)

⑭ 同上 (事例研究論文発表会)

⑮ 同上 (事例研究論文発表会)

3. テキスト

特に指定しない

4. 参考図書

『臨床心理学』創刊号 金剛出版

『臨床心理学研究の技法』下山晴彦編 福村出版

ほか、受講生のテーマに添って適宜紹介する

5. 成績評価方法

出席 20%、受講態度 20%、発表内容 20%、最終の事例研究論文発表会内容 40%の割合で、全教員の合議により評価を行う。発表会までに 4 から 5 回のゼミ内発表となるがそれも評価に含める。

6. オフィス・アワー

中山 寛：毎週 月曜日 17:00～18:00

安部恒久：毎週 木曜日 17:00～18:00

落合美貴子：毎週 木曜日 17:00～18:00

高橋泰夫：毎週 火曜日 16:30～18:00

平川忠敏：毎週月・木曜日 16:00～19:00

松木 繁：毎週 火曜日 16:30～18:00

中原睦美：毎週 木曜日 17:00～18:00

金坂弥起：毎週 木曜日 17:00～18:00

服巻 豊：毎週 火曜日 17:00～18:00

7. 備考

演習形式の授業であり、遅刻・欠席厳禁、レポート提出日厳守のこと。

授業進行状況によっては、内容の順番を変更することがある。

小グループと合同による授業を柔軟に組み合わせて運営するため、連絡事項を確認すること。

1. 授業の概要

不登校、いじめ、暴力行為など学校における子どものこころの問題は多様化し山積している。本演習では、こうした諸問題の解決のために必要な学校臨床心理学のあり方について、実際の学校場面を想定したうえで、ロールプレイやグループディスカッションを通して体験的に学ぶ。スクールカウンセラー業務の柱である児童・生徒、さらには保護者へ向けての個別的カウンセリングや教職員へのコンサルテーションの実際を学ぶだけでなく、学級集団、学校集団、さらには、地域を含めた学校コミュニティを見立てる力を養う。さらには、ストレスマネジメント教育など学校カウンセリングの新しい動向についても体験学習を交えながら体験的に学ぶ。

2. 授業の内容

- ①学校の現状と学校カウンセリングー文部科学省の統計資料を基に学校における生徒指導上の問題を統計的に概観し、児童・生徒の心の実態について考える。そして、その実態に即した効果的な学校カウンセリングのあり方はどのようなものかをグループディスカッションで深め、学校臨床心理学の特性について学習する。
- ②学校カウンセリングの歴史とその意義ー戦後のわが国における学校教育相談の歴史を振り返りながら、新たな展開として学校カウンセリングが必要とされてきた背景について考える。さらに、アメリカの学校カウンセリングとの比較検討の中で、わが国の学校カウンセリングの特性について考える。
- ③学校カウンセリングの基礎理論ー医療モデルに基づく個別的カウンセリングによる援助の仕方だけでなく、学校コミュニティの中で行う援助の方法にはどのようなものがあるのか、また、守秘と情報の共有など学校カウンセリング特有のあり方の検討を通して学校カウンセリングの基礎理論を学習する。
- ④不登校問題と学校カウンセリング1ー不登校問題の捉え方の歴史的な変遷を追いかねながら不登校問題を考えるにあたっての基礎理論を学習する。その上で、不登校児童・生徒の心の実態についてロールプレイを通して実際的に体験し、不登校児童・生徒の内面理解を深める。
- ⑤不登校問題と学校カウンセリング2ー不登校問題を児童・生徒の発達段階に即しながら、その特徴を理解する。学童期初期、学童期中期、学童期後期から青年期前期、青年期中期、各々の段階に発症する不登校児童・生徒の不登校状態の特徴とそれに応じた適応支援のあり方を考える。
- ⑥不登校問題と学校カウンセリング3ー多様化する不登校問題を状態像に沿って分類し、それぞれの状態像の理解と援助法について学習する。発症の契機となった原因によって異なる状態像に対して、個々に援助の方法が異なることを知り、より効果的な適応支援の方法を探る。
- ⑦不登校問題と学校カウンセリング4ー不登校問題を家族システムのあり方、さらには、学校コミュニティのあり方にまで視野を広げて考え、家族システムや学校コミュニティのあり方が不登校児童・生徒の内面へ与える影響について考え適切な適応支援の方法を探る。
- ⑧いじめ問題と学校カウンセリング1ー人権問題としてのいじめ問題を正しく理解し、いじめ被害の児童・生徒に対する心のケアに対して、スクールカウンセラーとして何ができるのかを個別相談的視点から学習する。

⑨いじめ問題と学校カウンセリング2－いじめ問題に対する構造的理解、例えば、いじめの四層構造などの理解を深め、学校コミュニティの中でのいじめ問題の解決に対して、より総合的な解決とその視点からの援助のあり方を学習する。

⑩虐待問題と学校カウンセリング－虐待問題の基本的な理解を深め、被虐待児童・生徒の心のケアに対するスクールカウンセラーの役割を考える。虐待防止法に基づく通告義務も含め、個別的対応だけでなく他機関との連携のあり方も学習する。

⑪特別支援教育と学校カウンセリング－LD, ADHD, アスペルガー症候群など軽度発達障害児童・生徒に対する理解を深め、彼らの適応支援に対する個別的対応や教師との連携による支援のあり方など、特別支援教育におけるスクールカウンセラーの役割を考える。

⑫非行問題と学校カウンセリング－非行問題の基本的な理解を深め、問題解決のためのスクールカウンセラーとしての役割を考える。凶悪化する少年事件をテーマとしてとりあげ、今どきの子ども・若者像の理解と心理臨床の果たす可能性と限界について学習する。

⑬学校における心の健康教育としてのストレスマネジメント教育1－予防的・育成的な視点から、学校における心の健康教育としてのストレスマネジメント教育を取り上げ、その意義や具体的な手法についてリラクセーション技法を中心に体験学習を通して学習する。

⑭学校における心の健康教育としてのストレスマネジメント教育2－⑬に統いてストレスマネジメント教育の具体的な技法について体験学習を通して学ぶ。特に、コミュニケーション・スキルやソーシャルスキルについて学習する。

⑮まとめ－これまで学習したことを基に、個別相談的視点からコミュニティ心理学的視点、予防的視点も含めた総合的な視点から学校カウンセリングのあり方を概観し、学校臨床心理学の果たす役割や今後の展望についてディスカッションを通してまとめる。

3. テキスト

村山正治編 「臨床心理士によるスクールカウンセラー」 現代のエスプリ別冊

4. 参考図書

森田洋司著 「不登校現象の社会学」 学文社

松木 繁他編著 「教師とスクールカウンセラーによるストレスマネジメント教育－子どものどんな力をひきだすのか－」 あいり出版

藤森和美編 「子どものトラウマと心のケア」 誠信書房

5. 成績評価方法

出席20%，受講態度30%，3回のレポート評価40%という評価になる。各回ごとにコミュニケーションペーパーを配り、その理解度による評価10%を加え総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

火曜日 16:30～18:00(コミュニケーションペーパーに対する回答を中心に)

7. 備考

☆授業は教育領域での学外実習を想定して、実践的な内容が多いのでディスカッションを中心に積極的な受講態度が望まれる。

1. 授業の概要

福祉領域は、臨床心理士の活動する領域の中でも歴史が古く、かつ携わる人の多い領域である。しかし、一口に福祉領域といつても、対象者の年齢、状態像等により心理臨床支援のあり様はさまざまである。本演習では、母子、児童、障害者(身体・知的・精神)、高齢者、女性等の各福祉対象者の今日的様相を理解し、それに対応する心理臨床支援のあり方について演習を通して実際的に学ぶことを目的とする。さらに、対象者にサービスを行うさまざまな機関の機能や現在問われている課題等も合わせて学び、福祉領域における心理臨床のあり方を模索する。

2. 授業の内容

- ①授業目標・評価及び全15回の授業内容についてガイダンスを行う。また、各論に入る前段として、さまざまな福祉領域を概観する。宿題として、福祉領域を6領域に分け、領域ごとに2,3名ずつの担当者を決定し、各自その福祉の歴史を文献調査することを課す。調査レポートは授業で順次発表する。
- ②母子・女性福祉の歴史について、レポート発表を基にディスカッションを行い、これまでの母子・女性福祉について体験的に理解を深める。その認識に則り、母子・女性福祉領域における心理臨床実践のあり方について文献購読を通してさらに深め、当該領域における基礎的な知識を獲得する。
- ③②の授業を基礎とし、母子・女性福祉領域における今後の心理臨床活動のあり方をグループディスカッションにより、主体的に学ぶ。また、母子・女性福祉領域の実際の心理臨床活動における留意点等を互いの意見交換の中でさらに深め、当該領域に関する今後の研究・実践の基礎とする。
- ④児童福祉の歴史について、レポート発表を元にディスカッションを行い、これまでの児童福祉について体験的に理解を深める。その認識に則り、児童福祉領域における心理臨床実践のあり方を文献購読により学び、当該領域における基礎的な知識を獲得する。
- ⑤④の授業を基礎とし、児童福祉領域における今後の心理臨床活動のあり方をグループディスカッションにより、主体的に学ぶ。また、児童福祉領域の実際の心理臨床活動における留意点等を互いの意見交換の中で学び、当該領域に関する今後の研究・実践の基礎とする。
- ⑥身体障害者福祉の歴史について、レポート発表を元にディスカッションを行い、これまでの身体障害者福祉について体験的に理解を深める。その認識に則り、身体障害者福祉領域における心理臨床実践のあり方を文献購読によりさらに深め、当該領域における基礎的な知識を獲得する。
- ⑦⑥の授業を基礎とし、身体障害者福祉領域における今後の心理臨床活動のあり方をグループディスカッションにより、主体的に学ぶ。また、身体障害者福祉領域の実際の心理臨床活動における留意点等を互いの意見交換の中で学び、当該領域に関する今後の研究・実践の基礎とする。
- ⑧知的障害者福祉の歴史について、レポート発表を元にディスカッションを行い、これまでの知的障害者福祉について体験的に理解を深める。その認識に則り、知的障害者福祉領域における心理臨床実践のあり方を文献購読によりさらに深め、当該領域における基礎的な知識を獲得する。
- ⑨⑧の授業を基礎とし、知的障害者福祉領域における今後の心理臨床活動のあり方をグループディスカッションにより、主体的に学ぶ。また、知的障害者福祉領域の実際の心理臨床活動における留意点等を互いの意見交換の中で学び、当該領域に関する今後の研究・実践の基礎とする。

⑩精神障害者福祉の歴史について、レポート発表を元にディスカッションを行い、これまでの精神障害者福祉について体験的に理解を深める。その認識に則り、精神障害者福祉領域における心理臨床実践のあり方を文献購読によりさらに深め、当該領域における基礎的な知識を獲得する。

⑪⑩の授業を基礎とし、精神障害者福祉領域における今後の心理臨床活動のあり方をグループディスカッションにより、主体的に学ぶ。また、精神障害者福祉領域の実際の心理臨床活動における留意点等を互いの意見交換の中で学び、当該領域に関する今後の研究・実践の基礎とする。

⑫高齢者福祉の歴史について、レポート発表を元にディスカッションを行い、これまでの高齢者福祉について体験的に理解を深める。その認識に則り、高齢者福祉領域における心理臨床実践のあり方を文献購読によりさらに深め、当該領域における基礎的な知識を獲得する。

⑬⑫の授業を基礎とし、高齢者福祉領域における今後の心理臨床活動のあり方をグループディスカッションにより、主体的に学ぶ。また、高齢者福祉領域の実際の心理臨床活動における留意点等を互いの意見交換の中で学び、当該領域に関する今後の研究・実践の基礎とする。

⑭諸外国の福祉領域における心理臨床実践報告やそれに関わる研究論文等を分担講読し、グループディスカッションを行う。それにより、国際的な福祉心理臨床活動について認識を広め、我国における心理臨床活動のあり方について、検討を行う。

⑮まとめとして、福祉心理臨床領域に通底する福祉の理念、特にユーザー主体の新しい福祉のあり方について、また当該領域における倫理的問題について学び、実践についての心構えを養う。最後に、福祉心理臨床についての質疑応答を行い、疑問点や不明確な点について理解を確実にする。福祉心理臨床に関する最終レポートを試験として課す。

3. テキスト

河合隼雄・東山紘久編『家族と福祉領域の心理臨床』金子書房

4. 参考図書

塙 和明・那須野三津子編著『社会福祉の学び』文化書房博文社

ジム・オーフォード著 山本 和郎監訳『コミュニティ心理学』ミネルヴァ書房

ジュディス・バトラー著 竹村 和子訳『ジェンダートラブル』青土社

伊藤 智佳子著『障害をもつ人たちのエンパワーメント』一橋出版

5. 成績評価方法

成績評価は、出席点 50%、中間レポート 20%、期末レポート 30%の配分。授業は、講義、レポート発表、グループディスカッションに分かれるが、中間レポート 1 回と授業内でのレポート発表及び期末レポートが義務づけられる。優れた発表・レポート及び質の高いディスカッションには高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17:00～18:00 E-mail: mochiai@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

受講生は、福祉心理臨床の現場実践を常に念頭に置いて、積極的に授業に参加されたい。

1. 授業の概要

本演習では、医療領域、特に精神科医療現場において必要な基礎的知識、精神疾患に対する理解、臨床心理士の業務内容や他職種との連携のあり方、援助職として求められる資質などについて、可能な限り網羅的に概観する。その上で、医療領域における心理的アプローチの意義や必要性、臨床心理士に求められる役割について理解を深めていく。授業はロールプレイやグループディスカッションを中心に、受講生同士の相互啓発を図りながら体験的に理解を深めていく。

2. 授業の内容

①本演習のオリエンテーション。授業の概要や進め方、成績評価方法、テキスト、参考文献などについて説明する。また、ディスカッションのためのグループ分けを行う。本演習の内容が、医療領域で行なわれる臨床心理実習と表裏一体のものであることを銘記されたい。

②精神医学から学ぶⅠ：精神医学の歴史を概観する。精神医学が精神病概念や疾病分類をどのように確立してきたかについて、ピネル、クレペリン、ブロイラー、ヤスパース、シュナイダーなどの先達から学ぶ。また、フロイトが確立した神経症概念も含めて、そうした疾病分類がどのような変遷を辿ることによって今日の診断マニュアル（ICD-10, DSM-IV-TR）が確立されるに至ったかについても理解を深める。

③精神医学から学ぶⅡ：精神疾患についての診断分類を学ぶ。統合失調症、躁うつ病、てんかん、器質性精神疾患などについて学ぶ。病因論を含めた精神病理、症状、経過と予後、各種治療論などを実際的な事例の紹介を通して概観する。その印象をディスカッション形式で話し合い、臨床心理士がどのように役に立てるかについて具体的に考察する。

④精神医学から学ぶⅢ：③に続いて精神疾患についての診断分類を学ぶ。神経症、人格障害、摂食障害、依存症、PTSD、心身症などについて、精神病理、症状、治療論などを実際的な事例の紹介を通して概観する。これらの疾患に対しては心理的な治療が奏効することが多いため、治療技法についても理解を深めていく。

⑤精神医学から学ぶⅣ：精神科医療における治療論を学ぶ。精神科医療現場においてはどのような治療法があるかについて、実際的な事例の紹介を通して、まずは俯瞰的に理解した上で、その中の心理的治療の意義や必要性、限界などを考える。また、中間レポート1として、これまでの内容を踏まえたテーマを各自設定して論述するという課題を課す。

⑥①から⑤までの内容を踏まえて提出された中間レポート1を主な素材にして、受講生自らが選んだいくつかのテーマについてグループディスカッションを行う。臨床心理学の隣接領域としての精神医学から、何を学び得るかについて改めて検討する。

⑦ライフサイクルと精神疾患Ⅰ：乳幼児期と児童期における精神疾患を、実際的な事例の紹介を通して学ぶ。その中で、乳幼児の認知発達や愛着理論、さらに、この時期に顕在化が多い発達障害や養育者の側の育児困難、家族への援助論についても言及する。

⑧ライフサイクルと精神疾患Ⅱ：思春期と青年期における精神疾患を、実際的な事例の紹介を通して学ぶ。この時期は、両親との情緒的・社会的分離や個人としての心理的・社会的アイデンティティの確立が大きな発達課題であり、それゆえ、さまざまな精神障害が発症し得ることを多角的に理解する。

⑨ライフサイクルと精神疾患Ⅲ：中高年における精神疾患を、実際的な事例の紹介を通して学ぶ。抑うつなどの中年期危機、老親介護に伴うストレス、初老期の認知症、自殺など、高齢化社会においてますます深刻化する中高年世代の精神疾患やメンタルヘルス上の課題について理解する。

⑩ライフサイクルと精神疾患Ⅳ：老年期における精神疾患を、実際的な事例の紹介を通して学ぶ。いわゆる認知症をはじめとして、うつ病、せん妄など、高齢者に特有の精神疾患について理解する。また、中間レポート2として、これまでの内容を踏まえたテーマを各自設定して論述するという課題を課す。

⑪⑦から⑩までの講義内容を踏まえて提出された中間レポート2を主な素材にして、受講生自らが選んだいくつかのテーマについてグループディスカッションを行う。生涯発達心理学的視点から、心の発達と精神疾患やメンタルヘルスとの関連について理解を深める。

⑫精神科病院における臨床心理士の役割Ⅰ：治療関係論を考える。治療契約と作業同盟、転移・逆転移関係、治療構造など、心理的治療のプロセスを詳細に理解する上で不可欠な観点から、治療関係そのものを理解することの意義を考える。

⑬精神科病院における臨床心理士の役割Ⅱ：他職種との連携について学ぶ。医療現場では主治医をリーダーとしてさまざまな職種によるチーム医療が行なわれる。こうしたチームの中で、他職種との連携を図りながら、臨床心理士がいかに独自性や専門性を發揮するかという実践上の課題を考える。

⑭精神科病院における臨床心理士の役割Ⅲ：家族に対する援助を学ぶ。精神科医療では、家族の理解と協力が患者本人の治療の成否を左右する場合が少なくないため、臨床心理士にはこうした患者家族への心理的サポートが求められる。そのための方法と実践上の工夫について検討する。

⑮精神科病院における臨床心理士の役割Ⅳ：臨床心理士としての職業アイデンティティとトレーニングについて考える。臨床心理士の職業アイデンティティやそれを醸成するトレーニングのあり方については唯一の正解はあり得ず、実践を通じてのみ考え続けていくべきものである。本演習のまとめとして、この正解のない問題についてディスカッションを通して真摯に議論を深めたい。

3. テキスト

小此木啓吾・深津千賀子・大野裕（編）『心の臨床家のための 必携 精神医学ハンドブック』（創元社）

4. 参考図書

北山修『精神分析理論と臨床』（誠信書房）

G.O.ギャバード『精神力動的精神医学』①②③（岩崎学術出版社）

5. 成績評価方法

おおむね出席30%、受講態度（ディスカッションにおける発言を含む）30%、期末レポート20%、中間レポート（5回終了時と10回終了時）20%を目安にして総合的に評価する。

6. オフィス・アワー

毎週水曜日 17:00～18:00 メールアドレス：FZN04543@nifty.ne.jp

7. 備考

一方通行の座学に終わらせないためにも、ディスカッションにおける積極的な発言を期待する。どんな些細な事象に対しても、ひたむきな問題意識をもって受講してほしい。授業の進行状況に応じて、内容の順序が変更される場合がある。

1. 授業の概要

本演習では、主として少年犯罪をとりあげ、犯罪心理学の知見を取り入れながら、非行行動の原因、動機解明の在り方、各種非行の心理的メカニズムについて理解を深める。さらに、立ち直りを図るための処遇について、その現状、改正少年法に盛られた処遇内容、更に今後改正が予定されている処遇システムの変更内容とその問題点にまで理解を進める。なお、個人情報保護の観点から生のケースを使用できないが、公刊された文献での事例検討を通してロールプレイやグループディスカッションを行い、実際的に理解を深める。

2. 授業の内容

- ①少年事件の処理の流れを説明し、非行少年処遇の全貌を理解させ、その上で心理臨床家として位置づけられる関係諸機関のスタッフの職務内容、採用方式等について述べ、司法・矯正領域の心理臨床への関心を喚起する。「最近の少年非行に思う」と題するレポート提出を課し学習意欲度を見る。
- ②犯罪白書に基づき、少年非行の動向について説明することにより、非行現象に対する客観的理解を促す。その中で特に最近の少年非行の特徴について述べ、それを基にして、その心理学的背景についてディスカッションを通して各自の理解を深めさせる。「非行原因・動機の解明」に関する演習に備え、公刊された「『少年A』この子を生んで」の読書を促す。
- ③非行原因論として、知能、性格、価値観、精神障害の有無等の資質と環境の問題との関係について実際的な事例を通して学び、その上に立って不適応機制、文化的感染、急性機制等の非行化の心理機制について説明し、非行行動が多くの要因の複合によって発生することを理解させる。
- ④非行・犯罪理論は個々の犯罪を理解するうえで仮説や枠組みを提供してくれ、かつケース理解に当たって多様な視点を提示してくれるものである。多くの理論の概説のあと、マートンのアノミー論、ミラー等のサブカルチャー論、サイクス等のドリフト・中和化技術論について理解させる。
- ⑤ ④につづき福島章著「現代人の攻撃性」で扱われた「新幹線爆破事件」について著書に沿って紹介し、その原因についてグループディスカッションを行う。その上で、福島の理解の仕方を事例に沿って解説し、非行・犯罪理論として自己同一性拡散論について説明する。
- ⑥ ②のセッションで課した「『少年A』この子を生んで」について読後感想を基に、非行を発生せしめた原因、動機は何か、考えられることについてグループディスカッションをさせ発表させる。「分からぬこと」、分かるためには「どんな作業、どんなデータが必要か」を明確に意識させる。
- ⑦非行原因、動機の解明は対象者のその後の処遇の方向性を策定する上で重要な作業である。そのための手法については他の講義・演習等で取り扱われているので概説に留め、ここでは、司法・矯正領域ならではの非行行動、犯行後の状況等に焦点を当ててのアセスメントの仕方を体験的に学ぶ。
- ⑧非行各論1では、少年による凶悪犯罪について、「重大少年事件の実証的研究」による事例を参考に、いわゆる大人しく目立たなかった少年等による犯罪の心理機制について説明する。また殺人という犯罪を理解するうえで重要な視点も提示する。
- ⑨各論2として、男子少年非行の中でも優位を占める窃盗、粗暴非行、薬物非行、暴走族による非行について、理解のポイント、その一般的な心理機制等を説明する。一般的な非行であるがゆえに外来相談などで接する機会が多く、即、役立つことも伝えておきたい。

⑩各論 3 として、女子非行について説明する。一般に男子に比して非行発生率は少ない。それだけに女子が非行化する背景には相当大きな問題の存在が予測される。また多くは依存的な非行であるが、最近では男性的な形態の非行も増加している。それらを踏まえたアプローチの仕方について講じる。

⑪各論 4 として強姦、強制わいせつ等の性非行については、一般に性についての認知の歪み、女性観の偏りが背後にあると言われているが、加えて充足されない接触欲求、支配欲があつたり、女性に対する敵意があつたりする。単独、集団による場合の心理的な意味の違いも踏まえた視点を提示する。

⑫非行対策としての社会内処遇について、家庭裁判所における保護的措置、保護観察所における保護観察、更生保護施設での処遇の現状について解説するとともに、特に最近の少年法改正の動きの中に見られる保護者に対する指導監督について述べ、家族ぐるみの指導の充実化策等についてディスカッションを通して深める。

⑬児童自立支援施設と少年院等施設内処遇について解説し、その中で改正少年法によって 14 歳未満の少年を少年院に収容できる制度の検討がなされていること、また先般改正された少年法で 16 歳以上の少年が原則送されことになったこと等について、その効果、是非についてディスカッションを通して深める。

⑭世論の高まりを受けて臨床心理士を取り込んだ被害者支援活動が活発化し、また、司法・矯正領域でも被害者の視点を踏まえた教育が導入され、一部警察機関では「修復的司法」の手法を採用し始めている。この種の活動の重要性と内包する様々な問題点を提示し深める。

⑮青少年育成施策大綱の施行により公的機関に勤務する心理臨床家は積極的に青少年の健全育成活動を支援することとされ、一般市民対象の心理臨床活動が活発化しつつある。支援に当たって特に留意すべき事項等について考える。最終につき「非行臨床の課題」と題したレポートを提出させる。

3. テキスト

「少年 A」の父母 著 「『少年 A』この子を生んで~父と母 悔恨の手記」

4. 参考図書

家庭裁判所調査官研修所監修「重大事件の実証的研究」司法協会(政府刊行物)

犬塚石夫編集代表「矯正心理学」上・下巻 東京法令出版

福島 章 著「現代人の攻撃性」太陽出版

5. 成績評価方法

出欠状況 30%、受講態度 30%、レポート 40%として総合的に評価する。

6. オフィス・アワー

毎週 木曜日 16:30~18:00

7. 備考

職業人たるに相応しい責任ある言動・態度を身につけていただきたい。進捗状況等の事情によって講義順番を変更することもある。講義中携帯電話は使用禁止する(マナーモード可)。

1. 授業の概要

本演習は、臨床心理士が産業領域で心理臨床活動を行うに際しての理論と実践を、演習を通して学習することを目的とする。臨床心理士としてカウンセリングやアセスメントの臨床心理学を基礎としながらも、産業領域においては、同時に職場集団や会社組織に関わる産業・組織心理学やコミュニティー心理学が必要とされる。自発的な問題意識の発展と、集団に関わる感性を養い、グループ・ダイナミックスを理解するために、積極的に少人数でのディスカッションやグループ・ワークを授業方法に導入する。

2. 授業の内容

①産業心理臨床の意義：本演習の目的と方法。現代産業社会の構造変革と、その渦中にある働く人のストレスを見据えながら、産業心理臨床は、相談室を超えて展開する。産業心理臨床の現代社会における必要性、産業心理臨床の歴史を検討すると共に、対話による授業方法を説明する。

②経営人事と産業心理臨床：経営の使命は、事業目標の達成と人材育成であり、両者の統合であるが、産業社会の構造変革の中にあってその達成は困難を極めている。また集団的労務管理から個別的人事管理への人事戦略の転換も課題であるが、それらと産業心理臨床との関連を検討したい。

③個人と組織の適合に向けて：個人と組織の適合は個別的人事管理政策の柱であるが、産業心理臨床の問題意識とも重なるところがある。特にキャリア・カウンセリングやキャリア開発は、個人主導の理念の基に、個人と組織の関係を模索する。産業心理臨床における個人と組織の適合を学ぶ。

④資格・倫理と産業心理臨床：産業心理臨床に倫理が必要とされるのは、クライエントの人権を守り、生命を守るためにある。また専門家が社会的に信頼され、自らの職域を守るためにも必要とされる。またこの分野の他資格を紹介するなど、産業心理臨床での倫理と資格について、ディスカッションを交えながら検討する。レポート課題1「産業心理臨床における臨床心理士の在り方」を提示し、次回提出を求める。

⑤カウンセリング、アセスメントと産業心理臨床：産業心理臨床におけるカウンセリング、アセスメントの特徴と実際を学習する。体験過程による個人療法を基礎としながらも、グループ・アプローチの視点が生きることや、集団・組織ダイナミックスのアセスメントの必要等を検討する。

⑥産業精神保健と産業心理臨床：臨床心理士にとって産業医、看護師、保健師等の産業精神保健スタッフとチームを組んで、精神障害のケースに関わることが重要である。チーム医療の在り方、厚生労働省のメンタルヘルスに関する指針、予防を中心とする地域精神保健の基本等を学ぶ。

⑦コミュニティ・アプローチと産業心理臨床：危機介入、コンサルテーション、ソーシャル・サポート、ネットワーキング等を中心にして、職場におけるコミュニティ・アプローチを検討する。組織を対象にし、予防・教育を重視し、事例性を重視し、心理的成長モデルによる姿勢を学ぶ。

⑧キャリア・カウンセリング、キャリア開発と産業心理臨床：キャリアとキャリア・カウンセリングの定義と特徴を検討した後、キャリア・カウンセリングの基礎理論と基本技法を概観する。さらに、学生、若手・中堅、管理職、専門職、女性、中高年社員のキャリア開発の実際活動を検討する。

⑨EAP（従業員支援プログラム）と産業心理臨床：従来のメンタルヘルス対策と異なり、EAPは医療的な支援だけでなく、企業の生産性の維持・向上に着目し、早期発見、予防、組織の改革までを視野に入れる。アメリカでアルコール依存対策から誕生したEAPの概略を検討する。レポート課題2「産業心理臨床における取り組みの方針」を提示し、次回提出を求める。

⑩相談室運営の実際：企業にどのように相談室を設置し、どのように運営するのかを検討する。設立の意図、相談室の組織上の位置と所属・名称・場所、カウンセラーの選択、診療所・総務課との連携、相談業務の範囲、相談室のPR等様々な項目があるが、その企業規模による違い等も学ぶ。

⑪産業心理臨床の事例1：他領域とは異なる産業心理臨床のケースへの関わり方の特徴を学習する。一つには、面接の目的を限定することが挙げられる。例えば、ストレス対処ならば、それだけに限定して、クライエントの性格問題等への関わりは最小限にして、あまり深入りはしない姿勢である。

⑫産業心理臨床の事例2：事例1に引き続き、ケースへの関わり方の特徴を学習する。目的として、際限のない自己成長は相応しくない。体験過程を進めることが目的ではなく、体験過程推進が本人の現実適応を高めるからで、仕事適応・職場適応が中心目標となる。退行させ過ぎないことを学ぶ。

⑬教育研修と産業心理臨床：組織への取り組みといつても、臨床心理士が組織全体に関わる機会は必ずしも多くはない。そのため各種の教育研修は、貴重な機会であり、組織へのアプローチの中でも中心となる。教育研修の体系的・長期的実施計画、運営基本方針、研修内容のデザインを学ぶ。

⑭教育研修の事例：メンタルヘルス研修、コミュニケーション研修、ストレス・マネジメント研修等各種研修の実際事例を学ぶ。教育研修の運営には、グループ・アプローチの理論と技法が活用される。研修内容のデザインには、構成的グループ・アプローチの内容や技法を用いることを学ぶ。

レポート課題3「産業心理臨床における事例への関わり」を提示し、次回提出を求める。

⑮産業心理臨床の課題と展望：わが国の産業メンタルヘルス対策は焦眉の急にあるといえる。この状況の中で、臨床心理士はどのように活動できるのだろうか。またそのためには、産業領域で働く臨床心理士はどのように養成される必要があるのか。現状の問題と今後の方向を模索したい。

3. テキスト

榎木満生編著（2003）『実践入門産業カウンセリング』川島書店

4. 参考図書

横山哲夫編著（2004）『キャリア開発／キャリアカウンセリング』生産性出版

日本産業カウンセリング学会（2000）『産業カウンセリングハンドブック』金子書房

市川佳居（2004）『従業員支援プログラムEAP導入の手順と運用』かんき出版

5. 成績評価方法

出席20%，受講態度20%，レポート課題1は20%，レポート課題2は20%，レポート課題3は20%で、総合的に評価する。ディスカッションで積極的に発言し、取り組む姿勢は、ポジティブに評価する。

6. オフィス・アワー

E-mail address nitta@obirin.ac.jp tel&fax 042-797-9415

7. 備考

集団に関わる感性を養い、グループ・ダイナミックスを理解するために、少人数でのディスカッションやグループ・ワークを授業方法に導入するので、積極的に発言し、取り組むことを望む。

1. 授業の概要

児童は社会的状況の中で成長するものであり、認知能力、情緒的反応、関係性の能力、社会的行動等の児童の発達の様々な側面が研究されてきた。そして今日、児童を取り巻く環境はじわじわと児童にとって窮屈なものになり、その中で堪え切れなくなった児童は、さまざまな不適応反応を示す。本講義では、児童期におけるアイデンティティ形成過程について講じるとともに、様々な臨床的症候群や児童虐待などの問題をとりあげ、心理臨床家としての心理的援助のあり方について考える。

2. 授業の内容

- ① 乳児期の発達段階過程について概観する。乳児期における運動機能の発達と知能、情緒的発達過程について概観し、Erikson,E.H.の「基本的信頼感」、Piaget,J.の「感覚運動期」の理論についての理解を深める。
- ② Erikson,E.H.の「自律性」、Piaget,J.の「前概念的段階」の理論を中心に、幼児がどのように社会的能力を獲得していくかを概観し、その時の親子関係のありかたと心理的援助のありかたについて理解を深める。
- ③ 2歳から5歳あたりまでの前学童期にある児童の精神発達について講ずる。Erikson,E.H.の「積極性」の獲得やファンタジーの世界の発達のありかた、心的防衛機制について理解を深めるとともに、自尊感情の発達にまつわる親子関係のありかたについて概観する。課題1：これまでの講義内容について各自テーマを設定して論述する。
- ④ ③で課したレポート内容に基づいたグループディスカッションを行なう。児童期における「正常発達 (Philip Barker)」についてさらに理解を深化させる。さらに、児童期における精神障害の要因とその対応についてグループディスカッションを行なう。
- ⑤ 心理臨床場面で出会う子どもと家族のアセスメントのあり方についてグループディスカッションも含めて講ずる。効果的なアセスメントを行なうために留意すべきことや事例の定式化 (formulation) についての理解を深める。
- ⑥ 児童期の精神障害Ⅰ：行為障害および反抗性障害・反社会的行動を特色とする障害について講じる。要因とその臨床像、随伴する障害等について概観し、その心理的援助のあり方についてグループディスカッションを通して理解を深める。
- ⑦ 児童期の精神障害Ⅱ：不安障害・分離不安障害や、恐怖症、強迫性障害、解離性障害等と、各々に随伴する障害等について概観する。また、これらに特に関連する不登校について、その臨床像についても講じる。
- ⑧ 児童期の精神障害Ⅲ：気分障害・児童期における気分障害と青年期、成人期以降にみられるその相違について講じる。さらに、自殺および自殺企図の問題も取り上げ、どのように重症度をアセスメントするのか、そして心理的援助のありかたについて理解を深める。
- ⑨ 児童期の精神障害Ⅳ：遺尿症と遺糞症・これらの臨床像について講じる。これらへの心理的援助のありかたの一つである行動療法についても講じるとともに、幼児期におけるトイレット・トレーニングの意味について考察する

⑩精神障害の予防：児童期においても障害が確立するまで待ってそれから治療を始めるよりも、障害を予防する方が望ましいのは明らかである。Caplanによる予防精神医学についての理解を深める。課題2：⑥～⑩までの講義内容について各自テーマを設定して論述する。

⑪児童虐待についてI：近年、大きな社会問題の一つとなっている児童虐待について取り上げる。児童虐待の4つの分類に沿って概観し、児童虐待が起こる背景や被虐待児の臨床像について講じ、随伴する障害についても講じる。

⑫児童虐待についてII：児童虐待事例の重症度、危険度のアセスメントのしかた、初期介入のありかたについて講じるとともに、グループディスカッションを通して、様々な援助、介入の方法について学ぶ。

⑬児童虐待についてIII：児童虐待への対応のあり方について、特に臨床心理士の果たすべき役割とは何か、関連機関との連携のとりかた等についてグループディスカッションを通して各自の理解を深める。

⑭ターミナル・ケア：「死にゆく子ども」と家族の心理的状態について講じ、心理的援助とはなにか、また、子どもと家族に対して、いかなる心理的援助のありかたが考えられるか、グループディスカッションを通して理解を深める。

⑮まとめ：これまでの授業の中でとりあげた児童期における諸問題について、もう一度概観し、心理臨床家としての果たすべき役割とは何か、アセスメントの方法や他職種との連携のありかたを含めて議論を深める。

3. テキスト

Philip Berker 山中康裕・岸本寛史監訳 『児童精神医学の基礎』 金剛出版

Philip Berker 中村伸一・信国恵子監訳 『家族療法の基礎』 金剛出版

4. 参考図書

坂井聖二・奥山真紀子・井上登生編著 『こども虐待の臨床 医学的診断と対応』 南山堂

高橋祥友 『自殺の危険』 金剛出版

5. 成績評価方法

出席 20%，中間レポート（3回終了時と10回終了時）各々 20%，期末レポート 40%を基準に総合的に評価する。

6. オフィス・アワー

月曜日 12:00～13:00 e-mail:m_iida@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

グループディスカッションを多く行なうので、履修学生には児童期心理臨床の現場実践を念頭に入れて、積極的な発言、参加態度をとることを望む

1. 授業の概要

自我心理学の発達と共に自我の発達過程が重要視され、特に、青年期におけるさまざまな発達課題やアイデンティティ形成の問題は、青年期の精神病理との関連において重要とされている。本演習では、青年期の心と発達課題を第二の個体化過程(Blos)と捉え、先ず、各段階での発達課題について概観する。その上で、ひきこもり、リストカットなどの自傷行為、摂食障害など、現代青年の特徴的な状態像を発達的観点から捉え直し、適切な心理臨床的援助のあり方についてロールプレイやグループワークなどの演習を通して学ぶ。

2. 授業の内容

①青年期の意味ー青年期は肉体的成熟と心理・社会的な発達を遂げるための重要な時期であるが、各時期の特徴について、自分の体験を基にディスカッションを行い、体験的に青年期の意味を理解する。そして、青年期前期・青年期中期・青年期後期の各段階での発達上の課題について文献紹介をしたうえで理論的にも理解を深める

②青年期における内的発達課題 1ー青年期は第二の分離ー個体化過程とも言われ、青年期における精神病理を考えるうえでも Mahler,M.S.の分離ー個体化理論を理解しておくことは重要である。今回は Mahler,M.S.の分離ー個体化理論そのものについて文献講読を行う。

③青年期における内的発達課題 2ーMahler,M.S.の分離ー個体化理論を基にしながら、青年期の発達課題を発達論的な観点から学習する。また、発達課題と精神病理との関連を現代の若者の抱える具体的な問題行動や症状との関連について事例を通して学習する。

④青年期の発達課題ー青年期における各段階を便宜上、3つの段階に分けてその発達課題や特徴についてグループ学習する。3つに分けたグループでの学習課題を、各々、青年期前期、青年期中期、青年期後期における発達課題や特徴と位置づけて、生物学的、心理・社会学的な側面から青年期の発達課題を学習する。

⑤グループ発表 1ー先ず、1つ目のグループによる前青年期・青年期前期(学童期後半～中学生頃に当たる)における発達課題や特徴についての発表を基にして、前青年期・青年期前期の生物学的、心理・社会学的な側面について理解を深める。

⑥グループ発表 2ー2つ目のグループによる青年期中期(高校生頃に当たる)における発達課題や特徴についての発表を基にして、青年期中期の生物学的、心理・社会学的な側面について理解を深める。特に、親からの分離と家族外対象の発見、異性愛への転向と性同一性の確立について理解する。

⑦グループ発表 3ー次のグループによる青年期後期(大学生頃に当たる)における発達課題や特徴についての発表を基にして、青年期後期の生物学的、心理・社会学的な側面について理解を深める。特に、自我同一性の確立の達成及びその挫折(自我同一性の拡散など)の諸相について理解する。

⑧青年期における挫折の諸相ー青年期は肉体的成熟と心理・社会的な発達を遂げるための重要な時期であるが、それ故に、その課題が達成されない時には、青年期特有の問題や症状を発生させる。今回は、青年期における挫折の諸相を事例を通して具体的に提示しながら学習し青年期における挫折の諸相を概観する。

⑨摂食障害－青年期特有の状態像として、先ず、摂食障害を取り上げる。Anorexia Nervosa は当初、「思春期やせ症」と呼ばれ、思春期女子に特有に発症するとされていた。その病理を発達課題との関連で学習する。同時に、Bulimia Nervosa についても具体的な事例を通して学ぶ。

⑩リストカット依存－従来から言われてきたリストカットとは異なり、現代の若者像、特に、青年期女子に多発しているリストカット依存と言われる自傷行為に関して、具体的な事例を通して、その病理を発達課題との関連で学習する。

⑪ステューデント・アパシー－現代の若者、特に、高校生や大学生に多く見られるようになった勉学に無関心で無気力な生活を送るアパシー青年について、具体的な事例を通して、その病理と発達課題とを自我同一性の視点から具体的に学習する。

⑫対人恐怖症－親からの分離と自立を達成する時期である青年期において、新たな対人関係形成のつまずきを契機に発症する対人恐怖症の病理を発達課題との関連で学習する。特に、神経症レベル、精神病圈レベルとの差異を、具体的な事例を通して、明確に位置づけながら学習する。

⑬ひきこもり－現代の若者の病理として社会問題化しているひきこもりの状態に関して、病理的な側面と青年期の発達課題との関連で検討し学習する。特に、神経症レベル、精神病圈レベルとの差異を、具体的な事例を通して、明確に位置づけながら講ずる。

⑭家庭内暴力－不登校やひきこもりに随伴的に生ずる可能性の高い家庭内暴力の事例に関して、病理的な側面と親からの分離、自立という心理・社会的課題との関連で学習する。特に、暴力に対する親の対応についても発達課題の点から考える。

⑮まとめ－青年期前期・青年期中期・青年期後期にわたる、各段階における挫折の諸相について具体的な事例を検討し、さまざまな問題や症状に対してのより適切な援助のあり方について、心理臨床的な観点からまとめる。

3. テキスト

馬場謙一他編

青年期の深層(日本人の深層分析 10)

有斐閣

4. 参考図書

伊藤 洋著

精神発達と分離・個体化理論(小此木啓吾編「青年の精神病理 2」) 弘文堂

鑑幹八郎他著

青年期のアイデンティティ(季刊「臨床心理学」vol.2 no.6, 2002) 金剛出版

5. 成績評価方法

出席 20 %, 受講態度 30 %, 3回のレポート評価 40 %という評価になる。各回ごとにコミュニケーションペーパーを配り、その理解度による評価 10 %を加え総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

火曜日 16:30～18:00(コミュニケーションペーパーに対する回答を中心に)

7. 備考

☆授業は学内実習及び学外実習を想定して、臨床現場に即した実践的な内容が多いので、ディスカッションを中心に積極的な受講態度が望まれる。

1. 授業の概要

近年の発達観やライフサイクルの変化を背景とした、成人期以降の発達課題や精神機能、成人後期・老年期における心理的適応について学習する。まず、加齢・老化にともなう心理的影響について、認知機能、パーソナリティ側面、ストレスについて、精神医学、神経心理学領域の文献を精読する。そのうえで、成人以降を対象として、心理臨床、医療・福祉領域で施行されている心理検査、心理療法、ストレス支援の知識・技術を学び、心理臨床家としての専門性と他職種との連携のあり方を学ぶ。

2. 授業の内容

①成人期・老年期の発達課題とライフサイクル

成人期以降の発達とその発達課題における諸理論を概観する。さらに、現代のライフサイクルにおける新しい心理社会的課題を、心理臨床、社会福祉、精神医学領域から検討し、成人期以降の心理的適応の在り方を模索する。

②成人期以降の認知機能

知的機能の発達と加齢の影響について、ここ40年間にわたる成人期以降の知能研究を概観する。系列法による知的能力の加齢パターン、維持される知的機能と低下する機能、老化と記憶力、老年期の「知恵」について学習する。

③成人期以降のパーソナリティ研究

成人期以降の代表的なパーソナリティ研究をあげて、縦断的・横断的研究から導き出された知見を概観する。そのうえで、成人・老年領域で関心の高い自我の発達課題について学習する。また、臨床場面における、心理的防衛や精神症状との区別、性格と適応性の関連について学習する。

④成人期・老年期の精神障害—認知症・老年期うつ病等

成人期以降の精神障害について、若年性・老年性アルツハイマー病、脳血管性痴呆の精神症状とそのプロセスを概観したうえで、認知症者の心理的侧面をとりあげる。また、機能性精神障害として、老年期うつ病の加齢との関連、発症の要因、状態像を学習する。

⑤成人期・老年期の心理的適応—QOLと心理的ウェルビーイング

これまでの加齢にともなう機能の低下や衰退という高齢者研究は、ライフサイクルの変化によって健康を維持し、意欲をもった高齢者の出現により、サクセスフルエイジングやQOLという概念へと転換している。そのキヤ概念である高齢者の主観的幸福感・心理的ウェルビーイングについて学習する。課題1、これまでの成人・老年期の発達課題から重要な点を整理し、心理的適応の概念をまとめる。

⑥心理検査（認知・記憶機能スケール等）

成人・老年を対象とした心理アセスメントとして、認知・記憶機能の評価法を学習する。そのうえで、記憶検査や神経心理学的検査について、障害のプロフィールの把握や認知障害の内容について演習を行う。

⑦心理検査（認知症鑑別スケール、うつ状態、せん妄レベル）

成人期以降、とくに認知症およびうつ状態のスクリーニングテストや行動評価法、投影法を概観し、臨床現場で使用頻度の高い、認知症鑑別スケールやうつ状態評価尺度を学習する。また心理検査における留意点について、具体的にあげて検討する。

⑧心理療法1（回想法、芸術療法）

成人期・老年期を対象とした心理療法1として、使用頻度の高い心理的アプローチの技法を概観する。とくに、一般の高齢者から、感情障害、認知症高齢者、エイズや癌の末期患者にいたるまで広く使用されている回想法と芸術療法（コラージュ療法）を、ロールプレイ等を用いて、実践的に学習する。

⑨心理療法2（包括的心理支援、バリデーションセラピー）

成人期・老年期を対象とした心理療法2として、リハビリや介護を要するクライエントを対象とした心理的アプローチを学習する。他職種との連携のなかで多理論を包括的に用いる心理支援、クライエントのQOLを高める支援として包括的心理支援とコミュニケーション法としてのバリデーションセラピーを学習する。課題2、取り上げた心理アセスメントと心理療法を1つづつ選択し、資料として配布したレビューを要約する。

⑩心理面接・事例研究1（認知症の高齢者、中高年のうつ症状のクライエント）

認知症の高齢者の事例をあげて、そのアセスメント、診断後の心理的支援の実際について、具体的に検討する。また、中高年以降の増加する自殺の背景にある、うつ症状の事例から、心理臨床的支援についてビデオを用いて学習する。

⑪心理面接・事例研究2（福祉施設・介護ケアスタッフ・家族へのカウンセリング）

家族介護や施設介護（グループホーム・特別養護老人ホーム）における、高齢者介護の現場の問題や、介護者へのカウンセリングと心理的支援を取り上げる。クライエントの個性や疾患のレベル、サポート資源を評価し、医療・福祉システムの把握から、より深い信頼と的確な心理面接を学習する。また、地域の高齢者福祉施設で、観察学習を含めて実践的に心理的支援の在り方を学習する。

⑫成人期と老年期のストレスと適応

ライフサイクルに沿ったストレスと心理適応について概観する。ストレスのメカニズムの理解と支援のあり方について学習する。成人期以降のライフイベント、デイリーハッスル。ラザルスのモデルをベースとしたストレスの認知的評価、ストレス反応を学習する。

⑬成人期におけるストレス支援

成人期のストレスとして、ワークストレス（とくに高齢者福祉介護現場）を取り上げて、その実態の把握をストレス研究のレビューから行う。そのうえで、ストレス支援として、家庭、職場、コミュニティでの取り組みと効率性と効果について学習する。

⑭老年期におけるストレス支援

医療や福祉現場で高齢者が抱えるストレス環境と心理的不適応について概観する。そのうえで、高齢者の心理的適応に寄与するストレス支援の在り方を検討する。入院患者や高齢者福祉施設に入所しているクライエントのストレス源とサポート源、ストレス対処行動を理解し、個々の利用者が期待する効果的なサポートについて検討する。

⑮専門職としての連携の在り方。最終レポート提出。レポートの課題は面接事例かストレス支援の具体例を取り上げ、総合的に解釈し個々の視点を提示してもらう。

成人期・老年期の心理支援における心理アセスメント、心理療法を行ううえで必要な専門職としての連携の在り方を検討する。医療や福祉、コミュニティ現場における、心理支援の限界と可能性について学習し、さらに専門職のバーンアウトについて考える。

3. テキスト

福祉心理臨床学 十島 雍蔵編 ナカニシヤ出版

高齢者理解の臨床心理学 稲谷ふみ枝著 ナカニシヤ出版

4. 参考図書

老年期の精神科臨床 室伏君士著 金剛出版

痴呆の人とともに（痴呆の自我心理学入門） ジェーン・キャッシュら著 訓霸法子訳 クリエイツかもがわ

5. 成績評価方法

出席 20%, 受講態度（質疑応答・ディスカッション） 20%, レビュー課題 20%, レポート課題 40% で総合的に評価する。講義 5 コマ、9 コマ目に中間評価として、講義の理解度、レビュー課題についての評価を行う。

6. オフィス・アワー

E-mail address : f i n a t a n i @ d f u . a c . j p

基本的に月曜日の午後。それ以外の時間帯でもメールであれば、連絡可能。

7. 備考

遅刻・欠席は（妥当な理由を除いて）認めない。講義前のテキスト、資料の精読を課す。課題は提出期日厳守のこと。

1. 授業の概要

発達障害者について、診断学的な基礎知識ならびに行動面、情緒面に現れる諸特徴について理解を深めることを目的とする。また、平成17年4月より施行された発達障害者支援法においては、早期発見の必要性、発達支援、生活支援、就労支援ならびに家族支援について適切な施策をするよう明記されている。教育、福祉、医療の現場で臨床心理士に求められる発達障害者に関する必要な基礎知識、発達アセスメント法から発達障害を抱えた本人、家族も含めた生活支援について体系的に学習する。

2. 授業の内容

①発達障害者支援法の「発達障害」についての定義について学ぶ。臨床的記述をもとにした統計的診断基準であるDSMとICDに記載されている多様な発達障害の診断基準について学び、各発達障害者の臨床像について学習する。

②発達障害である自閉症、アスペルガー症候群、注意欠陥多動性障害、学習障害について臨床像、行動面、情緒面、認知面の諸特徴について学習する。

③自閉症、アスペルガー症候群が発見された歴史的背景と現在のアメリカとイギリスの診断の違いについて知る。自閉症、アスペルガー症候群がなぜ幼児期、学齢期に注意欠陥多動性障害と誤診されることが多いか、広汎性発達障害という診断名にまつわる誤解について整理して学習する。

④発達障害者支援法に定められる発達障害者への支援についての国や地方行政の責務について学ぶ。法制化により求められる早期発見、早期療育が重要視されたようになった経緯や実際の効果についてこれまでの障害児教育に少し触れながら学び、現在必要とされる幼児期から成人までの発達障害者への生活支援についての視点を学ぶ。

⑤平成18年10月に施行される特別支援教育法で扱われている「発達障害」の特別支援の内容について学ぶ。発達障害者支援法における発達評価と支援ならびに特別支援教育法における発達評価と特別支援教育の違いについて体系的に学ぶ。

⑥自閉性障害（自閉症、アスペルガー症候群の総称）を中心に、生育歴上に現れる発達特徴について学習する。さらに、自閉性障害の幼児期、思春期、青年期、成人期における臨床像について学習する。

⑦自閉性障害（自閉症、アスペルガー症候群の総称）を中心に、日常生活上に見られる行動面、情緒面、認知面の諸特徴について学習する。自閉性障害の諸特徴をもとに、日常生活上、彼らが困難となるであろう出来事についてグループディスカッションを行い、全体で考えを共有化する。

⑧自閉性障害の諸特徴に基づき幼児期の自閉性障害児への受講生同士で考え方付く、具体的支援策についてグループディスカッションを実施する。その上で、4グループに分け自閉性障害の支援に用いられている技法である行動療法的アプローチ、行動分析的アプローチ、TEACCHプログラム、動作法についてグループ調査を実施する。

⑨⑧のグループ調査で得た知識を各グループから話題提供してもらい、行動療法的アプローチ、行動分析的アプローチ、TEACCHプログラム、動作法についてディベートを行い、それぞれの発達支援技法の特色について理解を深める。

⑩発達障害児・者への発達アセスメントのツールについて学習する。発達段階、知的レベルに応じた発達検査用具とそのアセスメントできる内容について学ぶ。解説する発達検査用具は、WIPSSI, WISC-III, WAIS-R, ITPA, K-ABC, 遠城寺式発達検査, KIDS, CARS, PEP-R, APEPなど。

⑪自閉性障害を持つ人の発達段階での学習理論の立場から、行動面、情緒面、認知面の特徴について学ぶ。幼児期、児童期（小学校低学年齢）における自閉性障害児のもつ行動面、情緒面、認知面の諸特徴について整理し、早期発見のための視点を養う。

⑫自閉性障害児のもつ社会性の問題が顕在化する時期である児童期（小学校高学年齢）、思春期における行動面、情緒面、認知面の諸特徴について整理し、家庭や教育場面における行動上から発達障害を見立てる視点を養う。また、学習理論の立場から、諸特徴にあわせた発達支援としての具体的対応策について学習する。

⑬自閉性障害児のもつ社会性の問題が顕在化、遷延化する時期である青年期、成人期における行動面、情緒面、認知面の諸特徴について整理し、生活場面における行動上から発達障害を見立てる視点を養う。また、学習理論の立場から、就労につながる家庭支援や就労支援の実際について諸特徴にあわせた発達支援としての具体的対応策について学習する。

⑭アメリカのキャロル・グレイが開発した自閉性障害の子どもたちに社会的なルールを教える際に有効な視覚支援の教育法である「ソーシャルストーリー」を学習し、自閉性障害者の認知的特徴（視覚有意、注意力の問題）と社会性の問題を統合した具体的支援方法から彼らの特徴を踏まえた生活支援のあり方について学ぶ。

⑮最終評価：学習理論に基づく発達障害についての理解と支援方法についてレポートを課す。さらに、定型発達者への発達障害児への支援の違いについて考えることについても考察を課す。その上でディスカッションを行い、それぞれの考えを共有化する。

3. テキスト

DSM-IV

4. 参考図書

『自閉症とアスペルガー症候群』ウタ・フリス編著、富田真紀訳、東京書籍

『LD・ADHD 特別支援マニュアル—通常クラスでの配慮と指導—』森孝一著、明治図書

『対人支援の行動分析学』服巻繁・島宗理著、西日本法規出版

『お母さんと先生が書くソーシャルストーリー』キャロル・グレイ著、服巻智子訳、クリエイクかもがわ

5. 成績評価方法

成績評価としては、出席 30%、発表回数 30%、討論への参加度 20%、最終試験 20% の比率で行う。発表回数、討論への参加度は、グループ発表とグループ対抗の討論形式での活発な議論に対して質・量ともにグループとして評点をあたえる。

6. オフィス・アワー

月曜日：17:00～18:00, e-mail : haramaki@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

本講義は、希望者には実際の発達障害者への心理教育アセスメントの機会を与える。評価には反映しないが、積極的な申し出を期待する。

1. 授業の概要

現在、わが国における心理臨床は、クリニックや相談機関等の非日常場面における伝統的な面接の場から、スクールカウンセリングや被害者支援等、対象者の生きている日常世界に入り込んでの臨床活動にシフトしてきている。これらの日常場面における心理臨床を効果的に展開するためには、対象者の生きる世界を文脈ごと理解することが必須である。本演習では、学校、病院、施設等日常的臨床現場の適切な見立てや効果的支援のために必要なフィールドワークの技法の基礎を体験的に学ぶ。

2. 授業の内容

- ① 伝統的な心理臨床とエスノグラフィック心理臨床との相違について、オリエンテーションを行う。特に、スクールカウンセリングや被害者支援等新しい心理臨床のニーズの理解とそれに対応する心理臨床の基本的な考え方を学ぶ。
- ② エスノグラフィック心理臨床論の技法的基盤となるフィールドワークについてのオリエンテーションを行う。さらに、実際のフィールドワークを始める前の予備学習として、日常場面のVTRによる観察実習を行い、フィールドワークの基本を学ぶ。実習後はレポート提出を課す。
- ③ ②のレポートを各自報告し、全体のディスカッションの中で、観察の着目点や観察されたことの意味の汲み取り、起きている事象を的確に捉える力を養い、学びを深化させる。宿題として、日常場面におけるある個人を観察したレポート提出を課す。
- ④ ③のレポートを各自報告し、全体のディスカッションの中で観察の着目点や観察されたことの意味の汲み取り、及び各自の観察の仕方の傾向等を把握し、フィールドワーカーとしての自分自身の物の見方、世界観等を認識する。宿題として、日常場面における相互作用を観察したレポート提出を課す。
- ⑤ ④のレポートを各自報告し、全体のディスカッションの中で、相互作用場面における行為やコミュニケーションについて、着目点や意味の汲み取りについて学ぶ。宿題として、1週間の自己観察記録をレポートとして課す。
- ⑥ ⑤のレポートを各自報告し、全体のディスカッションや他者からのフィードバックの中で自身の行動の意味の汲み取りを行い、フィールドワーカーとしての自身の行動傾向について認識を高める。また、フィールドへの入り方について文献を講読し、場面に応じたフィールドエントリーの仕方を学ぶ。
- ⑦ 公園、駅、図書館等一般の日常場面もしくは学校・幼稚園等の教育現場をフィールドとして選定した学生を対象に、エントリーの状況を各自報告し、全体のディスカッションを通して、エントリーの状況を吟味する。フィールドエントリーに関するレポートの提出を課す。
- ⑧ 児童・老人・障害者等福祉現場もしくは各種医療現場をフィールドとして選定した学生を対象に、エントリーの状況を各自報告し、全体のディスカッションを通して、エントリーの状況を吟味する。フィールドエントリーに関するレポートの提出を課す。
- ⑨ 各自のフィールドワークの中で、観察の焦点を選定する(focused observation)。全体のディスカッションや他者からのフィードバックの中で、選定した観察の焦点について、各自吟味を行う。focused observationについてのレポート提出を課す。

-
- ⑩ 各自の興味・関心から research question を決定する。全体のディスカッションや他者からのフィードバックの中で、決定した research question について、各自吟味を行う。research question についてのレポート提出を課すとともに解釈に関する文献を分担しレジュメの作成を課す。
- ⑪ 分担した文献レジュメにより発表を行い、フィールドデータの整理の仕方や分析の方法について学習するとともに、解釈の仕方について一連の技法を学ぶ。フィールドワークの経過に関するレポートを課す。
-
- ⑫ 公園、駅、図書館等一般の日常場面もしくは学校・幼稚園等の教育現場をフィールドとして選定した学生を対象に、観察経過を各自報告し、全体のディスカッションを通して、フィールドワークが適切に進行しているかを吟味する。
-
- ⑬ 児童・老人・障害者等福祉現場もしくは各種医療現場をフィールドとして選定した学生を対象に、観察状況を各自報告し、全体のディスカッションを通してフィールドワークが適切に進行しているかを吟味する。フィールドワークレポートの書き方について文献を分担し、レジュメの作成を課す。
-
- ⑭ 分担した文献レジュメにより発表を行い、フィールドワークレポートの書き方について学ぶ。さらに、フィールドデータの取り扱い及びそれに関する倫理的問題を講義により学び、現場に還元できるようなフィールドワークのあり方について理解を深める。
-
- ⑮ フィールドワークの理論的背景となる解釈的アプローチやそれに関わる構築主義について基礎的な講義を行い、エスノグラフィック心理臨床の理論的位置づけを学ぶ。また質疑応答を行い、疑問点や不明確な点について理解を確実にする。フィールドワーク最終レポートを試験として課す。

3. テキスト

R・エマーソン、R・フレッツ&L・ショウ『方法としてのフィールドノート』新曜社

4. 参考図書

箕浦康子著『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房

志水宏吉著『教育のエスノグラフィー』嵯峨野出版

上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房

ジェイムス・クリフォード&ジョージ・マーカス編『文化を書く』紀伊國屋書店

5. 成績評価方法

フィールドワークを実際に使う体験学習であるので、毎回の出席とほぼ毎回のレポート(中間レポート)提出が義務づけられる。成績評価は、出席点 40%, 中間レポート 30%, 期末レポート 30% の配分。授業は、フィールドワークレポートの発表とそれに基づくディスカッションが主となるので、フィールドワークを実際に使うことが最低基準。その上で、優れた発表及び優れたレポートには高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17:00～18:00 E-mail mochiai@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

体験的学習であるので、フィールドワークを行わない単なる授業出席は認めない。

1. 授業の概要

本演習では、1) 投映法の特徴について理論的および実践的に理解し、2) 実施および解釈の基本的技法を習得することを目標とする。1) については、客観性（信頼性・妥当性）と共感性（クライエントの内的世界の追体験）の両面を大切にする姿勢を学ぶ。2) については、特に TAT (Thematic Apperception Test) を中心に取り上げて、その施行法と所見の書き方をはじめとして、病理水準やパーソナリティによる特徴、形式分析、系列分析、力動的解釈などについて学習する。

2. 授業の内容

① ガイダンスを行う。次いで、レポート課題 1 についての説明をする（本講義では、TAT を体験的に理解するために、受講者同士で検査者と被検者の役割を担って、その体験をレポートし自己分析することにしているが、ここではそのための動機付けおよび具体的な段取り、注意点などについて述べる）。〔註：レポート課題については、以下、「レポート+番号」と表記する〕

② 討議形式により、客観性と共感性の観点から投映法の特徴を考える（皆藤章「第 1 章 投映法論」『臨床心理査定技法 2』誠信書房を題材として取り上げる）。また、投映法においてなぜ異なる解釈システムが併存するかについて問題提起する（ロールシャッハの各システムの特徴について調べて論考する；レポート 2）。

③ 討議形式により、曖昧性の観点から投映法の特徴を考える（田中富士夫『投映法における刺激の「曖昧性」概念の吟味』金沢大学法文学部論集哲学編第 22 卷を題材として取り上げる）。次いで、レポート 2 を土台とした発表を行って、理解を深める。

④ 投映法の中心的特徴について、投映法の代表的手法ともいえるロールシャッハの成立過程から考える。具体的には、ヘルマン・ロールシャッハ著『新・完訳 精神診断学』金子書房を題材として、討議形式により理解を深める。

⑤ TAT の特徴および施行法について学習する。講義形式および演習形式により、鈴木睦夫『TAT の世界』に準拠した TAT 解釈技法を学ぶ（特に、カードごとに反応類型を把握することの重要性について取り上げる）。また、鈴木以外のアプローチの仕方についても概観する。

⑥ TAT 解釈の方法と所見の書き方について学習する。講義形式および演習形式により、鈴木睦夫『TAT の世界』に準拠して、その理念や仕組みを学ぶ。また、病理水準およびパーソナリティを理解するために必要な基本的枠組みについて理解を深める。

⑦ TAT の具体的な事例を取り上げて、実際的な分析と解釈の方法について学習する。特にこの回では神経症圏の事例を検討する。発表形式および討論形式により、反応を分析し、解釈を行う。併せて神経症圏の反応特徴についても理解する。（※事前に分析・解釈を行うこと；レポート 3a）

⑧ 発表形式および討論形式により、適切な所見の書き方について学習する。前回（⑦）の講義内容を題材に各自が所見を作成し、さらにそれを推敲していく。また、所見作成時における神経症圏に特有な留意事項について、理解を深める。（※事前に所見を作成すること；レポート 3b）

⑨ TAT の具体的な事例を取り上げて、実際的な分析と解釈の方法について学習する。特にこの回では人格障害圏の事例を検討する。発表形式および討論形式により、反応を分析し、解釈を行う。併せて人格障害圏の反応特徴についても理解する。（※事前に分析・解釈を行うこと；レポート 4a）

-
- ⑩ 発表形式および討論形式により、引き続き適切な所見の書き方について学習する。前回（⑨）の講義内容を題材に各自が所見を作成し、さらにそれを推敲していく。また、所見作成時における人格障害圏に特有な留意事項について、理解を深める。（※事前に所見を作成すること；レポート 4b）
- ⑪ TAT の具体的な事例を取り上げて、実際的な分析と解釈の方法について学習する。特にこの回では、精神病圏の事例を検討する。発表形式および討論形式により、反応を分析し、解釈を行う。併せて、精神病圏の反応特徴についても理解する。（※事前に分析・解釈を行うこと；レポート 5a）
- ⑫ 発表形式および討論形式により、より適切な所見の書き方について学習する。前回（⑪）の講義内容を題材に各自が所見を作成し、さらにそれを推敲していく。また、所見作成時における精神病圏に特有な留意事項について、理解を深める。（※事前に所見を作成すること；レポート 5b）
- ⑬ TAT 解釈をさらに深めるために、形式分析・系列分析・力動的解釈などの観点について講義形式および演習形式により学習する。これまでに取り上げてきた事例（⑦～⑫）の一部を用いて再度分析をおこなって、TAT を多面的な観点から重層的に把握することの重要性を理解する。
- ⑭ 複数の投映法を同一被検者に施行した具体的な事例を取り上げて、TAT とロールシャッハ、バウムの関連性について学習する。発表形式および討論形式により、結果の矛盾点や共通点について整理し、それぞれの手法の持ち味や限界について理解する。
- ⑮ 受講者はレポート 1 を提出する。特に自己分析に関しては、本講義で学習した内容を反映させた総合的なものであることが望まれる。また、講義形式および演習形式により、投映法を活かした援助方針の立て方や倫理について学習し、心理臨床における投映法のあり方についての理解を深める。
-

3. テキスト

鈴木睦夫著『TAT の世界』誠信書房

4. 参考図書

鈴木睦夫著『TAT パーソナリティ』誠信書房

鈴木睦夫著『TAT 絵解き試しの人間関係論』誠信書房

I.B.ワイナー著『ロールシャッハ解釈の諸原則』みすず書房

氏原寛著『ロールシャッハ・テストと TAT の解釈読本』培風館

中山康裕ら編『バウムの心理臨床』創元社

5. 成績評価方法

出席が 20%、受講態度（予習傾向を含む）が 20%、レポート課題 1 が 20%、レポート課題 2～5 が 40%（1 つにつき 10%）として、総合的に評価する。なお、中間評価は、レポート課題 2～5 により行う。

6. オフィス・アワー

毎週月曜日の 13：00～15：00 まで e-mail にて予約のこと (sekiyama@edu.kagoshima-u.ac.jp)

7. 備考

- 「2.授業の内容」に記載された文献については、後期開始前に熟読しておくこと。
- 授業の進行状況によっては、順番を変更することもあるので留意のこと。
- 遅刻・欠席は厳禁。レポート提出期限は厳守のこと。

1. 授業の概要

クライエントを「遊戯（プレイ）」を通して理解し、援助していく遊戯療法について、遊戯治療過程でセラピストが必ず出会うと思われる重要な具体的課題に焦点をあてて講義を行う。セラピストは具体的課題を丁寧に自分の体験として受け止め、克服することによって遊戯療法家として成長していくものと考えるからである。できるだけ具体的な事例を取り上げながら、遊戯（プレイ）の理解や援助にどのように関わるとよいか学習を進める。

2. 授業の内容

①心理療法における遊戯療法の位置づけ

遊戯療法の歴史的発展を、日本における現況、世界における現況などを概観しながら講義する。個人心理療法における三大流派である精神分析療法、行動療法、人間性・実存療法において、遊戯療法はどういう可能性を開拓し、クライエントの理解と援助に貢献してきたかを学ぶ。

②「遊び」の治療的意味

遊びはどのような治療的意味を持ち得るのかを、人間関係の中でも、とくに仲間関係の発達との関連において学ぶ。仲間関係の発達と遊びの発展（ひとり遊び、傍観的遊び、平行遊び、連合遊び、協同遊び）との関連を理解することにより、遊び仲間の治療的意義について理解を深める。

③「遊ぶ」能力の見立て

クライエントの遊ぶ能力について、実際にセラピストがクライエントとプレイセラピー・ルームに入り、いっしょに遊びながら、クライエントを見立てる（心理診断する）には、どのような点に留意するとよいのかを、クライエントの「遊ぶ能力」に焦点をあてて学ぶ。

④プレイセラピー・ルームに入る前の準備

クライエントとともにプレイセラピー・ルームに入る前に、準備しておくべきことは何かについて講義を行う。面接の契約、親や同伴者がいる場合の面接室の準備、遊具の準備、などについて、その一般的原則は何かを学ぶ。

⑤遊戯療法場面の構造化の原則

遊戯療法を進めていくうえで、とくに子どもの遊戯療法の場合には親やきょうだいが同伴してくることが多く、実際の主訴をもつクライエントが置き去りにされかねない。クライエントを中心に遊戯療法場面を構造化するには、どんな点に留意しなければならないのかを学ぶ。

⑥遊戯療法における家族関係の見立て

遊戯療法を進めていくうえで、とくに子どもの遊戯療法の場合には、家族関係のなかでのクライエント本人の位置づけを明確に把握しておく必要がある。そのためのグループとしての家族についての視点およびグループ・アプローチについて学ぶ。

⑦遊戯療法家としての資質とは何かについての小グループ討論

自分が興味をもつ遊戯療法の理論あるいは遊戯療法家について、その創生と発展についてレポートを課す。それぞれが作成してきたレポートをもとに小グループによる討論を行い、遊戯療法家に求められる資質とはどのようなものかを考究する。

⑧クライエントの初期不安の取り扱い方

セラピストはプレイセラピー・ルームでのクライエントの緊張や不安をどのように受け止め、どのように遊戯療法を展開させていくことができるのか。クライエントの不安の取り扱い方について、特に

母子分離不安を中心に講義を行う。

⑨遊戯療法における受容と共感

セラピストがクライエントとの間に、遊戯療法を進めていくための、いわゆるラポートを形成するためには、どのような点に留意する必要があるのか。アクスラインの8原則を参考にしながら、遊戯療法における受容と共感はどのような特徴をもつのかを学ぶ。

⑩遊戯療法における子どもの自発性・選択性

遊戯療法といつても、必ずしも子どもは活発に遊ぶわけではなく、ときには子どもは全く遊ぼうとしないこともある。そのような子どもとどのようにプレイセラピー・ルームのなかでいっしょに居ることができるのか。子どもの自発性・選択性に焦点を当てて講義を行う。

⑪遊戯療法における行動化

クライエントは必ずしもプレイセラピー・ルームで遊ぶことに満足するものではなく、ときには自分を試すかのように、プレイセラピー・ルームの外へ出たがることがある。クライエントのこのような行動化をセラピストはどのように取り扱うことができるのか。

⑫クライエントの攻撃性の取り扱い方

子どもは未熟なかたちでの自己主張として、遊戯療法のなかで攻撃性を顕在化させることがみられる。これを一概に禁止するのではなく、子どもの自己表現として発展させていくためのセラピストの働きかけ方について学ぶ。

⑬セラピストの柔軟性

遊戯療法家に求められる能力とはどのようなものであろうか。遊戯療法場面では、クライエントはセラピストを、いっしょに遊ぶことができる相手であるかどうかを試すことが多い。遊戯療法家に求められる資質として「柔軟性」を中心に講じる。

⑭親面接の方法

子どもの遊戯療法を進めていく場合には、併行して親面接を行うのか、それとも異なったかたちで設定するのか、子どもの心理的成长を考える上で大切な問題である。親面接の進めかたについて、とくに思春期のクライエントの場合に焦点を当てて学ぶ。

⑮遊戯療法の可能性と今後の課題についてのレポートと討論

受講生全員でレポートに基づいて小グループによる討論および全体討論を行い、遊戯療法の可能性と今後の課題を共有する。

3. テキスト 日本遊戯療法研究会『遊戯療法の研究』

4. 参考図書

河合隼雄・山王教育研究所著『遊戯療法の実際』誠信書房,

弘中正美『遊戯療法と子どもの世界』金剛出版,

深谷和子『遊戯療法—子どもの成長と発達の支援』金子書房

5. 成績評価方法

出席 30%, 討論への参加度 30%, 課題レポート 40% とし、総合的に評価する。とくに授業のなかでの積極的な討論に対しては高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

毎週木曜日 17:00~18:00 E-mail address: jhp@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

遊戯療法に関する参考文献を毎回配布するので、読んで問題点を明確にしたうえで出席すること。

1. 授業の概要

臨床心理学におけるグループ・アプローチは、病院や施設での患者（クライエント）や施設利用者の適応的な方向への行動変容や人格の成長・発達を援助することが目的であり、そのための集団による言語的・非言語的な心理療法的介入の方法である。本講では、まずグループ・アプローチの基本的な理論を学習するとともに臨床適用のための基本的な方法について学ぶ。さらに、代表的なグループ・アプローチの一つであるサイコドラマの理論と方法を学び、臨床実践への応用法を学ぶ。

2. 授業の内容

① (1)「グループ・アプローチとは」のテーマで、その定義となる幾つかのグループサイコセラピー（グループアプローチ）の理論と方法を紹介する。(2) 最近のグループ・アプローチの適用の意義と対象について論じ、適用の広がりと臨床心理学の実践領域における適用の現況について概観的に講じる。

② (1) ①の講義に基づき、グループ・アプローチを臨床的・実践的に行っている4領域について実践例を挙げながら、その目的・方法・問題点を講じる。(2) 医療領域では、精神科病院における統合失調症者、人格障害者等への臨床実践及びアルコール等の薬物嗜癖者への臨床実践を比較検討し、その方法や問題点の異同について論じる。

③ 本講は、②の講義に続き、福祉領域における適用では、まず障害児・者施設での実践例を取り上げる。主に、発達障害児・者への対人関係の改善や社会適応に向けた援助を目的とした実践を紹介し、特に、軽度・中度の発達障害・児者と中度・重度の障害児・者への適用においては、その目的と方法に異同があるのでそのことについても論じる。

④ 本講は、③の講義に続き、高齢者施設での実践を取り上げる。対人接觸や対人認知が低下し、適切な情動活動も乏しくなっている障害高齢者や認知症高齢者に対するグループ・アプローチの意義と方法を論じ、グループでのドラマ的方法と回想的方法の実践例を紹介し、その方法の違いによるねらいや効果について論じる。

⑤ 本講では④に続いて、(1) 矯正施設では、主に少年院における実践例を紹介する。ここでは入所者同士の対人関係作り・相互理解と自己理解、さらには退所後の生活適応等の矯正教育がねらいとなるためのグループ・アプローチの在り方と方法について論じる。(2) 学校教育の領域での実践を取り上げ、その目的と方法の多様性について論じる。

⑥ (1)「グループサイコセラピーにおけるグループとは」のテーマの基にグループの在り方について講じる、すなわちグループの構成、グループの大きさ、グループメンバーの特性などグループを構成していく上での留意点について講じる。(2)「集団凝集性とグループ体験」について、凝集性の高いグループと低いグループにおける体験についての比較検討を論じる。

⑦ グループ・アプローチにおけるグループ創りは、アプローチの基本となる。その主な要因は、(1) グループ構成の必要性やニーズの明確化、(2) 参加メンバーの選択：包括基準と除外基準の設定、(3) グループ構成の仕方：凝集性の形成、(4) メンバーの範囲：年齢・性別であり、これらの要因に必要性と問題点について論じる。

⑧ グループ・アプローチ展開における「グループの風土」について講じる。すなわち、(1) セラピストとメンバーの両者による「グループ規範」の形成、(2) セラピストによる「グループ手順の一般的基準」の提示、(3) セラピストによる「自己モニタリンググループ」の促進、(4) グループでの「自己開

示」の安全性への配慮、などについて事例を用いて講じる。

⑨ グループ・アプローチの過程で生じるメンバーに関する主な問題へのセラピストの対応について講じる。すなわち、(1)メンバーの脱落、(2)メンバーのグループからの除外、(3)新メンバーの加入、(4)サブグループ形成の問題、などはグループ活動の参加メンバーに大きく影響することであり、これらへの対応の重要性と配慮の要点を論じる。

⑩ グループ・アプローチにおける技法を「今、ここで」の原則に関して次の視点から講じる。(1)グループセッションのその場での「現在に焦点を合わせる」、(2)「今、ここで」の体験の情動的情動的要素と認知的情動的要素からなる「情動喚起と情動吟味」、(3)「今、ここで」の促進：メンバーへの教育、メンバーへの強調、などセラピストが行う配慮と技法を論じる。

⑪ 前講に続いて、グループ・アプローチにおける技法を「転移」と「透明性」に関して次の視点から講じる。(1)メンバーによるセラピストへの転移とその対応、(2)メンバー間での転移とその対応、(3)転移に対するセラピストの透明性、(4)セラピストとメンバーの相互作用と透明性、について論じる。

⑫ グループ・アプローチとしての「サイコドラマ」の歴史的流れを、モレノの「自発性劇場」の開始から「ビーコンハウス」までの時期とその後の展開について講じ、また精神分析から「自発性理論」と「役割理論」までの背景理論について講じる。特に、社会性の発達と役割理論、社会的適応と創造的自発性についての臨床心理学における意義を論じる。

⑬ 前講に続いて、まず「サイコドラマ」の目的についての諸理論を紹介し、それに基づき「サイコドラマ」における「テレ」と「サープラスリアリティ」論について講じる。また、「ロールティキング」「ロールプレイング」「ロールクリエイティング」の3段階を概説し、「演じること」の意義と「サイコドラマ」における「ことば（言語）」と「行為」の意義について論じる。

⑭ 前講に基づき、「サイコドラマ」の場面構造について「体験的現実性」の視点から論じる。また、実施に際してのドラマの5要素：「ディレクター」「補助自我」「主役（演者）」「観客」「舞台」について概説するとともに「サイコドラマ」の3相：「ウォーミングアップ」「劇化」「シェアリング」の展開について講じる。

⑮ 「サイコドラマ」の臨床・実践応用について、次の領域での目的・適用の仕方等について概説する。
(1) 教育領域では生徒指導・学級指導・道徳教育などの教育方法、(2)精神科病院のデイケアでの社会復帰や情動の活性化及び自己理解のための臨床、(3)福祉施設などに入所している軽度精神遅滞者や自閉症者の対人関係の形成の療育、などの実践の方法と問題点を論じる。

3. テキスト 特定のテキストは用いない。

4. 参考図書

「集団精神療法」日本集団精神療法学会誌、「心理劇」日本心理劇学会誌、

増野肇著「サイコドラマのすすめ方」金剛出版、講座心理療法「集団心理療法」福村出版

日本集団精神療法学会監修「集団精神療法の基礎用語」金剛出版

5. 成績評価方法 授業への出席 40%，試験の成績 40%，小レポートの成績 20%

6. オフィス・アワー 授業の終了後、及びメールでの交信(e-mail: harizedu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp)

7. 備考 特になし

1. 授業の概要

文化・宗教・社会システムという広い視野からひとの生活と健康行動及びその心理を論じ、ストレスに対するケアと予防に関する理論を紹介する。さらに、ストレスマネジメントを“生活に対する営み”と捉え、漸進性弛緩法や自律訓練法などのセルフ・リラクセーションとペア・リラクセーションの観点から心理社会的ストレス過程における情動焦点型コーピングと問題焦点型コーピングの効果について論じる。

2. 授業の内容

①ひとは生理的、心理的、社会的な多様な存在次元を生きていることについて論じる。その上で、文化や宗教などがストレスや健康行動に影響していることを、東洋医学と西洋医学における疾患の対処例を参考にして考察する。

②現代社会を高度情報化、国際化、過当競争という視点で捉え、それらが「時間的切迫感」「強迫傾向」「脱身体化」「安心感の希薄化」などの心理的特徴に影響することを説明する。さらに、そのような心理的特徴がストレスをもたらしていることについて論じる。

③ストレスの心理生理メカニズムを理解するために、著名な生理学者 Cannon W. の研究成果である「闘争・逃走反応 (flight-or-flight response)」と、Selye H. の汎適応症候群 (general adaptation syndrome) を取り上げ、警告反応期、抵抗期、疲憊期の自律神経系と免疫系の特徴を解説する。

④ストレスに関する心理社会的観点に立った代表的な研究として Holmes T.A. & Rahe R.H. (1969) のライフイベントストレス研究を紹介し、彼らが創案した社会的再適応尺度 (social readjustment rating scale) を例にとり、行動療法的アプローチの妥当性と問題点について検討する。

⑤ライフイベントストレス研究の問題点を解消するモデルとして登場した Lazarus R.S. & Folkman S. (1984) の transactional model を紹介し、「ストレッサー」→「認知的評価」→「コーピング」→「ストレス反応」という心理過程としてストレスを捉えることの必要性について講義する。

⑥transactional model の観点から受講者が自らの日常生活を振り返り、認知的評価が及ぼすストレス反応への影響についてグループ討議をし、認知的評価に対する理解を深める。さらに、来談者中心療法に基づく共感的態度や傾聴がストレス反応軽減に及ぼすメカニズムについて解説する。

⑦心理的特徴とストレスの関係を理解するために、行動療法的観点からタイプA型行動パターンと冠状動脈性心疾患の関係と、精神分析療法の観点からアレキシシミアと心身症の関係を取り上げて、心理的構えと体験様式がストレスに関係していることを論じる。

⑧行動療法および認知行動療法の視点から、「ストレッサー」→「認知的評価」→「コーピング」→「ストレス反応」という一連の心理過程における事前、事後介入として行われる介入技法について紹介し、それぞれのねらいと有効性について論じる。

⑨心理的構えや緊張感が認知的評価の基盤として存在していることを説明し、緊張感のコントロールが情動焦点型だけでなく、問題焦点型コーピングとしても機能することを論じ、“認知動作療法”という新たな視点からⅡ型糖尿病患者や筋緊張性頭痛のストレスケアについて論じる。

⑩ストレスマネジメントを“生活の営み”と捉え、生活体験に焦点を当てたストレスケアと予防の在り方について述べ、臨床心理地域援助の視点からヘルスプロモーションの一環としてストレスマネジメント教育を展開する可能性を論じる。

⑪ストレスマネジメント教育の内容を「ストレスの概念を知る段階」「自分のストレスに気づく段階」「ストレス対処法を修得する段階」「ストレス対処法を活用する段階」の4段階に分けて、その概要と実施の留意点について説明する。

⑫子どもから健康な高齢者に至るまでストレス予防を目的として幅広く活用されている、漸進性弛緩法についてビデオ教材を用いて紹介し、受講者自らが体験する。その体験に基づき、個別、集団を対象に導入する際のアセスメントや適用上の工夫・留意点を教授する。

⑬日本の子どものストレスについて概観し、山中（1999）が対人関係に関するストレス軽減のために創案したペア・リラクセーションについて紹介し、受講者自らが体験する。その体験に基づき学級集団に適用する際のアセスメントや適用上の工夫・留意点を教授する。

⑭ストレスマネジメント技法として導入されることが多い自律訓練法やイメージ技法について紹介し、受講者自らが体験する。その体験に基づき、子ども、成人、競技選手などに自律訓練法やイメージ技法を適用する際のアセスメントや適用上の工夫・留意点を教授する。

⑮事故や事件に遭遇した時に生じる急性ストレス反応について論じ、それを軽減するとともにPTSDを予防するために必要なアセスメントと、ストレスマネジメント技法適用上の工夫・留意点について教授する。

3. テキスト

- ・山中寛・富永良喜編 『動作とイメージのストレスマネジメント教育・基礎編』 北大路書房 2000年

4. 参考図書

- ・山中寛監修 『学校におけるストレスマネジメント教育』 ビデオ 南日本新聞 1999年
- ・山中寛・富永良喜監修 『こころを育むストレスマネジメント技法』 ビデオ 南日本新聞 1999年

5. 成績評価方法

出席 30%，討論への参加度 30%，課題レポート 40%とし、総合的に評価する。とくに、授業中の積極的な討論に対しては高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

毎週月曜日 17:00～18:00 E-mail address : yamanaka@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

配付された資料や事例研究論文を必ず読み、質問事項を整理したうえで出席すること。

1. 授業の概要

臨床動作法の理論を学ぶだけでなく、体験治療理論の観点からさまざまな心理的不自由を呈するひとに対する理解を深め、参加者同士がペアになって援助者と被援助者を体験し、それぞれの動作体験やそれに伴う体験に基づき体験様式と体験内容について学び、いかに体験促進的援助を行うかについて議論を深める。さらに、肢体不自由児、自閉症児、知的障害児に動作法を適用する場面に陪席し、神経症、心身症等については事例研究論文の講読によって、臨床動作法の適用について理解を深める。

2. 授業の内容

①臨床動作法の成り立ちと適用領域を概説し、「動作」と「身体運動」の違いを解説する。さらに、授業中に体験する運動催眠に伴う「動作体験」に関してグループ討論を行い、情報処理理論と動作体験過程の違いについて理解を深める。

②参加者がペアになり、リラクセーション課題に取り組む。そこでの援助体験と被援助体験についてグループ討論を行い、動作法においては身体が動くことが問題なのではなく、身体を動かそうとする動作努力や心理過程を援助することが重要であることを理解する。

③本研究科「心理臨床相談室」で肢体不自由児に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、トレーニーに対する動作観察に基づくアセスメントについて議論し、動作不自由の本質を理解する。

④「心理臨床相談室」で肢体不自由に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、心身一元現象としての動作に関するアセスメントと、それに応じた援助方針の立て方を理解する。

⑤「心理臨床相談室」で肢体不自由に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、援助方針に基づいて設定された動作課題と、その動作課題の適用の仕方について学習する。

⑥「心理臨床相談室」で肢体不自由に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、動作課題に応じた適切な援助の工夫について学習する。

⑦「心理臨床相談室」で肢体不自由に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、いかにトレーニーの動作努力を引き出し、動作努力の仕方を獲得できるように援助するかについて学習する。

⑧受講者のグループ討議によって、以上の1セッションから5セッションまでの陪席とグループスーパービジョンによって生じた疑問点を整理し、肢体不自由児に対する動作法適用の意義、効果、援助の留意点などについて討論する。討議に基づく考察をレポートにまとめ提出する。

⑨「心理臨床相談室」で自閉症児に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、動作観察に基づくアセスメントについて議論し、自閉症のコミュニケーション障害の本質を理解する。

⑩「心理臨床相談室」で自閉症児に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、アセスメントに応じた援助方針の立て方について理解を深める。

⑪「心理臨床相談室」で自閉症児に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、援助方針に基づいて設定された動作課題と、その動作課題の適用の仕方について学習する。

⑫「心理臨床相談室」で自閉症児に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、トレーニーが他者の意図を了解するために必要な動作援助の工夫について学習する。

⑬「心理臨床相談室」で自閉症児に対して行われている、動作法に基づく集団療育訓練に45分間陪席した後、それに引き続いて行われるグループスーパービジョンに参加し、いかにトレーニーの動作努力を引き出し、他者の意図を了解できるように援助するかについて学習する。

⑭受講者のグループ討議によって、以上の1セッションから5セッションの陪席とグループスーパービジョンによって生じた疑問点を整理し、自閉症児に対する動作法適用の意義、効果、援助の留意点などについて討論する。討論に基づく考察をレポートにまとめ提出する。

⑮事前に配布された神経症、心身症への動作法の事例研究論文を読み、主訴、動作特徴に基づくアセスメント、援助方針、動作課題設定、動作課題解決過程における体験促進的援助の在り方とクライエントの変容について討論し、臨床動作法に関する理解を深める。

3. テキスト

特に指定しない。

4. 参考図書

成瀬悟策『動作療法』誠信書房 2000年

九州大学発達臨床心理センター編『基礎から学ぶ動作訓練』ナカニシヤ出版 1999年

5. 成績評価方法

出席30%、討論への参加度30%、課題レポート40%とし、総合的に評価する。とくに、授業中の積極的な討論に対しては高い評価を与える。

6. オフィス・アワー

毎週月曜日 17:00~18:00 E-mail address : yamanaka@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

受講生は、療育場面の陪席が義務づけられている。これらの活動に関しては、心理臨床相談室の一相談員としての社会的責任を認識し、倫理を遵守することが求められる。

1. 授業の概要

トラウマや PTSD (外傷後ストレス障害) に関する臨床心理学的知見を深め、危機的な事件や事故、災害に巻き込まれた後の被害者・被災者に対する支援 (ポスト・トラウマティック・カウンセリング／ポスト・トラウマティック・プレイ・セラピー) のあり方を学ぶ。特に、人的災害、自然災害による PTSD について理解し、特に、学校における緊急支援のありようについて理解し、臨機応変に即時対応できるような援助のあり方について学習する。

2. 授業の内容

- ① トラウマ（心の傷）とは何か、そのメカニズムについて臨床心理学的視点から理解する。また、トラウマの歴史的変遷や PTSD 概念の変遷とその意義について、欧米やわが国の精神的文化等を理解しながら学ぶ。（レポート課題提出）
- ② 現代のトラウマについて、特に人的災害に視点をあて、理解する。いじめ、児童虐待、性被害（セクシャル・ハラスメントやストーキングなど）、DV（ドメスティック・バイオレンス）、人質（ストックホルム症候群）などによる症状の特徴と予後などについて学ぶ。
- ③ 自然災害によるトラウマの特徴を理解する。特に、地震（鹿児島県北西部地震など）や土石流災害による子どもへの心理的影響や成人の反応、そして被災後の PTSD の継時的变化等について学び、危機介入のありようについて考察する。
- ④ 事件、事故、災害後の二次的（間接的）被災について学ぶ。特に、救援者（消防職員、会場保安官、警察官、救急救命士など）の惨事ストレス（CIS）について理解し、被害者・被災者のみならず、救援する側のメンタルヘルスのありようについて学習する。
- ⑤ トラウマに関する障害や PTSD の症状と類似した障害の特徴について学ぶ。特に、解離性障害、身体化障害、パニック障害、人格障害、多重人格障害等に視点をあて、トラウマとの関連や PTSD 症状との相違点、類似点等について学習する。
- ⑥ トラウマによる心理的影響について学ぶ。特に、症状の重症度と予後、ストレス要因、出現率と発症の時期、症状に影響を及ぼす心理的因子、被災・被害前の諸要因、被災者や被害者の心理的状況、配慮すべきこと、社会的・法的問題についてとりあげる。（レポート課題提出）
- ⑦ PTSD とは何か、その診断基準の変遷と診断方法、発症の契機、3つの症状（再体験、回避と感情の麻痺、覚醒亢進）の特徴、症候学的な特徴（二相性の反応、解離現象および転換症状）、さらに子どもの PTSD 症状について学ぶ。
- ⑧ PTSD のカウンセリングについて学ぶ。大人のポスト・トラウマティック・カウンセリング、子どものポスト・トラウマティック・プレイセラピー、PTSD 症状のある子どもの親へのかかわり、PTSD の予防について理解する。
- ⑨ 癒される人・癒す人について学ぶ。特に、癒される人自身へ伝えるメッセージ、癒す人自身のセルフ・コントロールのありよう、癒される人や癒す人をとりまく周囲のありようについて学習する。
- ⑩ PTSD をとりまく臨床援助的接近のありようについて学ぶ。「臨床援助」の概念について理解し、その上で、コミュニティ・アプローチのありようについて理解する。単なる援助技法にとどまることなく、人間哲学を基盤にした援助について学習する。

⑪ 学校における緊急支援のありようについて学ぶ。学校内で起こりえる事件、事故、災害等の事例をとりあげ、ストレスに対する大人と子どもの反応を理解する。さらに、心理的ダメージを受けやすい要因についても理解しておく。(レポート課題提出)

⑫ 事件、事故、災害が発生し、学校がすべきことについて、災害直後にすること（情報提供のありようなど）、短期的展望に立った活動（教職員の管理、外部の専門家との連携、学級・学年でできることなど）について学ぶ。

⑬ ⑫に続き、中期的展望に立った活動（再開の準備、専門家の支援、経過観察のありようなど）、長期的展望に立った計画（3ヶ月後、6ヶ月後、1年後を見通した計画や法的手続きの問題など）について学習する。

⑭ 不測事態（非常事態）対応計画の展開のありようについて学ぶ。特に、不測事態の予想、適切な支援期間と支援者の選択のありようなどについて留意点を理解し、不測事態に備えて即時対応が可能なシステムのありようについて学習する。

⑮ PTSD の臨床心理査定、臨床心理面接、臨床心理的地域援助のありようについて総括し、トラウマ、PTSD への危機介入と支援のありようについて感得する。

3. テキスト

久留一郎著『PTSD：ポスト・トラウマティック・カウンセリング』 駿河台出版 2003年

4. 参考図書

W.ユールら（久留一郎訳）『スクール・トラウマとその支援：学校における危機管理ガイドブック』

誠信書房、

久留一郎著『発達心理臨床学：病み、悩み、障害をもつ人間への臨床援助的接近』 北大路書房、
その他、適宜、講義の中で紹介します。

5. 成績評価方法

出席・発表（レジュメ作成）50%，レポート50%で評価します。

6. オフィス・アワー

e-mail address : hisadome@grad.k-junshin.ac.jp

7. 備考

授業進行状況によっては、授業内容の順番を変更することがあります。

1. 授業の概要

心理学におけるパーソナリティ理論の発展、臨床心理学における理論についての基礎知識を習得する。各論として、個別支援の歴史的理論である精神分析理論、集団支援のエンカウンター・グループと心理劇、地域支援のベースとなるコミュニティ心理学（基礎と臨床）についての基礎知識を習得し、臨床心理学の専門教育課程を補う。

2. 授業の内容

①講義内容と進め方と評価に対するオリエンテーションを行う。また、臨床心理士に求められる専門技能ならびに専門職大学院における人材養成像について概説し、受講生自らのキャリアプランの参考とする。

②アメリカの社会心理学者オールポートによるパーソナリティの定義を学び、身近なひとの独自の対応の仕方からパーソナリティを推測する体験を通じてパーソナリティの類型論を学習する。

③クレッチマーの類型論を概説し、類型論によるパーソナリティ研究から生物・物理的な見解からくる特性論のパーソナリティ研究への展開について学習する。

④オールポートらの生物・物理的な見解に基づく特性論とメイラの生物・社会的な見解に基づく反特性論との対立から、ホールの「パーソナリティの理論」(1957) を概説し、パーソナリティ理論の歴史的背景とパーソナリティ理論の多様性と今後の発展可能性について学習する。

⑤パーソナリティ理論のひとつである精神分析理論の成り立ちについて、シグモント・フロイト(1856~1939)の生育歴からひもといいていく。フロイトの生育歴から精神分析理論が見出されていくまでを学習し、フロイトの人物像を描きながら精神分析理論の基礎を学ぶ。

⑥プロイヤーとの共同研究である症例アンナ・Oの具体的治療例から導き出された自由連想法という技法と精神分析の初期理論について学習する。

⑦精神分析理論発展の初期段階である神経症理論から新たな精神分析理論への飛躍的発展と理論の再概念化のプロセスとフロイトの苦悩と患者から学ぶ姿勢について学習する。

⑧精神分析理論における「無意識」を重視し、「言葉にする」、「育ちの観点」、「欲動論と構造論」、「不安と防衛」という特徴を概説し、精神分析理論の基礎知識を習得する。

⑨授業時間において、これまでの講義で学んだパーソナリティ研究、精神分析理論についてレポートを作成する。少人数グループにてレポート内容についてディスカッションし、知識の共有化をはかる。グループが複数できた場合は、グループ代表者が全体に対して報告して全体での知識の共有化をはかる。

⑩個別支援としての心理療法についての諸理論、集団支援としての集団心理療法の諸理論について概説し、個別支援ならびに集団支援の特性と関連性について学習する。

⑪集団支援の技法のひとつである心理劇が発展してきた歴史的背景と心理劇の構成、集団療法としてのあり方とねらいについて概説し、心理劇を実施する際の基礎的知識を習得する。

⑫集団支援の技法のひとつであるエンカウンター・グループが発展してきた歴史的背景とグループのあり方とねらいについて概説し、エンカウンター・グループを実施する際の基礎的知識を習得する。

⑬地域支援の基礎となる学問領域であるコミュニティ心理学が発展してきた歴史的背景について学ぶ。また、伝統的な臨床心理学の限界を述べ、新たな臨床心理学の展開としてのコミュニティ心理

学の特色について学習し、地域支援のあり方の基礎を学ぶ。

⑭コミュニケーション心理学の特色を活かした医療領域や心理臨床相談室における臨床事例について紹介し、地域支援の基礎と臨床応用の具体的あり方について学習する。

⑮最終評価：授業時間 30 分間において 10 回目以降の講義で得た知識に関するレポートを課す。後半 60 分では、各種心理療法を用いた個別支援、集団支援、地域支援についての知識および個別支援・集団支援・地域支援のつながりについて少人数グループにてディスカッションを行い、グループ対抗のディベートを行い、それぞれの考えを共有化する。

3. テキスト（記載したテキスト以外は、必要時に資料を配ります）

『臨床心理学への招待』野島一彦編著、ミネルヴァ書房。

『臨床投映法入門』池田豊應編、ナカニシヤ。

『精神分析理論と臨床』北山修著、誠信書房。

『エンカウンター・グループ』安部恒久著、九州大学出版会。

『臨床・コミュニケーション心理学』山本和郎他編著、ミネルヴァ書房。

4. 参考図書

『臨床面接のすすめ方』M・ハーセン、V・B・ヴァンハッセル編、深澤道子訳、日本評論社。

『心理臨床家の手引き』鎌幹八郎・名島潤慈編著、誠信書房。

『自己コントロール法』成瀬悟策著、誠信書房。

『サイコドラマのすすめ方』増野肇著、金剛出版。

『現代心理学の大系』D・N・ロビンソン著、大久保幸郎訳、誠信書房。

『心理療法の統合を求めて』ポール・ワクテル著、杉原保史訳、金剛出版。

『死を見るこころ 生を聴くこころ』三木浩司編著、木星舎。

5. 成績評価方法

成績評価としては、出席 30%、発表回数 30%、討論への参加度 20%、9 回目と 15 回目の授業でのレポート 20%、最終評価（ディスカッション等での理解度評価）30% の比率で行う。

6. オフィス・アワー

月曜日：17:00～18:00 e-mail : haramaki@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

本講義は、心理学初学者に向けたものである。

1. 授業の概要

我々を取り巻く環境は常に変化している。この流動化した環境でうまく生きていくためには、我々は常に新しいことを学んで行動していかねばならない。本年度の講義では、この学習のメカニズムについて行動学的、生理学的に概説した上で、系統発生的および個体発生的見地から、学習の適応機構としての位置付けを考察する。授業では、単に講義を聴くのみではなく、毎回、レポーターが与えられたテーマについて調べてきたことを発表し、それをもとに全体で討論を行う。

2. 授業の内容

- ① 授業ガイダンス：この授業の目的、概要、実施方法等について説明し、授業目標に向けて学生の方向付けを行う。また、各回の授業で取り上げるテーマについて課題を出し、分担を決定する。さらに、資料の紹介や、発表における注意点の説明など、テーマ解決と自己学習において必要となる情報を提供する。
- ② 学習の定義と分類：心理学において、学習は一般に「経験による比較的永続的な行動の変容」と定義される。この定義に基づき「学習」と「学習ではない」のとを区別し、さらに、慣れと鋭敏化、古典的条件づけ、道具的条件づけ、認知的学習（洞察学習）等の様々な型の学習について理解を深める。
- ③ 古典的条件づけⅠ：パブロフの研究に代表される古典的条件づけの手続きと、基礎的理論について学習する。また、条件刺激（CS）、無条件刺激（US）、条件反応（CR）、無条件反応（UR）、対提示、強化、消去等の基本的用語についての正確な理解を促す。
- ④ 古典的条件づけⅡ：般化と分化、消去と自発的回復、高次条件づけ、実験神経症など、古典的条件づけに関わる諸現象とその意義について理解する。また、脱感作法等に代表されるこれら現象と技法の臨床的応用例について学ぶ。
- ⑤ 道具的条件づけⅠ：ソーンダイクからスキナーに至る道具的条件づけ研究の歴史的背景と、その基本的手手続きについて学ぶ。また、オペラント行動、レスポンデント行動、随伴性、強化子等の基本的用語についての正確な理解を促す。
- ⑥ 道具的条件づけⅡ：変率強化（VI）や不定時強化（VT）といった強化スケジュールや弁別刺激の提示に関する刺激制御によって、行動がどのように調整されるのかについて学ぶ。また、プログラム学習等の応用例についても学ぶ。
- ⑦ 認知的学習：ケーザーの洞察学習、レビンの場理論、ピアジェのシェマの均衡説について学び、さらに近年の情報処理論的観点からの学習観について理解を深める。さらに、連合論的学習観との対比から、両者の特徴と相補性についての考察を行う。
- ⑧ 社会的学習：社会的学習には「社会的場面における学習」と「社会行動の学習」の2つの意味がある。ここでは「社会的場面における学習」の基礎理論として、ミラーとダラードの模倣学習とバンデューラの観察学習について学ぶ。また、攻撃や援助などの「社会行動の学習」のメカニズムについても考察を行う。
- ⑨ 学習の諸理論Ⅰ：ここでは、歴史的視点に基づいて、ソーンダイク、ハル、ガスリー、トールマンなどが唱えた学習理論について学ぶ。これらの理論は古典的ではあるが、その根幹は学習の基礎的メカニズムを考える上で決して軽視することができないものである。

-
- ⑩ 学習の諸理論Ⅱ：ここでは、マウラーの回避学習の2過程説、レスコーラ&ワーグナーの古典的条件づけ学習モデル、プレマックの原理、選択行動の理論等、近現代の学習理論について学び、学習現象についての理解を深める。
- ⑪ 学習・記憶の生理的メカニズムⅠ：ここでは、ニューロンの構造と働き、ニューロンの興奮と情報伝導の仕組み、シナプスと神経伝達物質など、学習の生理的メカニズムの理解に必要となる、神経機構の基礎的メカニズムについて学習する。
- ⑫ 学習・記憶の生理的メカニズムⅡ：学習に伴うシナプスの可塑的変化、記憶・学習における海馬機能の重要性、最近の非侵襲的測定法による脳機能解析などの話題を取り上げ、学習・記憶の生理学的メカニズムについての理解と考察を深める。
- ⑬ 学習の生物学的制約：動物が学習する内容は、それぞれの種がおされた環境で直面する適応的課題と明確な対応関係を持っている。ガルシアの味覚嫌悪学習、ブラウン&ジェンキンスのオートシェイピング、ボウルズのSSDRの理論等を学び、学習の生物学的制約についての理解を深める。
- ⑭ 学習の適応的機能：「いつ」「何を」「なぜ」学習するかは、それぞれの種の適応と進化に重要な関わりを持っている。ここでは「刻印付け」や「学習の系統発生」などの研究を基に、学習の適応的意義についての考察を行う。
- ⑮ 全体のまとめ：これまで授業の中で取り上げた内容についてもう一度概観・整理し、学習・行動の基礎的メカニズムについての理解を深化させる。特に、学習機構の進化と物理的・社会的環境に対する適応との関係を考える。
-

3. テキスト

マイザー, J. E. 磯他訳 1996 メイザーの学習と行動 二瓶社

藤田 統 編著 1991 動物の行動と心理学 教育出版

4. 参考図書

ボウルズ, R.C. 今田寛訳 1982 学習の心理学 培風館

ピアース, J.M. 石田他訳 1990 動物の認知学習心理学 北大路書房

5. 成績評価方法

平常点 20 点、期末テスト 80 点。平常点はレポーターとしての発表および授業における態度によって総合的に評価する。

6. オフィス・アワー

毎週月曜日 10:30~12:00 (事前に E-mail で連絡することが望ましい。)

E-mail: tomihara@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

授業では毎回討論を行うので、履修学生は討論への積極的な参加が求められる。

1. 授業の概要

生活体の本質は行動にあり、行動の本質は学習にある。また学習が生じるのは記憶というメカニズムが存在するためであり、学習の本質は記憶にある。また記憶されるものは、感覚や感情といった経験である。では、感覚や感情とはいっていい何か。このように、本講義では私たちヒトを含む生活体の持つ様々な機能を統一的な視点から概観することにより、基礎的な生体機能の理解とともに、それがどのように臨床援助に役立つかを考える。講義を中心に進めるが、必要に応じて視聴覚教材等も効果的に盛り込む。受講者は既にある一定レベルの知識を有していると思うが、再度視野を広げるという視点から積極的に参加して頂きたい。

2. 授業の内容

①テーマ：生活体にとって何が重要か

私たちヒトや動物にとって何がどう重要な機構なのか。その原点を行動におき、そこから様々な機構を位置づける。すなわち、反射やホメオスタシスなどの生得的な機構あるいは学習現象としての古典的条件づけやオペラント条件づけの持つ意味、あるいは学習メカニズムとしての記憶、行動の手がかりとして機能しあつ記憶される内容となる、認知機能を概観する。

②テーマ：生得的な行動機構の意味について—反射

体内機関や機能の調整を司るホメオスタシスとともに、個体レベルの行動機構として様々な反射機能が生まれつき備わっている。刺激に対して 1 対 1 に対応する反射はその機構が極めてシンプルであることに起因するが、そのことはまた別の重要な意味を持つ。この反射弓と呼ばれる神経機構を軸に、生活体の適応における反射の意味を考える。

③テーマ：生得的な行動機構の意味について—古典的条件づけ

反射は刺激に対して 1 対 1 に対応し、かつその発動には意志や意図などは関与しない。意識の関与しないことが呼吸や血圧などの生命維持に好都合ではあるものの、換言すれば常に固定的にしか機能しないため、予測不可能な環境の変化に対して様々な不利益が生じる。ところが、反射にも学習が生じ、その不利益を回避する働きがある。生体機能の不思議さを考える。

④テーマ：後天的な行動について—オペラント条件づけ

生得的な機構だけでは予測不可能な環境の変化に対応することができない。そのため、生活体には意図的に行動するための機構が備わる。古典的条件づけに示されるような生得的な機構の学習を除けば、後天的に獲得する行動の大部分がこれによる。機構の生起には意志や意図が必要であるため一見規則性がありえないよう思えるが、そこに明確な法則のあることを理解する。

⑤テーマ：学習の意味を考える

具体的な事例を通して生活体の持つ学習の持つ意味を考える。もっとも適切だと思われる事例の 1 つは、脳損傷からの機能の回復過程であり、その過程は学習、すなわち新たな行動を獲得する際にも機能する重要なメカニズムが関与する。その巧妙なメカニズムの基礎的な理解に基づき、学習の持つ意味、あるいは援助のあり方などについて考える。

⑥テーマ：行動を支える機構—記憶のメカニズム

経験によって新たな行動パターンを獲得する、あるいはすでに有する行動パターンをよりスマーズなものへと変化させる。これが学習であるが、問題はなぜ獲得され、変化できるかという点であり、それは行動を可能にするしくみが存在することを示唆する。そのしくみが記憶である。では、その記憶とはどのようなしくみを持ち、またどのような機能を司っているかを考える。

⑦テーマ：記憶の意味を考える

具体的な事例を通して記憶の持つ意味を考える。もっとも適切だと思われる事例の1つは、脳損傷による記憶障害であり、その事例を概観することによって、その障害によってどのような問題が生じるか、あるいはどのような援助が可能なのかについて考える。なお、必要があれば従来知られている記憶障害について後の講義で概説することがある。

⑧テーマ：行動の手がかりとして機能する機構・経験の意味—視覚について①

生活体の本質は行動にあり、行動の本質は学習にある。また学習が生じるのは記憶というメカニズムが存在するためであり、学習の本質は記憶にある。では、記憶されるものは何か。それは感覚や感情といった経験である。ところが、インパルスの伝導・伝達に過ぎない神経系の活動から、どのように私たちの経験は生み出されるのか。経験の謎を考える。

⑨テーマ：行動の手がかりとして機能する機構・経験の意味—視覚について②

感覚や感情といった私たちの何気ない経験が、どのようなメカニズムで生み出されるのか。その探求に最も示唆を与える経験の1つは視覚、特に色覚であると思われる。その色覚に関し、ヤング・ヘルムホルツの3色覚説やヘーリングの反対色説など、色覚の基本事項を軸に、関連のある色覚現象および感情の理論など経験という観点から概観する。

⑩テーマ：行動の手がかりとして機能する機構・経験の意味—視覚について③

第9回に引き続き、感覚や感情といった私たちの何気ない経験が、どのようなメカニズムで生み出されるのか、その探求に関わる知見を概説する。本講義では、可視光線と視覚像、加法混色、減法混色、色の3属性に見る心理学的、物理学的、生理学適対応、色の恒常性や明るさの恒常性などに焦点を当てる。

⑪テーマ：行動の手がかりとして機能する機構・経験の意味—視覚について④

第10回に引き続き、感覚や感情といった私たちの何気ない経験が、どのようなメカニズムで生み出されるのか、その探求に関わる知見を概説する。本講義では、ペツオルト・ブリュッケ現象、アブニー効果など色覚の基本的な知見を軸に、網膜神経節細胞の可視光線の受容構造をはじめ、色順応、色の対比など身近な色覚経験に焦点を当てる。

⑫テーマ：行動の手がかりとして機能する機構・経験の意味—視覚について⑤

第11回に引き続き、感覚や感情といった私たちの何気ない経験が、どのようなメカニズムで生み出されるのか、その探求に関わる知見を概説する。本講義では、主に従来色覚理論では説明の難しい現象を軸に、主観色、記憶色、色の現れ方、ストループ効果などの知見、あるいは色彩がもたらす効果という観点から関連する知見に焦点を当てる。

⑬テーマ：行動の手がかりとして機能する機構・経験の意味—視覚について⑥

第12回に引き続き、感覚や感情といった私たちの何気ない経験が、どのようなメカニズムで生み出されるのか、その探求に関わる知見を概説する。本講義では、視覚そのものの生理学的な知見と、それに基づいて生じる視覚現象に焦点を当てる。前者の話題は視交叉の機構や眼球運動などであり、後者の話題は幾何学的錯視や仮現運動などである。

⑭テーマ：視覚について考える

具体的な視覚障害を通して私たちが何気なくしている経験、特に視覚経験の持つ意味を考える。視覚障害によってどのような問題が生じるか、あるいはどのような援助が可能なのかについても考える。なお、必要があれば従来知られている視覚障害について概説する準備もある。視覚障害の内容を知ることは、私たち自身の経験の意味を理解すること役立つと思われる。

⑮テーマ：認知と行動の統一的な視点から得られるもの

生活体の本質は行動にあり、行動の本質は学習にある。また学習が生じるのは記憶というメカニズムが存在するためであり、学習の本質は記憶にある。また記憶されるものは、感覚や感情といった経験である。では、インパルスの伝導・伝達に過ぎない神経系の活動から、どのように経験は生み出されるのか。こうした統一的な視点が臨床援助にどのように役立つかを考察する。

3. テキスト

特に指定しない。

4. 参考図書

必要に応じて隨時紹介する。

5. 成績評価方法

出席 20%，受講態度 30%，及び筆記試験 50% の比率に基づき、総合的に判断する。

6. オフィス・アワー

毎週月曜日 17:00～18:00

7. 備考

1) 遅刻や無断欠席はぜひ謹んで頂きたい。2) 授業の状況に応じて内容を変更することがある。

1. 授業の概要

われわれの行動の多くは、自己を取りまく環境への適応の試みとして理解することができるが、なかでも他者は最も大切な環境の一つである。他者に対して適切な行動をし、他者との間に良好な人間関係を築き上げるためには、他者の「感情、意図、性格、態度、能力、予想される行動」について理解することである。本講義では、社会的欲求、社会的認知、社会行動、集合行動について、科学的に理解することを目的とする。

2. 授業の内容

① 社会的欲求 (1) :

人々の行動を引き起こす原因（動機）のうち、生理的原因（動機）を動因、心理的原因（動機）を欲求と呼ぶが、本講義では社会的行動を引き起こす代表的な欲求である、1) 親和欲求、2) 承認欲求、3) 社会的比較欲求、について理解する。

② 社会的欲求 (2) :

前回に引き続き、社会的欲求の内、4) 独自性欲求、5) 達成欲求、6) 支配欲求、7) 攻撃欲求、について学ぶ。

③ 対人認知の基礎：他者との間に良好な人間関係を築き上げる基本は、他者をどのように理解するか、という対人認知にある。

この回では、1) 他者の情緒の判断、2) 性格や態度の理解、3) 印象の形成、4) 社会的ステレオタイプと偏見、5) 対人魅力の形成などについて学ぶ。

④ 帰属過程：人は他者について理解するとき、表に現れた行動結果の観察から、行為者の内面を推論するが、このような過程を取り扱うのが帰属過程の理論である。

ここでは、1) 帰属錯誤、2) 成功と失敗の帰属、3) 責任の帰属などを中心に学ぶ。

⑤ 自己認知と行動：我々は社会的存在として、他者との相互作用のもとで自己を形成し理解している。他者の理解は同時に自己の理解と自己の行動のあり方を決定している。

本講義では、1) 自己概念の形成と行動の関係、2) 自己の客体視と行動のコントロール、3) 自己提示と印象操作について学ぶ。

⑥ 態度と行動：生得的「本能」の概念に対して、文化や環境によって形成される態度という概念は、社会的行動を説明したり、予測したりするのに都合が良く、社会心理学の中でもよく使われる仮説的構成概念である。

1) 態度がどのように形成され変化していくのか、2) 態度の心理・社会的機能とは何か、3) 態度がどのように人々の行動を規定していくのかについてそのメカニズムを理解する。

⑦ 社会的促進と社会的抑制：人々の行動や態度、感受は他者との相互作用によって影響を受ける。

ここでは、1) 他者の存在によって課題遂行量が増加する社会的促進と、2) 他者の存在によって一人当たりの課題遂行量が低下する社会的抑制について学ぶ。

⑧ 集団過程：人は社会的存在として、何らかの集団に所属し、その集団における適応を図っている。そこで、集団の持つ影響関係について、1) 集団圧力と同調行動、2) 集団凝集性、3) リーダーショップ行動を中心にして理解する。

⑨ コミュニケーション：人間の社会的相互作用の多くは、コミュニケーションによって行われている。ここでは、1) コミュニケーションの基礎理論、2) ノンバーバル・コミュニケーション、3) コミュニケーションと説得、4) シンボリック相互作用論などについて学ぶ。

⑩ 援助行動：向社会的行動に一つである援助行動について、援助者の規範や能力などの内的要因と緊急性や重大性などの環境・状況要因の両面から学ぶ。

援助行動については、1) 規範の内在化、2) 援助コストと報酬、3) 責任分散説、4) 傍観者効果、5) 交換理論と援助、などを中心に理解する。

⑪ 攻撃行動：人間の社会行動の内、肯定的な面である攻撃行動について学ぶ。

攻撃行動については、1) 本能に基づくとする内的衝動説、2) ダラードのフラストレーション攻撃仮説や攻撃は不快感情の発散に基づくとするバーコウィッツの考え方による情動表出説、3) 攻撃の持つ目標試行的な面について説明する社会的機能説、の3つを中心に学ぶ。

⑫ 集合行動の基本：不特定多数の人々が集まると、そこには個々人の行動を越えた固有の行動様式や心理的メカニズムが存在する。集合行動は自然発生的に生じ、比較的組織化されていない人間集団の社会的相互作用のパターンであり、無計画であるがゆえに予測可能性の低い現象である。第1回は、集合行動が発生する基本的なメカニズムについて学ぶ

⑬ 流行と普及過程：服装、髪型、所有物の流行や、行動の様式、思想や価値観などが、社会の成員に伝達され共有されていく普及過程について学ぶ。このプロセスにおいて、マスメディアやオピニオン・リーダーが果たす役割などについて理解する。

⑭ 流言とデマ：流言はその内容について必ずしも真偽がはっきりしない情報でありながら、時に公的情報以上に真実を伝えたり、人々の社会的理解や行動の決定に、重大な影響を与えることがある。この流言の発生メカニズムと影響過程について、デマとの比較を通して学ぶ。

⑮ 講義全体を通じた質疑応答を行い、学生の疑問に応えるとともに、社会心理学的な知識を、現実の問題解決に応用する方法について理解を深める。

3. テキスト

特に定めないが、講義の進行に合わせて資料を配付する。

4. 参考図書

対人行動学研究会編「対人行動の心理学」誠信書房

大橋正夫・長田雅喜編「対人関係の心理学」有斐閣大学双書

5. 成績評価方法

出席 30%、受講態度 30%、レポート 40% の総合評価。

6. オフィス・アワー

毎週月曜 18:00~19:00

7. 備考

特になし。

1. 授業の概要

昨今の社会の急激な変化（自然及び生活環境の悪化、家庭機能の不全化など）によって、人の人格発達の過程は大きな影響を受け揺らいでいる。幼児虐待、不登校から引きこもりへ、青少年の病的な犯罪、中高年の自殺や危機などといった現象は、その背景にある発達的問題の解明と解決を迫っており、その要請に貢献できる研究分野として生涯発達（life-span development）心理学がある。本講義では、生涯発達の各段階の特徴的テーマとそれにまつわる臨床的問題に関する諸研究について学ぶ。

2. 授業の内容

- ① 授業のガイダンスを行い、まず生涯発達心理学という研究分野の概論について講義を行う。特に発達心理学と心理臨床学のコラボレーション（協働）的アプローチの必要性について、その歴史的、理論的背景を中心に学習する。
- ②（胎児期から出産まで）胎児期における母親の情動の変化（心的な葛藤、極端に強い不安、妊娠に対する否定的感情など）と、胎児の「心的」「生理的」「病理的」諸問題との関係について学習する。加えて、近年注目されている「出生前診断（prenatal diagnosis）」や「遺伝カウンセリング（genetic counseling）」についても学習し、胎児期の母子への心理的援助について考察する。
- ③（乳児期）人格の基底を形成する重要な時期である乳児期の心理発達について学習する。特に親一乳児の関係性の発達に注目した情動調律（affect attunement）（Stern,1985）という現象とその概念について理解を深める。
- ④（幼児期）第一養育者との「二人関係」（乳児期）から他者の登場する「三人関係」（複雑で葛藤性の高い心的世界）への移行期で、より複雑で重層的な心的パターンが形成される幼児期について学習する。具体的には、移行対象（Winnicott,D.W）や分離・個体化（Mahler et al）、エディプス期（Freud,S）などこの時期に重要な発達課題について学習する。
- ⑤（児童期）子どもの心的世界は家族から学校という社会的機能を持った集団へと広がっていく。この時期におけるモデリングなどの社会的学習理論にもとづく性役割や道徳性の発達、前思春期におけるギャングエイジからチャム関係（Sullivan,H.S）への友人関係の発達の意味などについて学習する。加えてこの時期に見られる不登校やいじめなどの臨床的問題についても学習する。
- ⑥（思春期・青年期）児童期から成人期への過渡的な段階としての「思春期・青年期」は、第二の分離・個体化の時期（Bloss,P.）といわれるごとく、人格発達のひとつの節目に当たる時期である。この時期の中心的発達課題である「親離れ」と「自立」に伴う、内的な対象喪失とモーニング（喪）、アイデンティティの確立という内的な発達のプロセスとそこでの臨床的問題について学習する。
- ⑦ ①～⑥までの講義内容について、その要点と疑問点をまとめたレポート課題1を提出する。その内容について各自発表しディスカッション形式で学習する。特に各時期特有な臨床的テーマについての各自の理解度を把握する。
- ⑧（成人期）少子化と長寿化によるライフサイクルの変化は、成人期とくに40～65歳くらいまでの中高年の時期の心理的世界に大きな影響を与えてきている。青年期に獲得したアイデンティティでは、その後の長い一生を支えきれなくなってきた現代の成人期が抱える多くの臨床的問題（うつや自殺など）とそれに対する心理臨床的援助や研究について学習する。
- ⑨（老年期）老年期は、人間性の成熟、最後の仕上げの時期であると共に身体・精神両面にわたる機能低下や喪失の危機をはらんでいる時期でもある。老年期の問題は、個人差が大きく、一人ひと

りの問題の背景を、できるだけ包括的、多層的、具体的に理解することが求められる。このような視点に立ち、老年期の臨床的問題（痴呆、うつ病、せん妄など）とその援助について学習する。

⑩（死の臨床：ターミナルケア）生涯発達の最後のステージとして、「死」をどう受け入れ迎えるかという発達課題がある。この課題は、その当事者だけでなくその人の生を支え守ってきた周囲の人々にとっても大きな意味を持つという二重構造的な特徴を持つ課題である。ここでは「死にゆく人の心理過程」と「みおくる人の心理」、その際の心理的援助とは何かについて学習する。

⑪ ⑧～⑩までの講義内容について、その要点と疑問点をまとめたレポート課題2を提出する。その内容について各自発表しディスカッション形式で学習する。特に各時期特有な臨床的テーマについての各自の理解度を把握する。

⑫（関係性の発達－母子関係）生涯発達心理学では、人間の発達を受精から死に至るまでの全生涯における発達的変化の過程と捉えるが、その過程は「関係性の発達」の中で育まれていく過程としても捉えられる。その中で特に重要と思われる、「母子関係の発達」について乳幼児精神医学の諸研究をもとに学習する。

⑬（関係性の発達－夫婦関係・家族関係）⑫のテーマ「関係性の発達」の続きとして「夫婦関係」と「家族関係」について、その発達と課題、危機及び病理（DVなど）と心理的援助について学習する。特に近年注目されている、ブリーフセラピーやナラティブセラピー、心理教育的アプローチについても学習する。

⑭（心的外傷）虐待や災害など生涯発達のいずれの時期にも起こりうる可能性があり、その発達に深刻かつ重大な影響を与える心の傷（トラウマ）について学習する。特に虐待を受けた子どもの特徴や精神医学的な問題とその治療について学習する。

⑮ ⑫～⑭の講義内容の要点と疑問点および全講義を通した感想をまとめてレポート課題3として提出する。その内容について各自発表しディスカッション形式で学習し、生涯発達心理学についての各自の理解度を把握する。

3. テキスト

講座 臨床心理学5 発達臨床心理学 下山晴彦 丹野義彦 編 東京大学出版会

4. 参考図書

講座 生涯発達心理学－1 生涯発達心理学と何か 理論と方法 無藤隆ら編 金子書房
人間の発達と臨床心理学1 生涯発達と臨床心理学 伊藤隆二ら編 駿河台出版社

5. 成績評価方法

出席30%、受講態度20%、レポート内容評価50%で総合的に評価する。レポート内容評価は3回のレポート提出毎に行い、最終の総合評価の判断に組み入れる。

6. オフィス・アワー

e-mail address: yamaki@shigakukan.ac.jp

7. 備考

遅刻・無断欠席厳禁、レポート提出日厳守のこと。

1. 授業の概要

コミュニティ心理学は、悩める個人とその環境に同時に働きかけ、両者の適合性の改善を図ろうとするものである。個人を診断・治療するだけでなく、その環境をも分析しそこへ介入できることをこの講義の目的とする。そのためにはまず、コミュニティ心理学誕生の歴史、基本的な考え方、危機介入やコンサルテーションなどの方法論を講義する。そして、各フィールドにおいて展開されているコミュニティ心理学的実践例について学び、所謂、コミュニティセンスを高めるようにする。

2. 授業の内容

①精神医学において第三の革命と言われている「地域精神医学」とその結果生まれてきたコミュニティ心理学の歴史を、J.F.ケネディの大統領教書・ボストン会議・オースティン会議に触れながら解説する。

②Korchin の主張するコミュニティ心理学の主題 13 について学ぶ。①社会的環境的諸要因は、行動を決定し変化させる非常に重要なものである。②社会的地域的介入は、社会制度をより健康的なものにするために、個人の苦悩を軽減するためと同様に、効果的であるうる。などの 13 項目である。

③Murrell の 6 つの介入のレベルを学ぶ。なによりもまず、コミュニティ心理学的意臨床の発想の第一は、個人の再配置である。つまり、個人の治療教育のために個人の内界を分析したりするのは第二番目の発想で、例えば、担任をかえるとか、親から引き離してみるなどについて学ぶ。

④Caplan の第一次予防、第二次予防、第三次予防について学ぶ。つまり、発生予防、早期発見早期治療、社会復帰についてである。障害児の治療教育や伝染病への対策をコミュニティ心理学的発想から計画できる力を蓄える。

⑤Bloom や山本和郎の主張する、コミュニティ心理学的発想と伝統的な臨床心理学的発想のちがいについて学ぶ。また、相手の土俵で勝負する、専門家中心主義から地域中心主義への発想の転換を学ぶ。

⑥Sarason のコミュニティセンスについて学ぶ。つまり、個人だけでなく、家族や集団、組織、コミュニティ、政策などへも目をむくことができるよう感覺を磨く。

⑦方法論のひとつである、コンサルテーションについて学ぶ。カウンセリングやスペービジョンとは異なるコンサルテーションを、クライエント中心のケースコンサルテーション、コンサルティ中心のケースコンサルテーション、コンサルティの職業上の課題に焦点をあてたコンサルテーションなどについて学ぶ。

⑧危機介入について学ぶ。危機の定義、特徴、意義、期間などについて自殺防止運動の取り組みや自然災害への際の取り組みを例に、カウンセリング室という密室からコミュニティのなかへでてきて活動する様子を学ぶ。

⑨ボランティア論について学ぶ。これからの福祉的なアプローチは、施設からコミュニティへ、その場を変える。また高齢者や障害者へのアプローチも、病院や施設からコミュニティのなかのグループホームなどへその拠り所が変わっていく。こういった際にボランティアの動きが重要な働きを持つことになる。ここではこれからの社会とボランティアの役割について学ぶ。

⑩実践活動について学ぶ。まずは、異文化適応プログラムの展開である帰国子女の再適応プログラム、中国残留孤児の日本への適応プログラムなどについて学ぶ。

⑪緩和ケア（ターミナルケア）でのコミュニティ臨床心理学的アプローチについて学ぶ。3人にひとりが癌で死に行く現在の日本においては、単に癌患者本人だけの問題ではなく、家族を含めたコミュニティの問題として捉え、このことを契機に社会全体が「生と死」について学び、いかに生きて行くかということを学ぶ機会として捉えている。

⑫スクールカウンセリングについて学ぶ。生徒個人への心理療法だけでなく、校長や先生方へのかかわり方、教室に出かけて健康増進のための授業をすることなどを含めた活動に浮いて学ぶ。

⑬障害児の施設での取り組みについて学ぶ。コミュニティに開かれた施設として、障害児が通うだけでなく、母親のための教室、父親のための教室、きょうだいのための教室、その地域のボランティアのための教室などを、障害児の施設がコミュニティ心理学的発想から展開している。

⑭自閉症児への治療教育の事例に学ぶ。自閉症児との個人的なかかわりだけでなく、家族や担任やボランティアの学生を巻き込んだ、300人くらいの教室を展開しているが、そこで実体験しながら、「共に生きていこう、生きていくんだ」ということを学ぶ。

⑮集団の雰囲気と生産性について学ぶ。集団のリーダーのもつ特性や雰囲気によって、部下の生産性が上下してくることが以前から報告されているが、個人の能力だけでなく、集団の雰囲気によって生産性が変化することを、病院や会社の組織の中で実体験しながら学ぶ。

3. テキスト

平川忠敏 2005 コミュニティ心理臨床家の役割 松原達也他編著 心のケアのためのカウンセリング大事典 培風館

4. 参考図書

山本和郎 1986 コミュニティ心理学——地域臨床の理論と実践——

Oxford 著（山本和郎監訳 1997 コミュニティ心理学 理論と実践 ミネルヴァ書房）

5. 成績評価方法

出席点はもとより、レポート発表を3回行いこの分を50%，討議への参加の度合いを50%とし、さらに、環境介入への実務力を考慮する。

6. オフィス・アワー

月・火・木・金曜日の午後

7. 備考

特になし

1. 授業の概要

健康には、身体的健康と精神的健康があるが、両者は相互に深く関係している。講義では、児童期から老年期に渡る全ての年代に発症する精神疾患の概要について講義を行い、精神と身体の関わりについての理解や、精神疾患の治療法や予防について学習してもらう。特に、実際の患者さんへ接することを想定した実践的な対応や注意点について重点を置く。一方的な講義にならないように、適宜、意見や感想を述べさせる時間を設ける。

2. 授業の内容

①総論として、精神障害とは何か、どのような疾患・病態が含まれるかについて概説する。精神病状の見方・取り方について説明し、診断の流れや、一般的な経過、治療法、予後等について学習する。また、スライドなどを使って精神病院の外観等などを紹介する。

②精神病とはいかなる病態を指すのかについて概説する。精神病のそれぞれについて大まかに原因、症状、経過、予後等について説明する。その後、自ら持っていた精神障害についての偏見などの存在について発言させる。

③「こころ病める人たち」石川信義著（岩波新書）についての感想文を提出させる。精神病院や日本の精神科医療がたどってきた道について学習させ、講義の中で、感想や意見を発表し、学生間での内容の捉え方の違いについてディスカッションする。

④統合失調症について概説する。発現頻度と発症年齢、体格と性格との関係、原因及び症状、治療法について講義する。統合失調症の3型について、典型例の発病経過、症状の違いについて説明する。

⑤気分障害について概説する。概念、発現頻度と発症年齢、体格と性格との関係、治療について学習する。躁状態およびうつ状態の発症経過について、典型例を示して説明する。うつ病に特徴的な症状や妄想、自殺の問題、身体症状などについて詳解する。

⑥伝統的診断での神経症について操作的診断も紹介しながら概説する。神経症の成立機転、性格との関係、防衛機制などについて学習する。下位分類について詳解する。神経症の治療法についてフロイトの精神分析を含め説明する。

⑦心身症について、その定義、成立機序、分類などについて概説する。器官選択について、また、共通する心理的特徴などについて説明する。心身症の治療、代表的な心理療法について詳しく学習する。

⑧PTSD（心的外傷後ストレス障害）について概説する。その定義、心的外傷の種類、特徴的な症状、発症の要因などについて学習する。いろいろな原因に起因する症例を提示し、治療法について説明する。

⑨精神保健福祉法について概説する。精神病者監護法から始まる日本の精神保健分野における法律の歴史について学習し、それぞれの法律制定の契機となった事件等について詳解する。精神保健福祉法について、入院制度を含め説明する。

⑩司法精神医学について概説する。責任能力について説明し、精神鑑定の流れについて詳解する。触法精神障害者と精神鑑定との関係、また、医療観察法の制定と制度制定の背景などについて学習してもらう。

⑪てんかんについて概説する。脳の解剖生理、活動電位について説明し、脳波検査法、脳波、キンドリング現象などについて学習する。てんかん発作の分類を詳解し、それぞれに対する治療法の違いなどについて説明する。

⑫薬物依存について概説する。WHOによる薬物依存の分類に従って、薬物の種類、依存や耐性の問題について学習する。特に、急性アルコール中毒、アルコール依存症、アルコール精神病について詳しく学習する。治療については、社会的治療、抗酒薬の使い方などについて説明する。

⑬青年期に好発する思春期妄想症（重度対人恐怖症）について概説する。思春期妄想症の症状の特徴、統合失調症との違い、発症と思春期心性との関連について、自己視線恐怖症、自己臭恐怖症、醜形恐怖症のそれぞれの症例を紹介し学習させる。

⑭知的障害について概説する。知的障害のWHOによる定義について学習する。知的障害を来たす主な疾病ならびに病態として、ダウントーク症、早期幼児自閉症などについて説明する。また、老年期に痴呆を呈する疾患について合わせて概説する。

⑮摂食障害について概説する。神経性食思不振症ならびに過食症について学習する。思春期・青年期の発達課題と摂食障害との関連、症状の特徴、家族背景などについて詳しく説明し、ビデオを供覧する。

3. テキスト

なし

4. 参考図書

石川信義著「こころ病める人たち」岩波新書

5. 成績評価方法

出席 40%，レポート 10%，筆記試験 50%

6. オフィス・アワー

保健管理センターでの勤務時間帯 e-mail:morioka@cm.eee.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

異常心理学に興味があり、熱心に受講できる者

1. 授業の概要

医薬品の作られる開発段階から商品化されるまでの創薬プロセス、処方薬としての化学名を商品名、先発医薬品と後発医薬品の相違を知り、くすりを身近に感じる知識を習得し、臨床心理士がくすりのことを知る構えについて学ぶ。その上で、向精神薬：抗精神病薬、抗うつ薬、抗不安薬、睡眠薬などのこころの病に用いられる薬に精神薬理学的知識を得て、医師や薬剤師とコラボレートする能力と服薬を支えることを通したクライエントの生活支援のあり方について学ぶことを目標とする。

2. 授業の内容

①受講生自身の一般的なくすりに対する認識についてグループディスカッションを実施し、自分自身のくすりに対する認識を明確化する。また、睡眠導入剤、抗うつ剤、抗精神病剤についての自分の知識と一般的な偏見について知る。患者が抱くくすりに対する不安や不信感の持ち方を推察する視点を養う。最後の講義で再度、グループディスカッションを行う。

②身近にある医療用あるいは一般用医薬品がどのようにして市販のものとなるのかという創薬のおプロセス、つまり、くすりの種から市場で販売されるまでの開発プロセスについて学習する。また、風邪くすりや生活習慣病に対するくすりと精神疾患に対するくすりの開発経緯について知り、疾患病態への関心を醸成する。

③中枢神経系 (Central Nervous System: CNS) について、脳の構成から構成部位、ならびに構成部位と機能の対応、CNS の機能的分類、神経伝達物質などの生理学的知識を学ぶ。また、精神病理に関与する CNS および神経伝達物質について学び、抗精神病薬、抗うつ薬、抗不安薬、睡眠導入薬の薬理学的理解の基礎的知識を得る。

④受講生を 5 グループに分け、精神科領域で治療を要する統合失調症、うつ病、人格障害、不安障害、神経症、睡眠障害、てんかん、アルツハイマー病を振り分け、グループ調査を実施する。グループ調査は、授業時間内において図書館や研究科所蔵図書を参照しながらグループ調査を実施し、こころの病の病態、症状と治療方法について学ぶ。

⑤④での調査結果をまとめ、2つのグループによる発表を実施し、知識の共有化をはかる。また、グループディスカッションにより、各病態の理解と治療に用いるくすりの対応関係を明確する。さらに、各病態と治療方法を通して薬効をあらわすための薬理学的、薬物動態学的理解を深める。

⑥④での調査結果をまとめ、3つのグループによる発表を実施し、知識の共有化をはかる。また、グループディスカッションにより、各病態の理解と治療に用いるくすりの対応関係を明確する。さらに、各病態と治療方法を通して薬効をあらわすための薬理学的、薬物動態学的理解を深める。

⑦④での調査結果を踏まえ、再度、CNS および神経伝達物質を踏まえた精神科疾患の病態ならびに病態に応じたくすりの薬理学的説明を行う。具体的には、統合失調症、うつ病、不安神経症、てんかん、アルツハイマー、睡眠障害に関連する主要な CNS と神経伝達物質について説明し、治療薬の薬理学的理解を深める。

⑧統合失調症、うつ病、強迫神経症、うつ状態、睡眠障害、てんかん、そううつ病などの精神科疾患を持つ患者へ処方される模擬処方箋を各グループ 3 枚ずつ配布し、処方箋に記載されているくすりの薬効を調査し、処方組合せから患者の病態と状態について分析する。

⑨ ⑧で実施した処方箋分析について、2グループがそれぞれ発表し、全体としての知識の共有をはかる。処方箋分析から得られた患者の薬効から病態推理力を養う。

⑩ ⑧で実施した処方箋分析について、3グループがそれぞれ発表し、全体としての知識の共有をはかる。処方箋分析から得られた患者の薬効から病態推理力を養う。

⑪ ⑧～⑩で実施してきた処方箋分析の結果を踏まえて、患者が抱えるくすりへの不安について各グループでディスカッションし、全体ディスカッションを行う。患者が考えるくすりへの不安について理解する。また、患者のくすりとの上手なつきあい方と支え方について検討する。

⑫ 想定問答集の作成（薬学的知識を有する臨床心理士としてのたしなみ）

患者が、臨床心理士に対してくすりに対する不安や不満を訴えた場合、どんなことを訴えてくる可能性があるのかについて各グループでディスカッションを行い、患者のくすりにまつわる不安についてのひとりひとつになるよう想定問答集を作成する。

⑬ 各受講生それを2人ずつに分け、患者役と臨床心理士役とし、想定問答集をもとにロールプレイを実施する。全員がそれぞれの役割を取り、上手なくすりとのつきあい方、くすりに不安を抱える患者の支え方について学ぶ。

⑭ 前授業のつづきとして、患者役と臨床心理士役のロールプレイを実施する。全員がそれぞれの役割を取り、上手なくすりとのつきあい方、くすりを服用することに不安を抱えつつ治療を受ける患者の生活支援のあり方について学ぶ。

⑮ 最終試験を実施する。まとめとして、受講生自身のくすりに対する認識と患者のくすりに対する不安や不信感のあり方についてグループディスカッションを実施する。講義一回目で得た理解との比較を行い、受講生自身ならびに一般の人びとのくすりに対する不安の抱きやすさについて理解を深める。

3. テキスト

隨時、講義の流れやグループ調査時に必要かつ有効な文献、書籍などを紹介する。

4. 参考図書

『心の臨床家のための精神医学ハンドブック』 小此木啓吾ほか

『看護のための精神医学』 中井久夫、山口直彦著

『こころの治療薬ハンドブック』 青葉安里、諸川由美代編

『精神・心理症状学ハンドブック』 北村俊則著

5. 成績評価方法

成績評価としては、出席30%、発表回数30%、討論への参加度20%、最終試験20%の比率で行う。発表回数、討論への参加度は、グループ対抗の討論形式での活発な議論に対して質・量ともにグループとして評点をあたえる。

6. オフィス・アワー

月曜日：17:00～18:00, e-mail : haramaki@leh.kagoshima-u.ac.jp

7. 備考

本講義は、グループディスカッションが多いので受講生同士が連絡体制を取れること。